

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第225集

西一里塚遺跡群

にし いち り づか
西一里塚遺跡 I

長野県佐久市岩村田字西一里塚遺跡 I 発掘調査報告書

(弥生時代後期集落と環濠)

2014.9

長野県佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第225集

西一里塚遺跡群

にし いち り づか
西一里塚遺跡 I

長野県佐久市岩村田字西一里塚遺跡 I 発掘調査報告書

(弥生時代後期集落と環濠)

2014.9

長野県佐久市教育委員会

報告書の概要

昭和48年の佐久市北部地区圃場整備事業・小規模河川改良事業にともなう西一里塚遺跡Ⅰの発掘調査である。河川改修事業により全く新たに現在の濁り川が設けられている。改修以前の本流の濁り川は北にある平塚集落の北を西流し、千曲川に注いでいた。

発掘調査から40年をへて、調査員であった佐久考古学会員の方々は他界され、大学生の面々も60歳を過ぎている。昭和48年ころは今のような調査の体制は整ってはいないなかでのことである。調査をせず遺跡を埋もれさせてはならないという考古学に対する情熱だけをもって、寒風吹きさらす佐久平において発掘調査が行われている。「県下初の環ごう」として新聞報道されている。今回、報告書として先人の成果を刊行できることは喜ばしいことである。

西一里塚遺跡Ⅰの主な時代は弥生時代後期で、遺構は竪穴住居址・土坑・環濠を検出している。

竪穴住居址

弥生時代後期の吉田式期と箱清水式期と後期全般にわたる集落で、10棟を調査している。なかでも後期後半新しい箱清水式期に全盛期を迎えている。

土坑

骨片・炭化物層を伴う土坑に弥生後期の土器を伴う。土壙墓と考えられる土坑であろう。

環濠

調査区の北に弧を描く大溝がM5号溝址である。

溝は最大値で上幅4m、下幅2.6m、深さ78cmを測る。

この溝は南と西に延長して南北115m、東西は西端が確認されていないが今のところ162mまでわかっている。東西方向に長い長楕円形を呈すようである。

環濠出土器は弥生後期の吉田式から箱清水式期、弥生後期末からの土器が出土する。弥生後期後半の箱清水式土器が下部から、その上面に弥生後期末の土器が出土している。

これらよりこの環濠は弥生後期後半に掘られ、弥生後期末を最終として埋もれたようである。



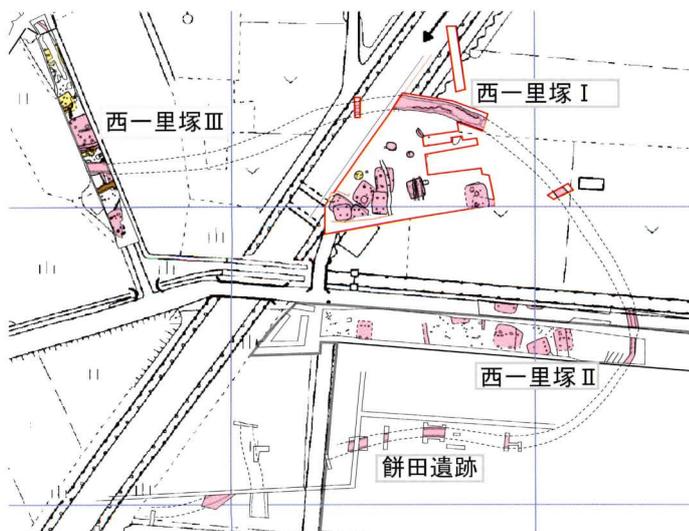
Y 2-39 裾付き高杯脚



D 1-1 杯



M 5-181 S字襷
土器 (1:2)

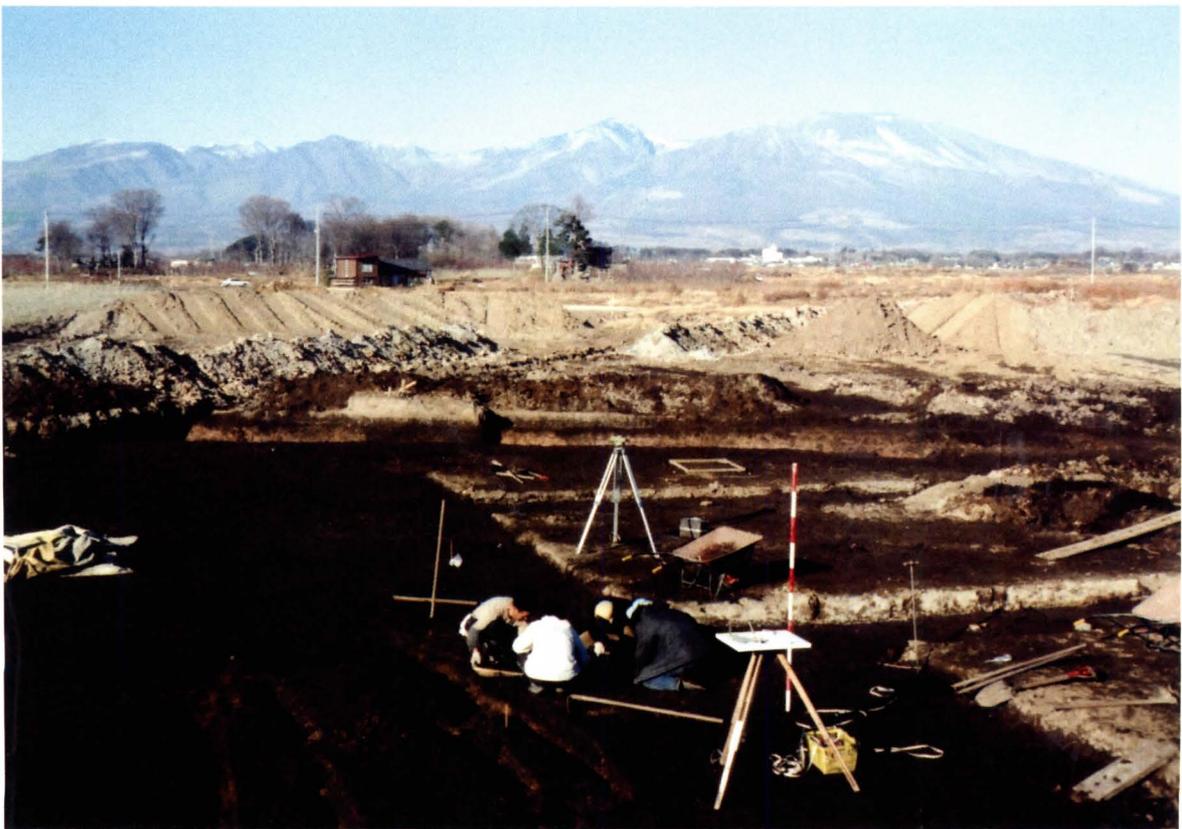


西一里塚遺跡弥生後期の集落と環濠 (1:2,000)



遺跡遠景（平成16年、県埋蔵文化財センター撮影 北西より）

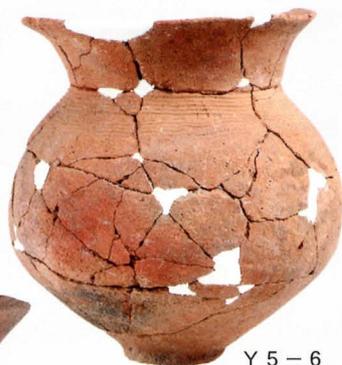
中央のビニールハウス地点が西一里塚遺跡群にあたる。
道路を挟んで西一里塚Ⅱ・餅田遺跡となる。手前にある発掘中の地点が県の調査地点である。



調査風景（昭和48年、Y1号住居址付近 南より）



Y 5-5



Y 5-6

Y 5号住居址



Y 7・Y 5・Y 6号住居址 (南より)



Y 8-48

Y 8号住居址



Y 7号住居址 南西隅 (南より)



Y 8-17



Y 7号住居址 5・7高坏・壺出土状況



Y 7-5



Y 7-1



Y 7-6



Y 7-7

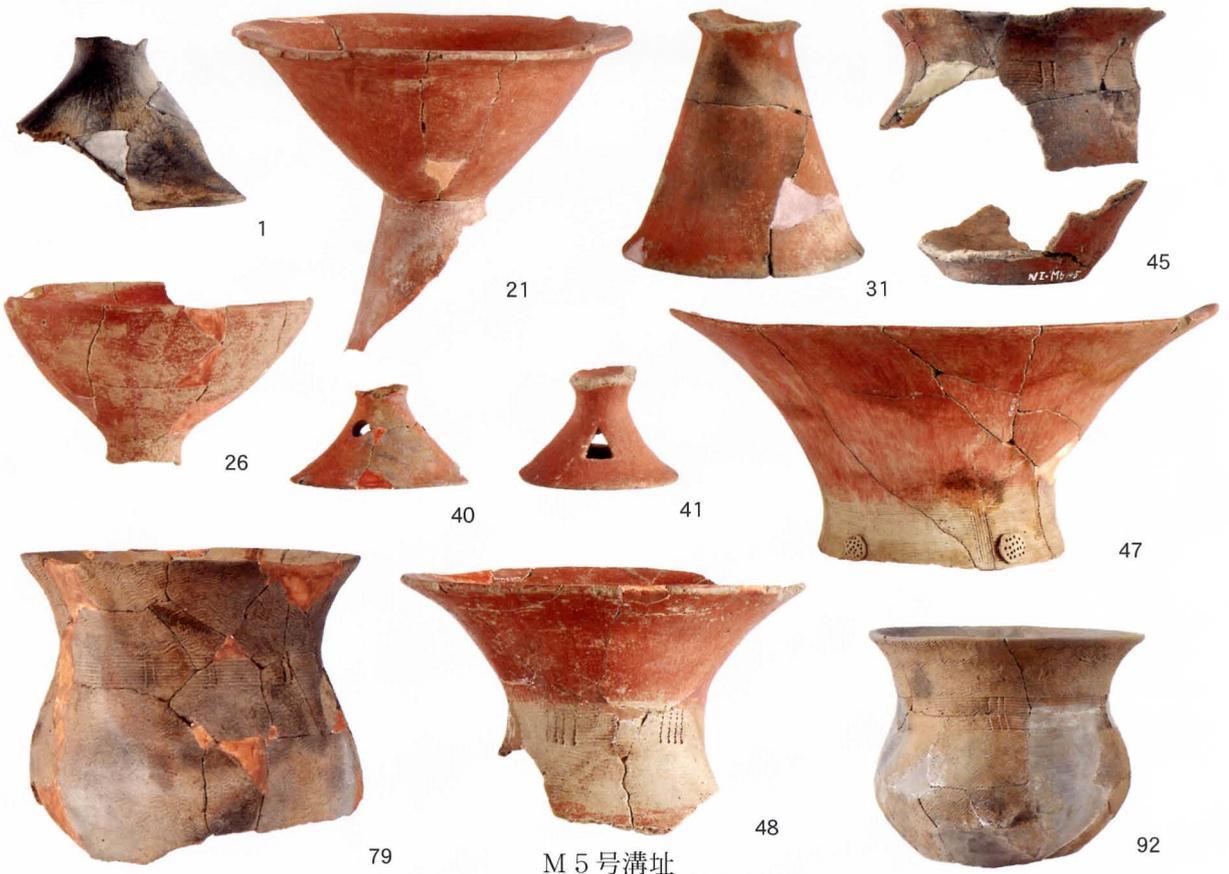
Y 7号住居址



Y 7-13



Y 7-15



M 5 号溝址



M 5 号溝址 完掘 (東より)



M 5 号溝址 C地点土層断面



調査員集合写真 (昭和48年) 佐久考古学会員と大学生、地元の協力者の面々

例 言

1. 本書は佐久市岩村田に所在する西一里塚遺跡群西一里塚遺跡Ⅰの埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査原因者及び原因
東信土地改良事務所・佐久建設事務所
長野県営佐久市北部地区圃場整備事業及び小規模河川改良事業による。
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名および所在地
西一里塚遺跡Ⅰ（略号 NⅠ）
長野県佐久市岩村田字西一里塚1620・1621
5. 発掘調査期間及び調査面積
発掘作業 昭和48年（1973）10月29日～11月30日
調査面積 960m²
整理作業 昭和49年（1974）3月20日～29日・昭和49年4月28日～5月6日
遺物洗浄、一部の注記、接合、調査記録の整理などを行っている。
平成25年（2013）5月15日～平成26年9月30日
遺物注記、土器接合、遺物実測、遺物トレース、図面修正、遺構図トレース、編集・刊行
6. 昭和48年（1973）10月29日～11月30日の発掘作業、
昭和49年3月20日～5月6日・昭和49年12月23日～昭和50年1月10日の整理作業については原因者負担により実施した。
平成25年5月15日～平成26年9月30日の整理作業及び報告書の刊行は全額を国庫補助金及び市費の公費により作成した。（平成25・26年度市内遺跡発掘調査費用）
7. 本書の作成は主として森泉かよ子が行った。
8. 本遺跡の遺物等の資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 挿図中の遺構の縮尺は竪穴住居址1/80、炉址1/40である。異なる場合は図中に明記してある。
2. 挿図中の遺物の縮尺は、土器1/4、石器は1/4・石器小型品1/2である。
3. 図版中の遺物写真の縮尺は土器ほぼ1/4、石製品ほぼ1/2・1/4である。異なる場合は明記してある。
4. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。



地山



掘方・石器磨り面



赤色塗彩



炭化物・黒色塗彩



鉄釉



焼土



石器自然面

目 次

報告書の概要

巻頭図版

例 言

凡 例

目 次

第 I 章 発掘調査の概要	1
第 1 節 発掘調査の経緯	1
第 2 節 調査体制	2
第 3 節 調査日誌	2
第 II 章 遺跡の立地と環境	4
第 1 節 自然的環境	4
第 2 節 基本層序	4
第 3 節 歴史的環境	5
第 III 章 遺構と遺物	11
第 1 節 竪穴住居址	11
1) Y 1 号住居址	11
2) Y 2 号住居址	12
3) Y 3 号住居址	14
4) Y 4 号住居址	16
5) Y 5 号住居址	16
6) Y 6 号住居址	18
7) Y 7 号住居址	20
8) Y 8 号住居址	22
9) Y 9 号住居址	25
10) Y 10 号住居址	26
11) Y 11 号住居址	27
12) Y 12 号住居址	29
第 2 節 土坑	29
1) D 1 号土坑	29
2) D 2 号土坑	29
3) D 3 号土坑	30
4) D 4 号土坑	31
5) D 5 号土坑	31
6) D 6 号土坑	31
7) D 7 号土坑	31
8) D 8 号土坑	32
9) D 9 号土坑	32
10) D 10 号土坑	33
第 3 節 溝址	33
1) M 1 号溝址	33
2) M 2 号溝址	33
3) M 3・M 4・M 6 号溝址	33
第 4 節 環壕	35
1) M 5 号溝址	35
第 5 節 グリッド・表採	45
第 IV 章 総括	48
第 1 節 遺構	48
1) 竪穴住居址	48
2) 土坑	49
3) 溝址	49
4) 環壕	50
第 2 節 遺物	54
引用参考文献	55

付表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	6
第2表	西一里塚遺跡環濠規模表	49
第3表	検出遺構一覧表	56
第4表	出土遺物一覧表	57

挿図目次

第1図	西一里塚遺跡 I 位置図	1	第37図	M5号溝址(2)	37
第2図	西一里塚遺跡 I 昭和48年圃場整備前と後の河川	3	第38図	M5号溝址(3)	38
第3図	西一里塚遺跡 I 発掘区設定図	3	第39図	M5号溝址(4)	39
第4図	基本層序模式図	4	第40図	M5号溝址(5)	40
第5図	西一里塚遺跡群遺構配置図	5	第41図	M5号溝址(6)	41
第6図	周辺遺跡分布図	7	第42図	M5号溝址(7)	42
第7図	西一里塚遺跡 I 全体図	10	第43図	M5号溝址(8)	43
第8図	Y1号住居址	12	第44図	M5号溝址(9)	44
第9図	Y2号住居址(1)	13	第45図	グリッド・表採(1)	45
第10図	Y2号住居址(2)	14	第46図	グリッド・表採(2)	46
第11図	Y3号住居址(1)	15	第47図	グリッド・表採(3)	47
第12図	Y5号住居址(1)	17	第48図	湯川右岸の弥生後期後半の環濠	50
第13図	Y5号住居址(2)	18	第49図	土器変遷図(1)	51
第14図	Y6号住居址(1)	19	第50図	土器変遷図(2)	52
第15図	Y6号住居址(2)	20	第51図	土器変遷図(3)	53
第16図	Y7号住居址(1)	21			
第17図	Y7号住居址(2)	22			
第18図	Y8号住居址(1)	23			
第19図	Y8号住居址(2)	24			
第20図	Y9号住居址(1)	25			
第21図	Y9号住居址(2)	26			
第22図	Y10号住居址(2)	26			
第23図	Y11号住居址(1)	27			
第24図	Y11号住居址(2)	28			
第25図	Y12号住居址	28			
第26図	D1号土坑	29			
第27図	D2号土坑	30			
第28図	D3号土坑	30			
第29図	D4～D6号土坑	31			
第30図	D7号土坑	32			
第31図	D8号土坑	32			
第32図	D9号土坑	32			
第33図	D10号土坑	33			
第34図	M1号溝址	34			
第35図	M3・M4・M6号溝址	35			
第36図	M5号溝址(1)	36			

写真目次

巻頭1	遺跡遠景・調査風景	
巻頭2	弥生後期後半 Y5・Y8・Y7	
巻頭3	弥生後期環濠 M5	
図版1	遺構	72
図版2	Y1・Y2(1)	73
図版3	Y2(2)・Y3・Y5	74
図版4	Y5(2)・Y6・Y7(1)	75
図版5	Y7(2)・Y8(1)	76
図版6	Y8(2)・Y9(1)	77
図版7	Y9(2)～Y12・D1～D3	78
図版8	D6～D8・M1・M3・M4	79
図版9	M5(1)	80
図版10	M5(2)	81
図版11	M5(3)	82
図版12	M5(4)	83
図版13	M5(5)	84
図版14	M5(6)・M6・グリッド・表採・石製品(1)	85
図版15	石製品(2)	86
図版16	石製品(3)	87
図版17	石製品(4)・古銭	88

第 I 章 発掘調査の概要

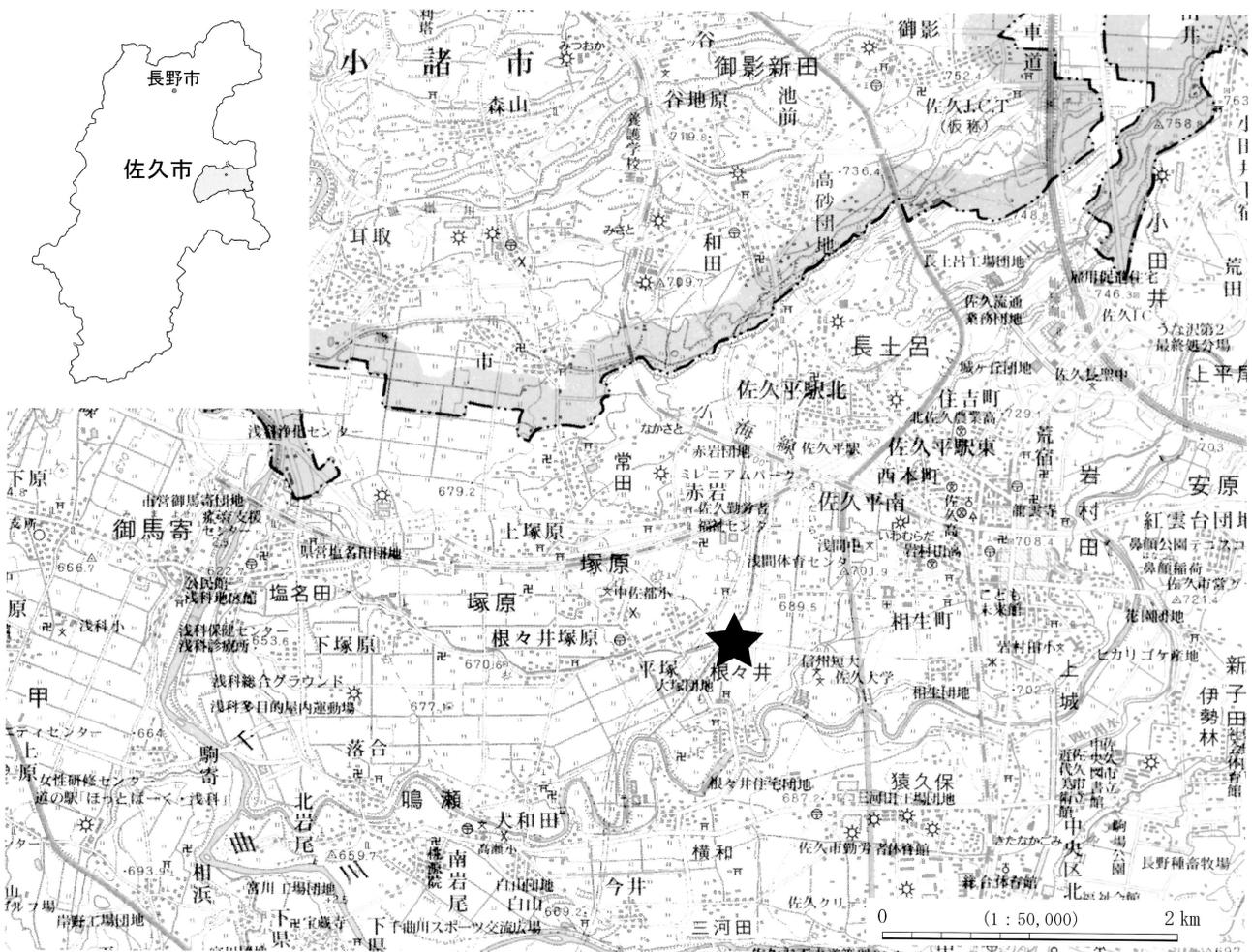
第 1 節 発掘調査の経緯

西一里塚遺跡は佐久市の北東にあって、岩村田市街地の南西約 2 km の地にある。調査地点は本調査の原因であった昭和 48 年の圃場整備・河川改修により現在の南流する濁川が新たに設けられ、その左岸にあたり、当時は桑畑であった。

昭和 48 年 7 月 11 日、県営佐久市北部地区圃場整備事業・小規模河川改良事業に関連し、佐久市教育委員会では県教育委員会の指導主事桐原健氏とともに遺跡の分布調査を行った。その結果、遺物が採集され遺跡の存在が確認された。河川改良及び圃場整備事業により、遺跡の破壊は避けがたく、事前に発掘調査をして遺跡の記録保存を行うこととなった。昭和 48 年 8 月 3 日に調査委託契約を佐久建設事務所長と佐久市教育委員会教育長との間でかわし、昭和 48 年 10 月 20 日に文化庁長官に埋蔵文化財発掘届を出し、発掘担当者を藤沢平治氏に依頼し昭和 48 年 10 月 1 日に承諾を得た。

昭和 48 年 10 月 8 日・12 日に発掘担当者の藤沢平治氏の立会で、ブルドーザーにより耕作土を除去。15 日には遺跡が湿地であるため、仮排水溝を設置した。同年 10 月 29 日に発掘調査に入り、同年 11 月 30 日発掘調査を終了。12 月 1 日に遺跡全体の撮影をしている。『西一里塚遺跡発掘調査概報』を昭和 48 年 12 月 28 日付で刊行している。

本書は平成 25 年度市内遺跡発掘調査事業の一環として刊行した。



第 1 図 西一里塚遺跡 I 位置図

第2節 調査体制

昭和48年度

(事務局)

教育長 細萱勇美

担当 木内 捷

(調査団)

発掘担当者 藤沢平治 (野沢北高教諭)

調査員 土屋長久 武藤 金 三石延雄 井上行雄 森泉定勝 新村 薫 佐藤 敏 佐藤 守
渡辺重義 黒岩忠雄 新津海三 白倉盛男 小林秀人 高村博文 白田武正 青木幸男
嶋下幸恵 藤井悠紀枝 林 幸彦 川島雅人 大橋広行 古川喜一 花岡 弘
岩村田及び平塚地区住民 上田高校生 岩村田高校生、野沢北高校生

調査協力者 百瀬新治 小原ひさ江 矢口忠良 山岡栄子

平成25・26年度

(事務局)

教育長 土屋盛夫

文化財課長 三石宗一

文化財調査係長 比田井清美

文化財調査係 須藤隆司 (平成26年3月退職) 小林眞寿 富沢一明 上原学 神津一明 久保浩一郎

報告書担当 森泉かよ子

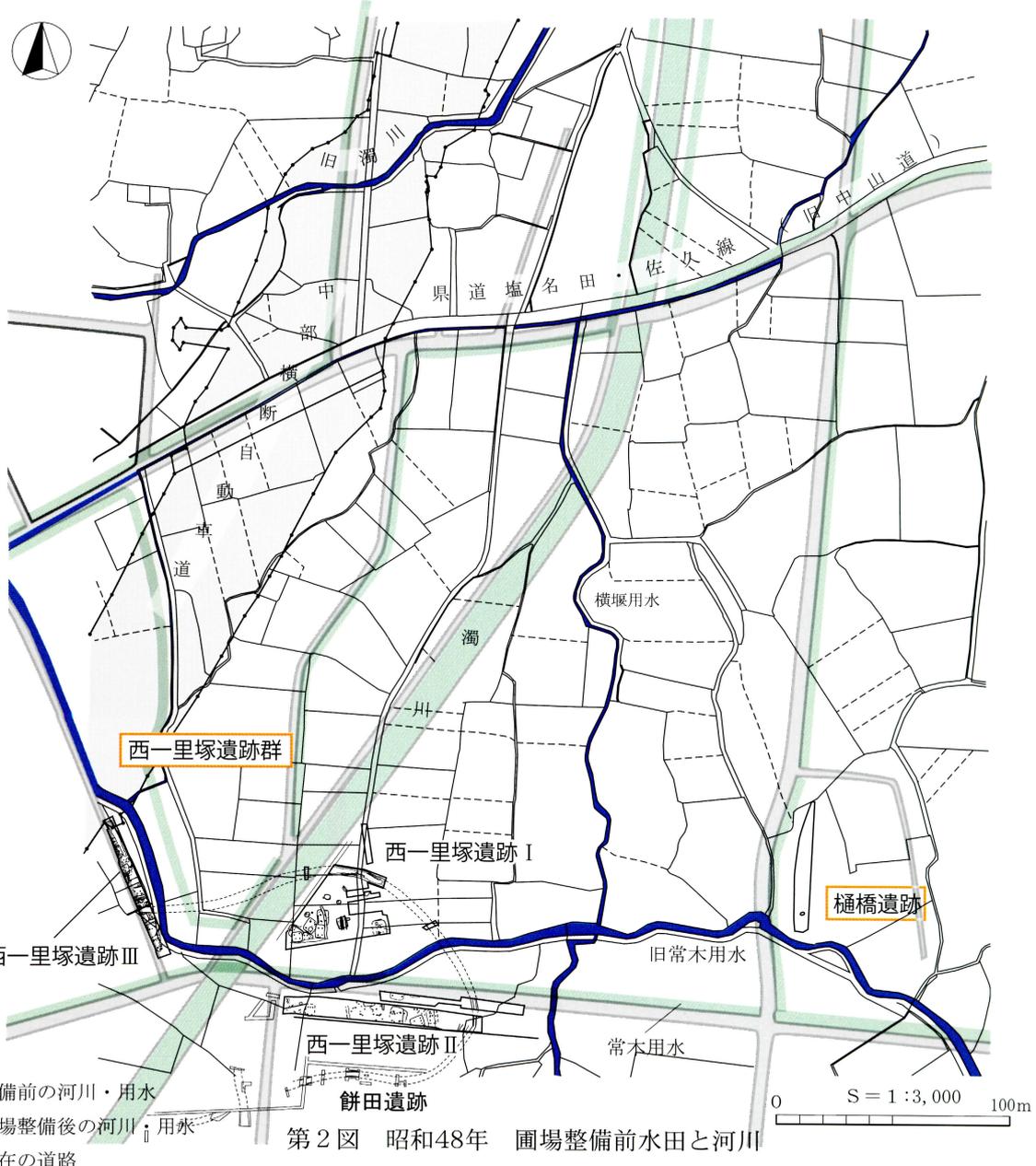
報告書作成分担 土器接合 依田好行・中澤登、石膏復元 小島真

図面修正 細谷秀子、デジタルトレース 上原美千代、拓本 柳沢亜矢子

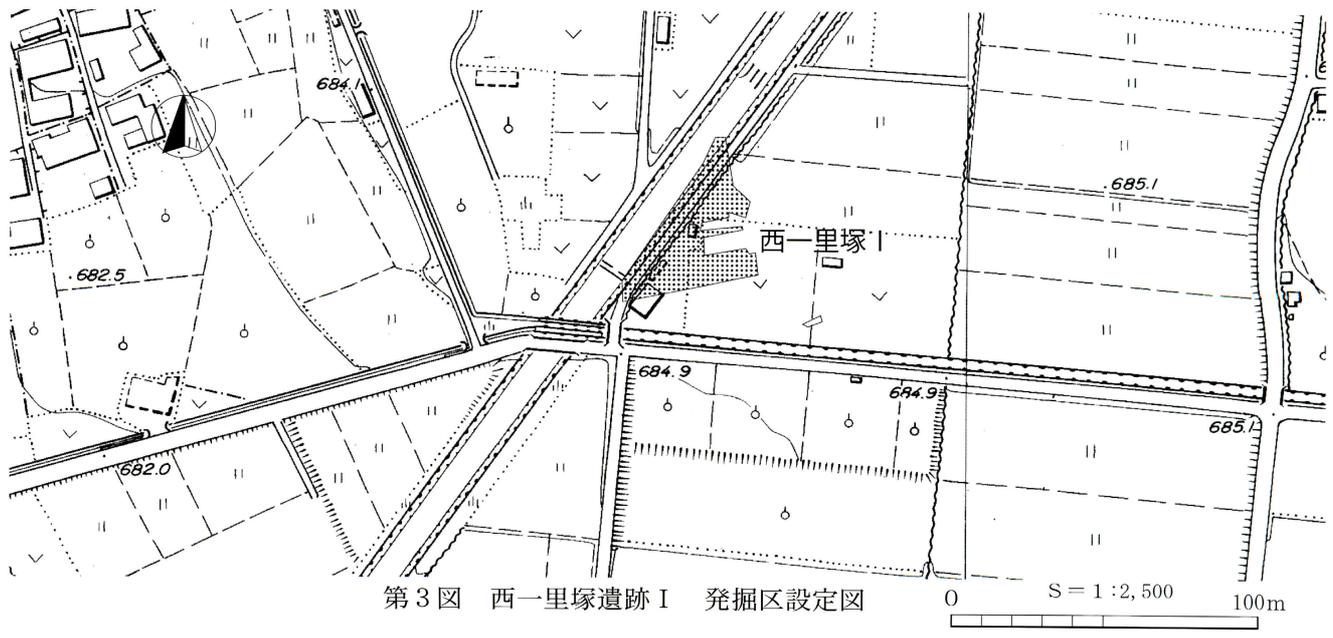
遺物実測 堺益子・田中ひさ子・清水律子・柳澤孝子 (石器)

第3節 調査日誌

7月11日	表採分布調査	11月13日 (晴れ)	Y2住の調査。Y3住を切っている。
10月08日	ブルドーザーにより表土除去作業	14日 (晴れ)	Y2住の床・壁・柱穴の調査。
12日	ブルドーザーにより表土除去作業	15日 (晴れ)	Y2住のセクションベルトの除去。M1溝清掃・実測。Y5住掘り下げ。骨の髓まで冷えた1日であった。
15日	仮排水溝設置	16日 (晴れ)	穏やかな1日。M1の遺物取り上げ。Y5・Y6住掘り下げ。
17日	グリッド設定のため基準杭打ち込み	17日 (晴れ)	Y2・Y3・Y4住遺構測量。Y7住検出。
29日 (晴れ)	発掘調査開始。午前中、昨日の大雨でプール化した発掘現場排水作業。グリッドE・I列を掘り下げ、遺構プラン確認。	18日 (晴れ)	Y7住を切るD2土坑確認。
30日 (曇り)	グリッドC・D・E列の遺構プラン確認。後期弥生式土器のみである。	19日 (晴れ)	風強し。えびす講。Y5・Y6・Y7住の測量。M5環濠のプラン確認。
31日 (晴れ)	佐久平を囲む紅葉が美しい。グリッドC・D列検出遺構プラン確認。遺構プランが複雑に切りあう。	20日 (晴れ)	昨夜降雪あり、遺跡の雪の除去作業。M5環濠を15～22地区に設定。16・18・20を掘り下げる。
11月 1日 (曇り)	グリッドC・D列に4軒の住居址プラン検出。	21日 (曇り)	M5環濠の掘り下げ。溝内から土器多く出土。
2日 (快晴)	ブルドーザーでグリッドK・L・M・N列にて行う。グリッドA・B列の排土をブルドーザーで除去。	22日 (晴れ)	M5ほぼ溝底まで掘り下げる。環濠の広がりを確認するため、西に西トレンチ、東南に東トレンチを設定。
3日 (曇り)	グリッドA列の排土除去。かなりの労力を費やす。Y1住の調査は床面に達し、中央より東の床面に厚さ5cmほどの焼土範囲を検出。	23日 (晴れ)	M5の掘り下げ終了。Y8・Y9のプラン検出のための拡張。
5日 (曇り)	昨日までの高校生の参加がなくなり、稲抜きが始まり脱穀機の快音に囲まれて静かな発掘調査である。Y1住のセクション実測・セクションベルトの除去。M1の検出を行う。	24日 (晴れ)	Y8掘り下げ。D3・D4土坑調査。全体測量開始。M5セクション実測。
6日 (雨)	雨で中止。	25日 (朝方大雨)	現場中止。
7日 (晴れ)	雪化粧した浅間山、蓼科山、ハケ岳が青空に美しく映える。A・B列の拡張。Y1住を切る溝の検出。G・F列にY12住を検出。	27日 (晴れ)	風強し。Y8・Y9・Y10の掘り下げ。D1・D4土坑セクション実測。
8日 (快晴)	遺跡に霜柱が立つ。グリッドJ・K・L地区の拡張。	28日 (晴れ)	寒風吹きすさぶ。Y8・Y11の掘り下げ続行。Y2～Y4・Y9・Y10の清掃。
9日 (晴れ)	Y1の調査・測量。	29日 (晴れ)	Y8・Y11の清掃・実測。各住居址戸切開。D6・D7土坑検出。
10日 (曇りのち雨)	上ノ城遺跡の機材を撤収。西一里塚遺跡にテントを設定。	30日 (晴れ)	D6・D7土坑掘り下げ。炉のセクション実測。全体測量。器材撤収。
11日 (快晴)	高校生・上ノ城遺跡のおばさん達も参加。総勢20名となる。グリッドM・L・Nの拡張。環濠を検出。	12月 1日 (快晴)	遺跡全体写真の撮影。
12日 (晴れ)	グリッドA～D19～21のプラン確認を行う。		



第2図 昭和48年 圃場整備前水田と河川



第3図 西一里塚遺跡Ⅰ 発掘区設定図

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然環境

西一里塚遺跡は佐久市岩村田地籍に所在し、岩村田駅の南西2kmにあり、河川改修後新設された濁川左岸に位置する。この地点は昭和48年の圃場整備前は桑畑で、北側は水田があり低く、遺跡の南も低くなることから微高地上にあたる。従来は濁川は、旧中山道沿いの平塚集落の北側を西に流下していた。

遺跡の東は横堰用水の分流が南北に流れ、南の常木用水に落ちていた。常木用水は西に流化し遺跡を横切って北に流れている。(第2図参照)

標高は684.7mを測る。

佐久平は北に浅間山、東に荒船山や八風山などの関東山地(佐久山塊)が連なり、南は蓼科山・八ヶ岳の山々に囲まれている。中央を千曲川が北流し、千曲川右岸の佐久平北部では浅間山の火山灰が基盤を成している。

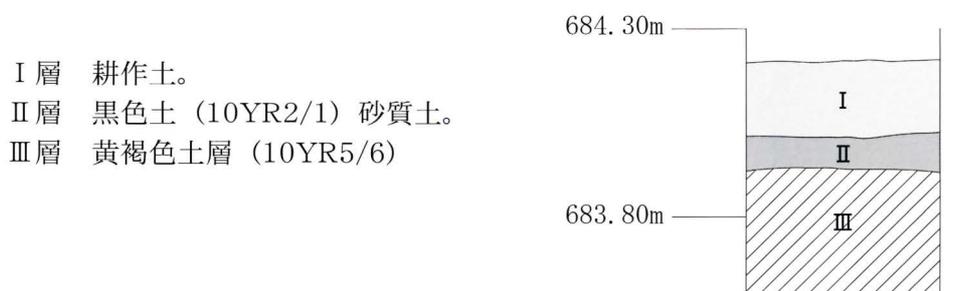
浅間山の最も古い山体である黒斑山は、約25,000年前に大規模な水蒸気爆発をしている。その際に黒斑山の東半分が山体崩壊を起こし、土石なだれとなって、群馬県北麓と長野県側の南麓側を覆った。これが「塚原泥流」と呼ばれ、「流れ山」が佐久市塚原地籍を中心に点在している。

その後、13,000年前には浅間山南麓の大規模な噴火により、軽石流が覆っている。これが「第一軽石流」である。この軽石層の最大の厚さは30mを測るといふ。軽石流は小河川でも浸食され易いため、浅間山麓から放射状に浸食谷が形成され、「田切り地形」を生み出している。田切り地形の上面は畑地、田切り内の低地は水田耕作がなされてきた。この田切り地形がみられるのは佐久市長土呂地籍あたりまでで、南側では消滅していく。この西一里塚地点では湿地帯の低地と微高地となり、それに流れ山からなる地形となる。

第2節 基本層序

本遺跡は周囲に低地があるため微高地にあたる。南北幅200m東西250mほどの微高地に、弥生時代の集落が東西に展開しているようである。本調査区から北西に120m、南は70mほどからは低地となっている。

本調査地点の低いところは耕作土の下に黒色土(10YR2/1)が堆積し、その下が浅間軽石流となる。



0 (1:20) 50 cm

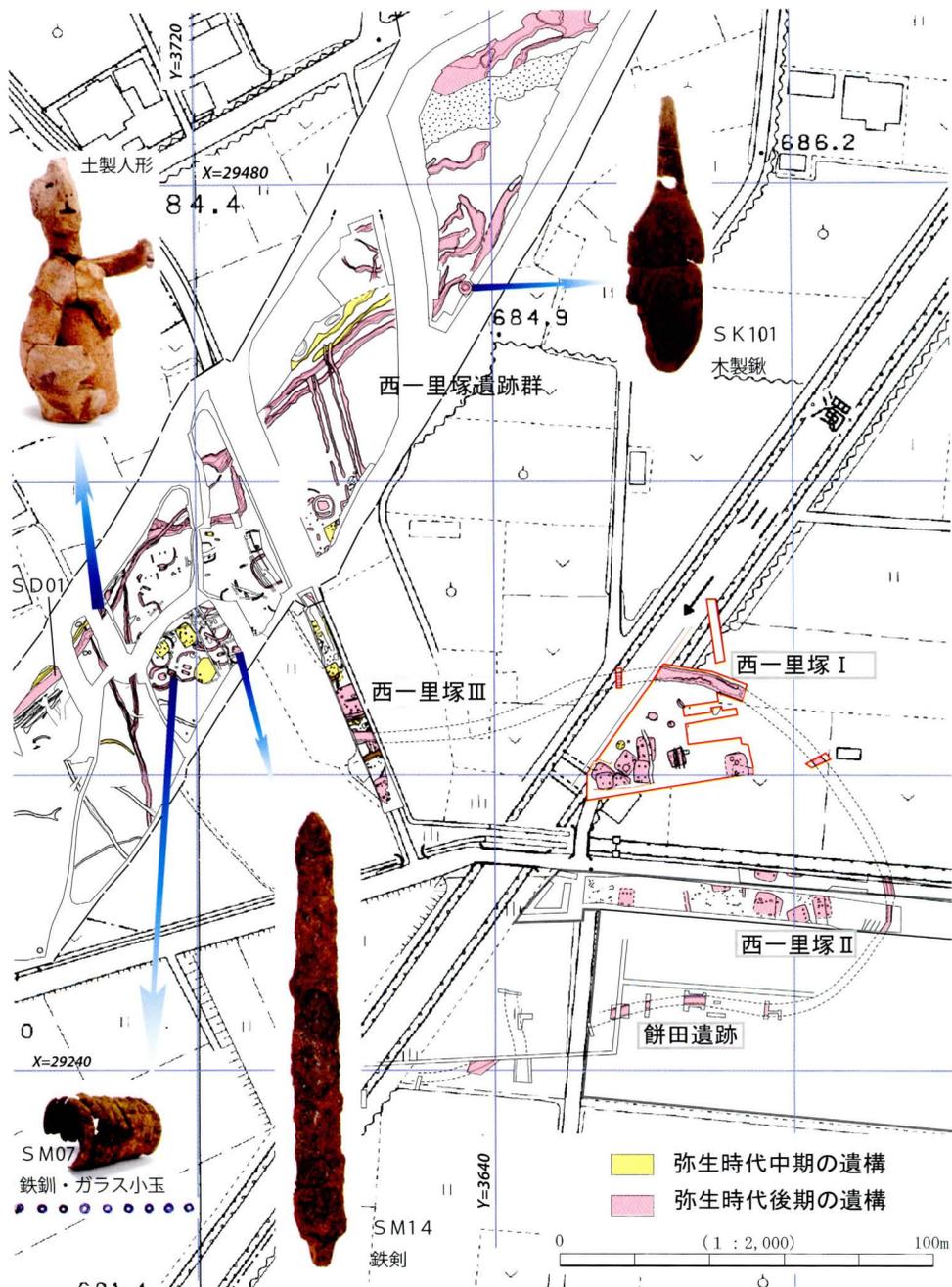
第4図 基本層序模式図

第3節 歴史的環境

本報告書は昭和48年の発掘調査の報告で、その後平成15・18年に西一里塚遺跡Ⅱ・Ⅲが佐久市教育委員会、西一里塚遺跡群が県の埋文センターによって調査されている。

本遺跡から出土する土器の大半は弥生時代後期の箱清水式土器であり、検出した遺構の年代も弥生時代後期とされよう。1棟のみが弥生中期後半の栗林土器を出土し、弥生時代中期とみられる。弥生時代後葉の土器群があり、在地の箱清水の系統を引くものと東海系の「S字甕」が出土し、南関東の装飾壺1点が表採されている。ここでは西一里塚遺跡の中心的時代である弥生時代についての周辺遺跡をみてみたい。

佐久市内では弥生時代前期の遺跡はごくわずかな調査例があるのみである。弥生時代前期の遺物を出土しているのは、岩村田地籍の湯川沿岸の下信濃石遺跡・22仲田遺跡・42-3東大門先遺跡、野沢地籍の東五里田遺跡、佐久市月夜平遺跡（旧白田町）などは千曲川沿岸である。未報告であるが千曲



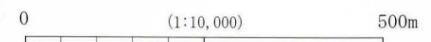
第5図 西一里塚遺跡群 遺構配置図

地図番号	遺跡名	種別	所在地	時代							佐久市遺跡番号	備考
				旧	縄	弥	古	索	平	中		
1-1	にしいちりづか西一里塚遺跡Ⅰ	集落跡	岩村田			○					92	弥生時代（後期竪穴住居11・中期1、土坑7、溝6、環濠1）昭和48（1973）年度調査
1-2	西一里塚遺跡Ⅱ	集落跡	岩村田			○					92	弥生時代（後期竪穴住居9・溝3、環濠1）、ピット群平成15・16（2003・2004）年度調査
1-3	西一里塚遺跡Ⅲ	集落跡	岩村田			○					92	弥生時代（中期竪穴住居2・土坑1、後期竪穴住居3・溝3・環濠1）、近代（溝1）平成18（2006）年度調査
2	西一里塚遺跡群（具）	生産跡集落跡	岩村田			○	○	○			92	弥生時代（中期竪穴住居4、後期竪穴住居8・木棺墓2・土器棺墓6・円形・方形周溝墓25）、溝45、平成15（2004）～17年度調査
3	餅田遺跡	溝跡	岩村田			○						弥生時代（後期環濠1）昭和47（1972）年度調査
4	樋橋遺跡	墓跡	岩村田			○						弥生時代（後期土器棺墓1）平成12（2000）年度調査
5	かざりやま荘山古墳	古墳	塚原				○				595	
6	たつこだ龍子田遺跡	散布地	塚原					○			91	
7	つかばらやしきぞえ塚原屋敷添遺跡	散布地	塚原					○			88	
8	みやのまえ宮の前遺跡	散布地	塚原					○			86	
9	せきぞえ堰添遺跡	散布地	常田			○					85	
10	みちぞえ遺添遺跡	散布地	塚原						○		87	
11	おわだやしき大和田屋敷遺跡群	散布地	鳴瀬			○	○				226	
12	もりだいら森平遺跡	集落跡	横和			○		○			593	弥生時代（中期竪穴住居23・後期竪穴住居2）平安時代（竪穴住居2）掘立13、土坑17、溝14 県平成17・18（2005・2006）年度、佐久市平成18年度調査
13	きたくぼ北久保遺跡	散布地	横和				○	○	○		233	
14	ねいおつか根々井大塚古墳	古墳	根々井				○				109	
15	ひめみやつか姫宮塚古墳	古墳	根々井				○				110	
16	ひなたやしき日向屋敷遺跡	散布地	根々井				○	○	○		93	
17	ねいおつか根々井居屋敷遺跡	散布地	根々井				○	○	○		94	
18	ねいおつか根井氏館跡	城館跡	根々井					○	○		95	
19	あかいしがわら赤石河原遺跡	散布地	根々井				○		○		242	
20	すわぶん諏訪分遺跡群	散布地	根々井				○	○	○		106	
21	みやのうえ宮の上遺跡群	散布地	根々井				○	○	○		240	
22	なみた仲田遺跡	集落跡	猿久保				○	○	○		252	古墳時代（竪穴住居20）、奈良平安（竪穴15）、掘立10土坑7、溝5。平成7（1995）年度調査
23	てらばたけ寺畑遺跡群	散布地	根々井猿久保	○		○	○	○	○		107	平安（竪穴住居1）、縄文時代早期土器群平成7（1995）年度調査
24	ねいおつか根々井東原館跡	城館跡	根々井								108	
25	なるさわ鳴瀬遺跡群	散布地	根々井	○	○	○	○		○		96	弥生時代（中期竪穴住居43、後期方形円形周溝墓5、土坑）、古墳時代（周濠2）平成9（1997）年度調査。
26	鳴瀬古墳群	古墳	根々井				○				111	
27	なかにしのかくほ中西の久保遺跡群	集落跡	岩村田			○	○	○			99	
28	きたにしのかくほ北西の久保遺跡	集落跡	岩村田			○	○	○			98	弥生時代（中期竪穴住居91・後期竪穴住居38）古墳時代（中期竪穴住居20）掘立、土坑、溝 昭和57・60（1982・1985）年度調査。
29	北西の久保古墳群	古墳	岩村田				○				116	
30	きへいじやま喜平治山古墳	古墳	岩村田				○				112	
31	かみすなだ上砂田遺跡	散布地	岩村田			○	○	○			101	
32	くぼ久保田遺跡	散布地	塚原	○	○		○	○			594	
33	にこ瀧り遺跡	生産跡	塚原					○			39	平安時代（水田跡）平成4（1992）年度、県平成18・19（2006・2007）年度調査
34	まえだ前田遺跡群	散布地	塚原			○		○			27	
35	みやのつか宮の塚古墳	古墳	塚原				○				89	
36	やしがしら崖地頭古墳群	古墳	塚原				○				33	
37	だいずづか大豆塚古墳群	古墳	塚原				○				34	
38	とくだいやしき常田居屋敷遺跡群	散布地	塚原			○	○	○			28	
39	まつき松の木遺跡	集落跡生産跡	岩村田			○	○	○	○		102	古墳時代（前期竪穴住居3・墳丘墓1）、水田跡弥生時代（後期竪穴住居4）平成10・18（1998・2006）年度調査
40	こくぞうざん国蔵山古墳	古墳	岩村田				○				114	
41	ひわまか琵琶坂遺跡群円正坊遺跡	散布地集落跡	岩村田			○	○	○	○		41	弥生～中世（竪穴住居址135）弥生～古墳（周溝墓17）・掘立柱建物址33
42-1	岩村田遺跡群西一本柳遺跡	集落	岩村田			○	○	○	○		52	西一本柳遺跡Ⅰ～XXI発掘調査
42-2	岩村田遺跡群北一本柳遺跡	集落	岩村田			○	○	○	○			北一本柳遺跡Ⅰ～Ⅳ発掘調査
42-3	岩村田遺跡群東大門先遺跡	集落	岩村田			○	○	○			52	東大門先遺跡Ⅰ・Ⅱ発掘調査

第1表 周辺遺跡一覧表



..... 環濠推定ライン



第6図 周辺遺跡分布図 (弥生後期の西一里塚・西一本柳・北一本柳遺跡環濠)

地図 番号	遺跡名	種別	所在地	時代							佐久市 遺跡番号	備考	
				旧	縄	弥	古	奈	平	中			近
42-4	西八日町遺跡	集落	岩村田				○	○				52	西八日町遺跡Ⅰ～Ⅶ発掘調査
43	とよだ 樋田古墳	古墳	岩村田				○					113	
44	ひがしいっぽんやなぎ 東一本柳古墳	古墳	岩村田				○					115	
45	なかなるまむ 中鳴沢遺跡群	散布地	岩村田				○	○	○			100	
46	さるくばやしきどえ 猿久保屋敷遺跡群	散布地	猿久保				○	○	○			123	

川左岸にはまだ点在するようである。今のところ住居址は発見されず、土坑または遺物の包含層のみである。

弥生中期前半の遺跡は発見されておらず、弥生中期後半になって遺跡が展開する。中期後半の集落は佐久市の北域では湯川・滑津川沿岸の段丘上にみられる。湯川の左岸を下流からさかのぼると寄塚遺跡群寄塚遺跡、宮の上遺跡群、21根々井芝宮遺跡、右岸では川原端遺跡、12森下遺跡、26鳴沢遺跡群五里田遺跡、28北西の久保遺跡、42岩村田遺跡群西一本柳遺跡など多くの遺跡がある。岩村田地籍までさかのぼることができる。

西一里塚遺跡群では、県の埋文センターが調査した中部横断自動車道路分の2西一里塚遺跡群、1-2佐久市の市道改良工事で調査した西一里塚遺跡Ⅱで、弥生中期後半の住居址が検出されている。本報告書のY12住は弥生中期後半の土器が出土する住居址であるが、佐久では他に類例のない円形プランを呈している。西一里塚遺跡の弥生中期の集落は湯川から600mほど北にあり、北側の低地を望む微高地に集落がある。

弥生後期の遺跡は湯川水系の弥生中期に後出して集落を構成し、湯川河岸段丘上では本遺跡を含め川原端遺跡、26鳴沢遺跡群五里田遺跡、28北西の久保遺跡、42-1・2西一本柳・北一本柳遺跡に集落が見られる。そればかりではなく、湯川沿岸から離れた本遺跡の北にある低地を囲んで対岸の岩村田・長土呂地籍に集落を増やし展開している。長土呂・岩村田地籍は田切り地形が終焉し、台地が低地に臨む地点にあたる。

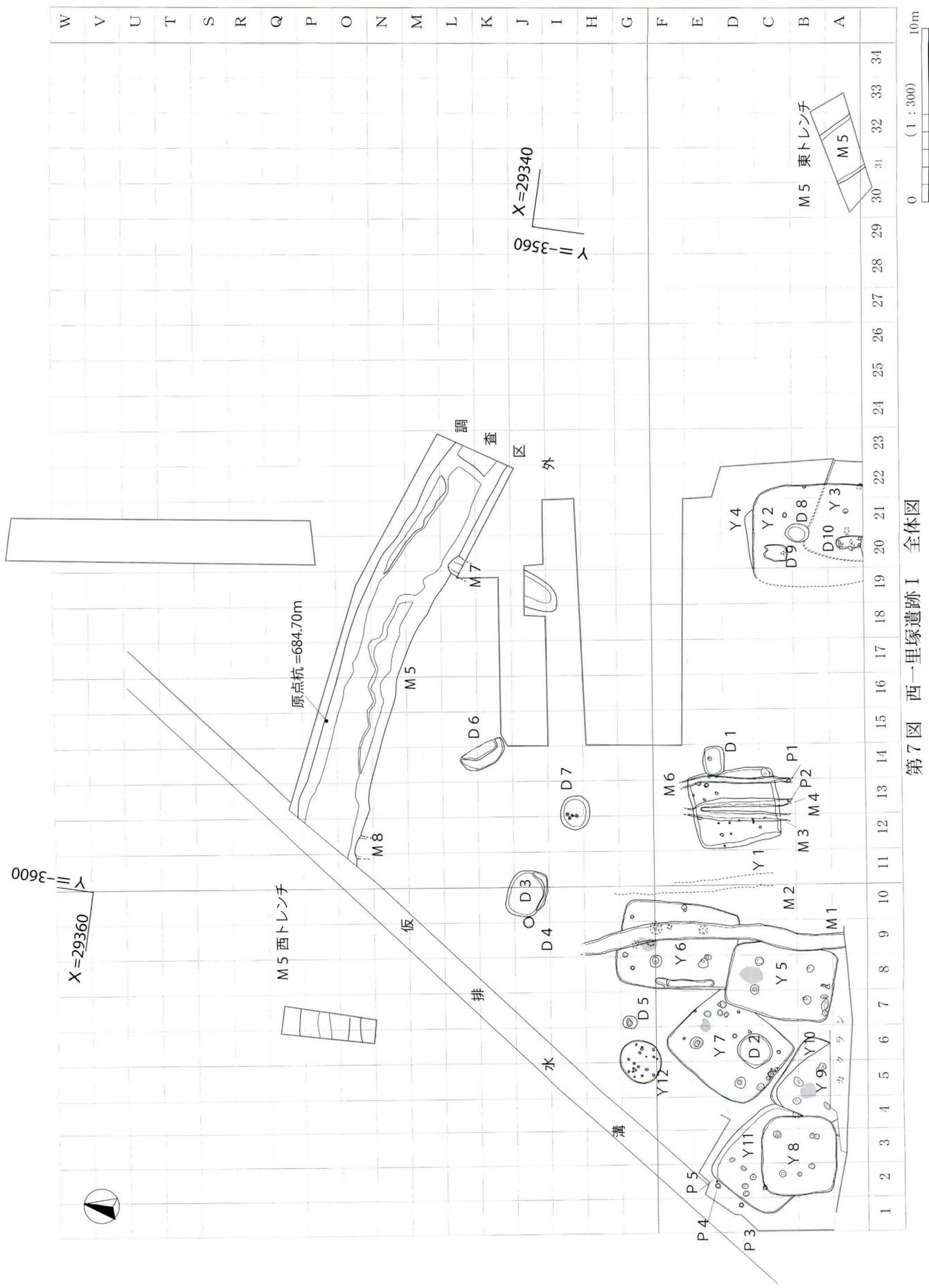
本遺跡の北には低地を挟んで旧中山道沿いの微高地があり、その北は濁川を西に流す低地となっている。33濁り遺跡で時期ははっきりしないものの水田跡が調査されている。現在の濁川の流れは本調査の原因でもあるが、河川改修され新たに進路を南北に変更し、湯川と合流している。

本遺跡では弥生時代後期の集落を囲む大型の溝(M5)が検出され、西一里塚遺跡ⅢのM7、南に隣接する2餅田遺跡に連続し、弥生時代後期の集落を囲む環濠とみられる。

この溝と同じ時期とみられる溝は42-1岩村田遺跡群西一本柳遺跡、42-2北一本柳遺跡に環濠が確認されている。この時期の環濠が800mほどの距離を持って存在していたことは弥生時代後期の集落のあり方として注目される。

また本遺跡の周囲は塚原泥流の残丘上に古墳が構築され、多くの古墳が分布している。14の根々井大塚古墳は古墳前期の墳丘墓としては佐久では最も古いとされている。3餅田遺跡のS字甕などを含め、本遺跡も終末から古墳初頭に近い土器がある。古墳中期の古墳では29北西の久保古墳群があり、これも希少な遺構群である。佐久地方にある大半の古墳は後期であり、29北西久保古墳群の17号墳からは形象埴輪が多量に出土している。本遺跡分布地図に掲載の古墳も後期に属するものである。

西一里塚遺跡では弥生時代中期後半・弥生時代後期が主体で、古墳時代以降の集落はなく、2の中部横断自動車道の北の低地では平安時代の水田跡が検出されている。



第7図 西一里塚遺跡 I 全体図

第三章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

1) Y1号住居址 (第8図、図版1・2)

E13グリッドに位置し、D1号土坑、M3・M4・M6号溝址に切られる。南北472cm、東西432cm、最大の深さ13cmを測り、隅丸方形を呈す。主軸方位はN-8°-Wを指す。

壁下には周溝が巡っている。P1~P4が支柱穴とみられ、円形に近く、長径16~24cm、短径13~16cm、深さ5~20cmを測る。堀方を掘っていないので、柱痕のプランの径の数値とみられる。壁柱穴はP5・P7・P8があり、これも柱痕のプランであろう。P9・P10・P11・P20はM6号溝址に沿い、P13・P15~P19の6個はほぼ直線に並び、M3と並行する。それぞれM6・M3号溝址に伴うピットであろうか。P12・P21もM4に伴うであろう。P14は分からない。

焼土範囲は中央より東寄りの床面上に64×44cmがある。炭化物範囲は北と東に多く分布し、床面から5~6cm浮いている。南東にあるP6は60×40cmの楕円形で、深さ24cmを測り、貯蔵穴であろう。

出土遺物には弥生土器と炭化物がある。炭化物は木材の炭化したものである。

弥生土器は破片で完形品はない。杯・甕(焼成後穿孔)・蓋・壺・甕・台付甕がある。壺は赤色塗彩と9の無彩色のものがある。頸部の文様はいずれも櫛描文で、9が横線文、11・13がT字文、10が簾状文、12が波状文を施す。6の甕は口縁が強く反り、端部が内湾している。口縁に施文する波状文は重複し、頸部は簾状文ではなく、縦の櫛描文をいれ、T字文状になっている。

これらより本住居址の年代は弥生時代後期後半新の箱清水式期であろう。

2) Y2号住居址 (第9・10図、図版2・3・14)

C21グリッドにあり、南は調査区域外である。隅丸長方形を呈すると見られ、D8~D10号土坑に切れ、Y3・Y4号住居址を切っている。主軸方位はN-0°で北方向を指す。南北は609cmを調査し、西壁が明らかではないため東西幅は推定で580cm、最大深20cmを測る。

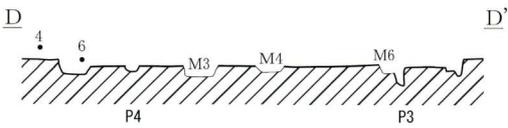
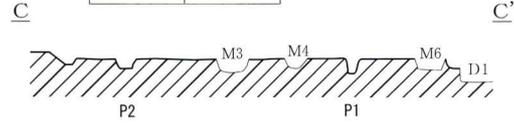
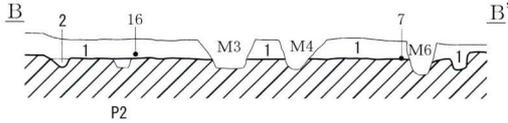
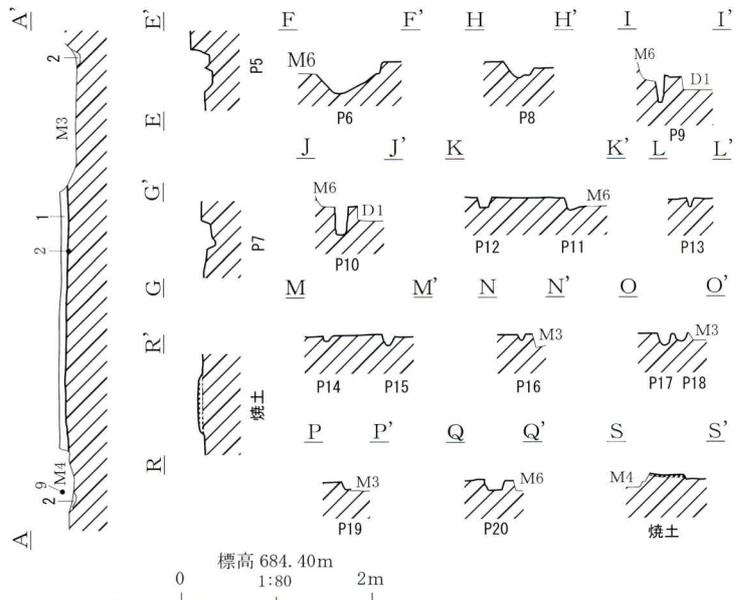
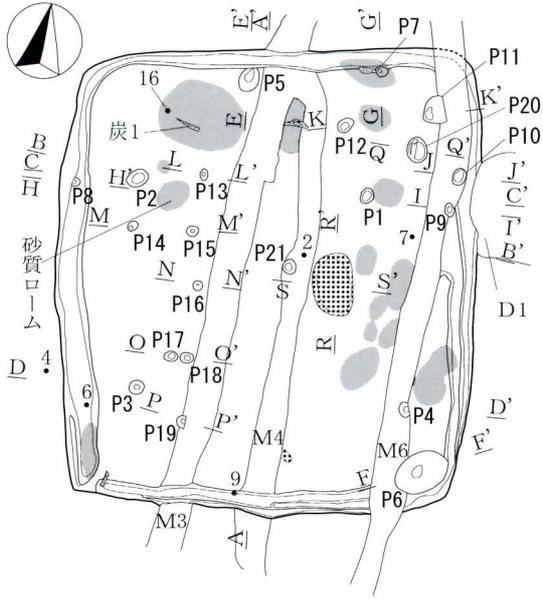
支柱穴はP1~P4で、楕円形と円形があり、長径24~28cm、短径20~26cm、深さ28・32~44cmを測る。P5は壁柱穴であろうか。炉はD8号土坑により壊されたようである。P1・P2の支柱穴の間に長さ44cm、幅28cmの角礫があるが、炉に関係した石であろうか。

出土遺物には弥生土器、杯転用の土板、磨・敲石、混入の沓銭貨幣がある。

弥生土器は杯・高杯・蓋・壺・甕がある。住居の東側床面に多くの土器が出土している。杯・高杯・壺類は赤色塗彩され、蓋は無彩色のものが3点ある。39の小型高杯脚は三角透かしを4個持ち、脚裾にはさらに裾を付けている。付けた下部分は無彩色であることから、器台に挿して使用したのであろうか。壺では11の脚の付くものであろうか胴下部が膨らんで急に窄まる。ミガキは弱く、赤色塗彩は淡い。12の壺は頸部の櫛描簾状文まで赤色塗彩され、内側には粘土紐の輪積み痕を残している。受け口の壺16は口縁の外反が強く、外稜をもって立ちあがる口縁端部は、外面に櫛描波状文を施し、頸部に櫛描T字文を施す。25~27は弥生時代中期の壺である。甕は口縁の屈曲外反が強く、胴上部が球胴化している。18の甕の内面はミガキ調整が丁寧になされている。16・40は口縁と胴部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文を施す。18・19の甕は口縁と胴上部は櫛描斜走文で、頸部に櫛描簾状文を施文する。

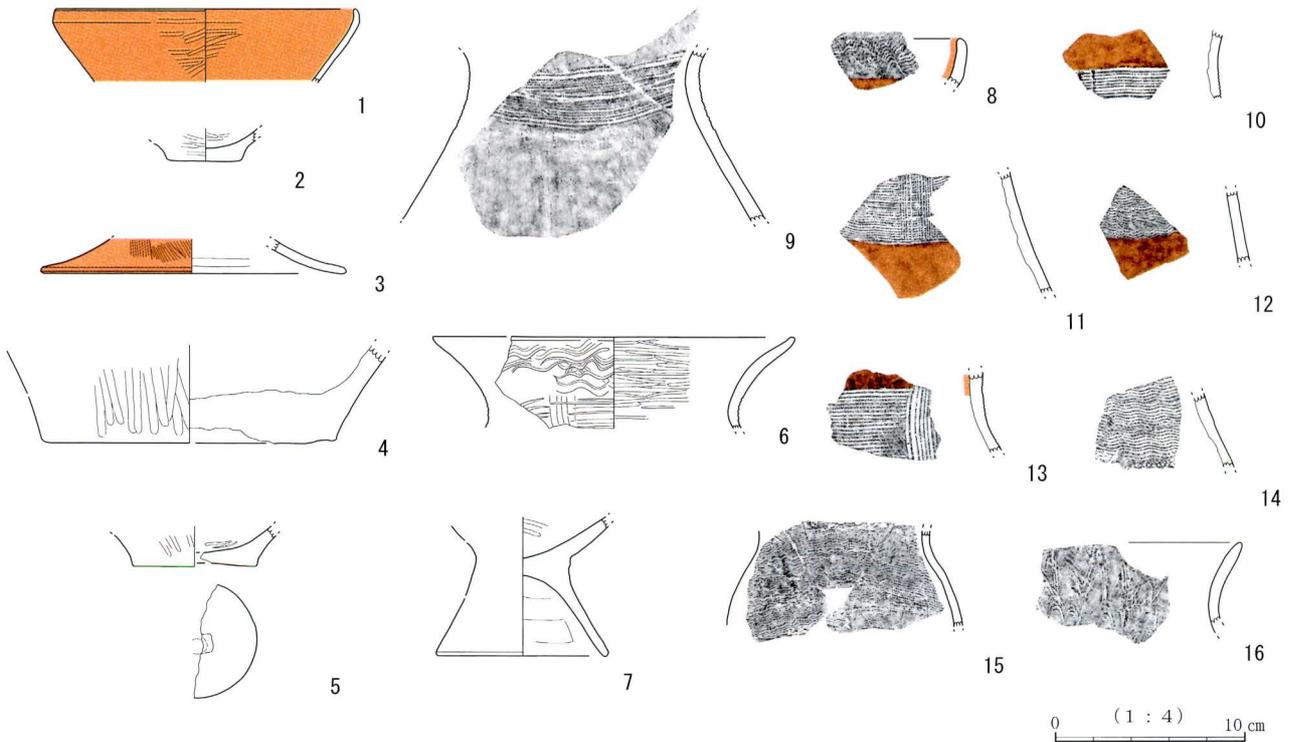
これらより、本住居址の年代は弥生時代後期後半新の箱清水式期であろう。

Y 1

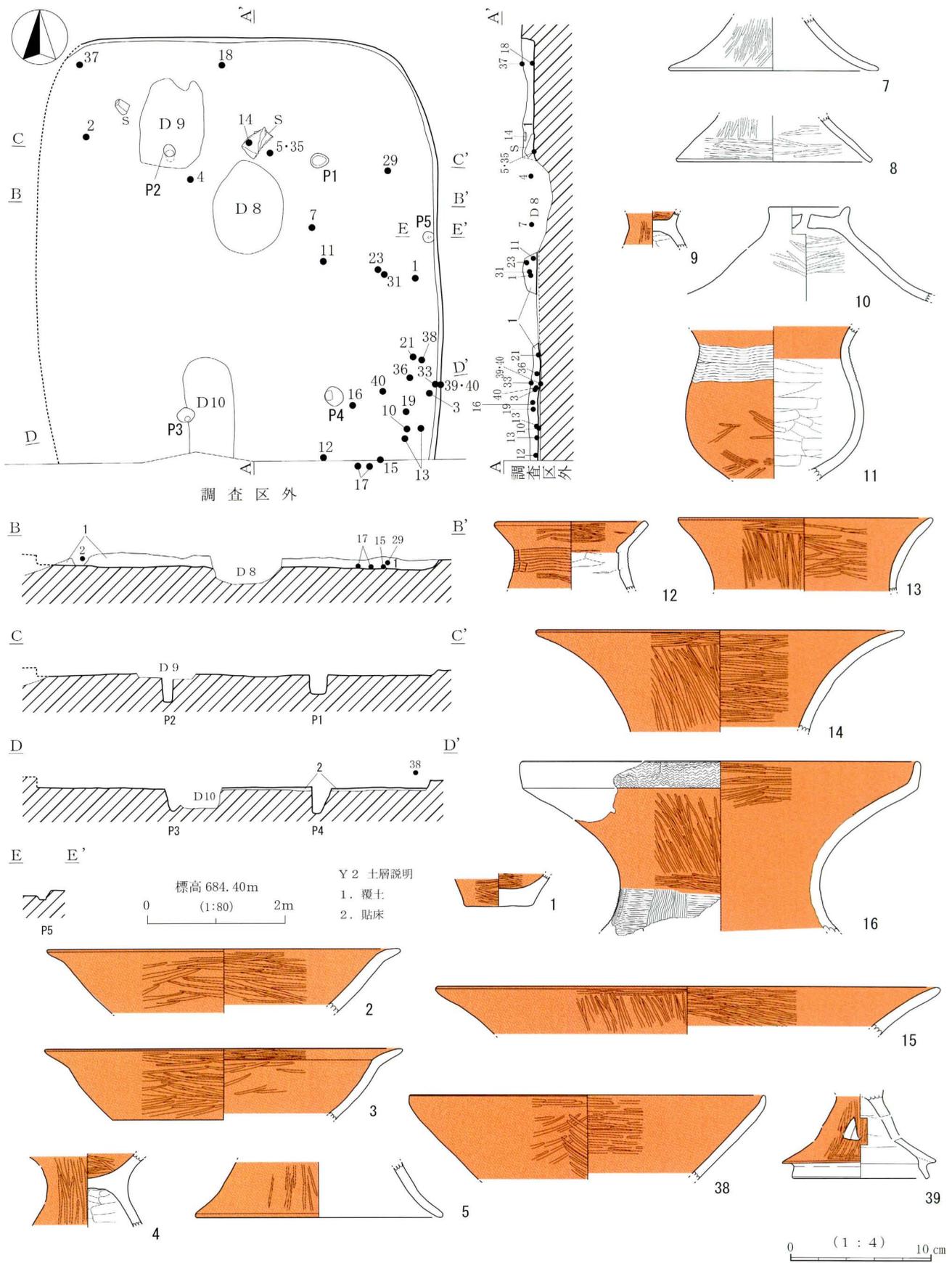


Y 1 土層説明

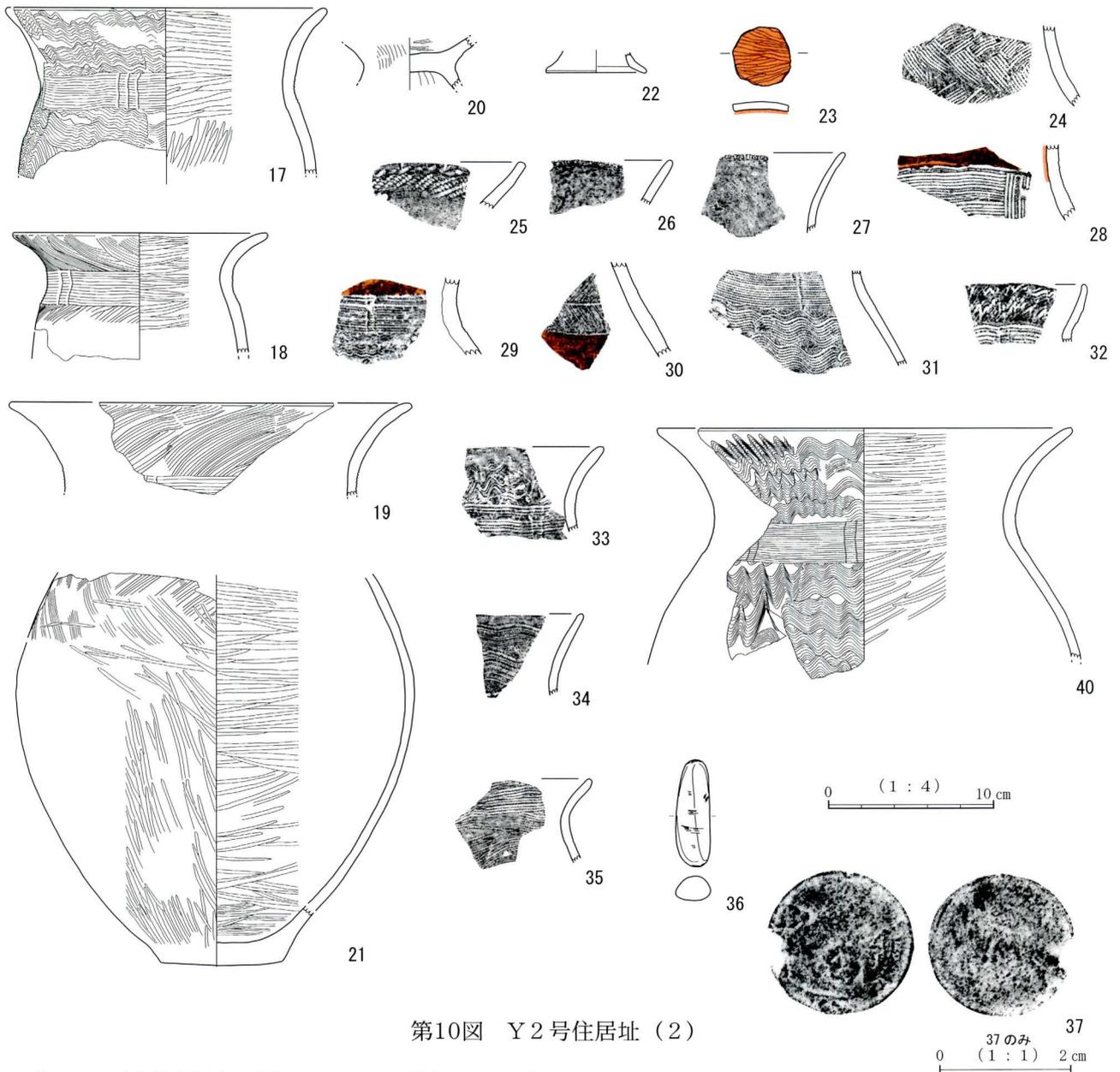
- 1. 黒褐色土 ロームブロック・軽石・焼土粒子・炭化物の含有、軟質、粒子が粗い
- 2. 周溝



第8図 Y1号住居址



第9図 Y2号住居址(1)



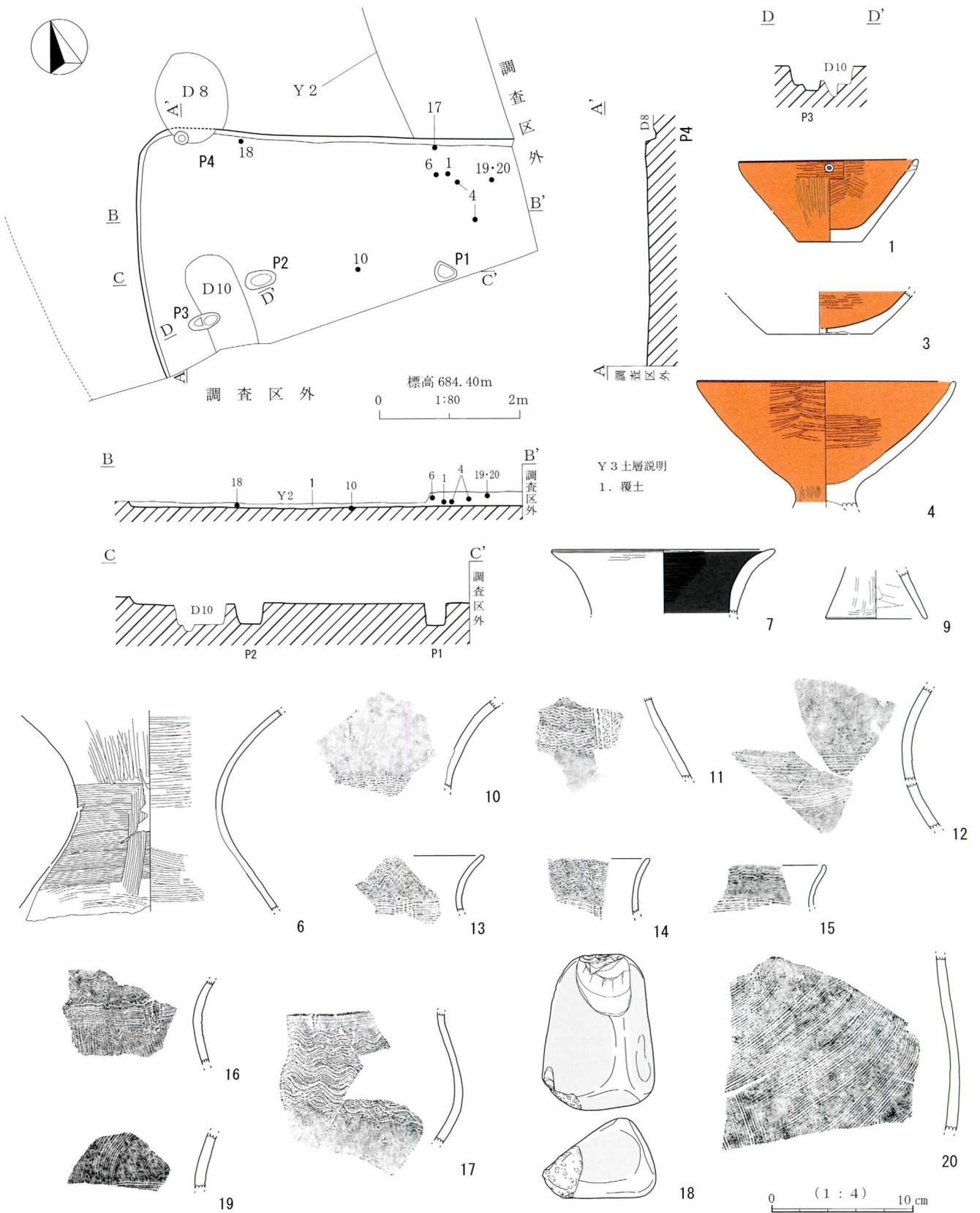
第10図 Y2号住居址(2)

3) Y3号住居址(第11図、図版3・14)

A22グリッドにあり、Y2号住居址、D8・D10号土坑に切られる。住居址の北西部を調査し、東西長564cm、南北長308cmを測り、隅丸長方形を呈すものとみられるが形態は不明である。従って主軸は北壁の北に対する値でN-21°-Eを測る。支柱穴のP1・P2は長径32・44cm、短径28・24cm、深さ32・30cmを測る。P3は長径44cm、短径24cm、深さ96cmで支柱穴と似た規模・形態であり、棟持柱であろうか。とすれば炉はP3の東にあるのであろうか。P4は壁下にあつて壁柱穴であろう。

出土遺物は弥生土器と磨・敲石が出土している。弥生土器は杯・高杯・壺・甕がある。1の杯は赤色塗彩され、口縁端部に1つ小孔がある。4の高杯の杯部は全体がゆるやかに内湾する素口縁である。6の壺は無彩色の壺で口縁は大きく外反している。頸部は櫛描T字文を幅広く施す。薄手で焼き締まった土器である。7の壺の内面はミガキ調整され黒色を呈する。10~12は無彩色で10・11の頸部は櫛描波状文に縦の櫛描文を施している。櫛描波状T字文とした。15の甕は口縁端部が内湾し、櫛描波状文が1段施文されており、弥生後期前葉の吉田式期のものであろうか。

これらより、本住居址は弥生時代後期前半古の吉田式期であろう。



第11圖 Y3号住居址

4) Y 4号住居址 (第7図 全体図参照)

D21グリッドにあり、Y 2に切られ、北端のプランを確認した。南北48cm、東西306cmを測るが堀下げは出来なかった。重複関係より弥生時代後期後半新より古い住居である。

5) Y 5号住居址 (第12・13図、図版1・3・4・15)

D 9グリッドにあり、M 1号溝址に切られ、Y 6・7号住居址を切る。隅丸長方形を呈し、南北582cm、東西400cm、最大深20cmを測る。主軸方位N-9°-Eを指す。主柱穴はP 1~P 4ではほぼ円形を呈し、長径44~56cm、短径38~54cm、深さ40~48cmを測る。

南壁下にある出入り口ピットP 5・P 6は楕円形を呈し、長径52・42cm、短径28・26cm、深さ20・24cmを測る。P 7は貯蔵穴であろうか。長径72cm、短径38cm、深さ12cmを測る。炉は北の主柱穴間にあり、7の壺底部(内径27cm、深さ6cm)を炉底としている。炉の堀方は東西24.5cm、南北22.5cm、深さ5cmを掘り込む。周囲には136×100cm、厚さ5cm程の炭化物範囲がある。

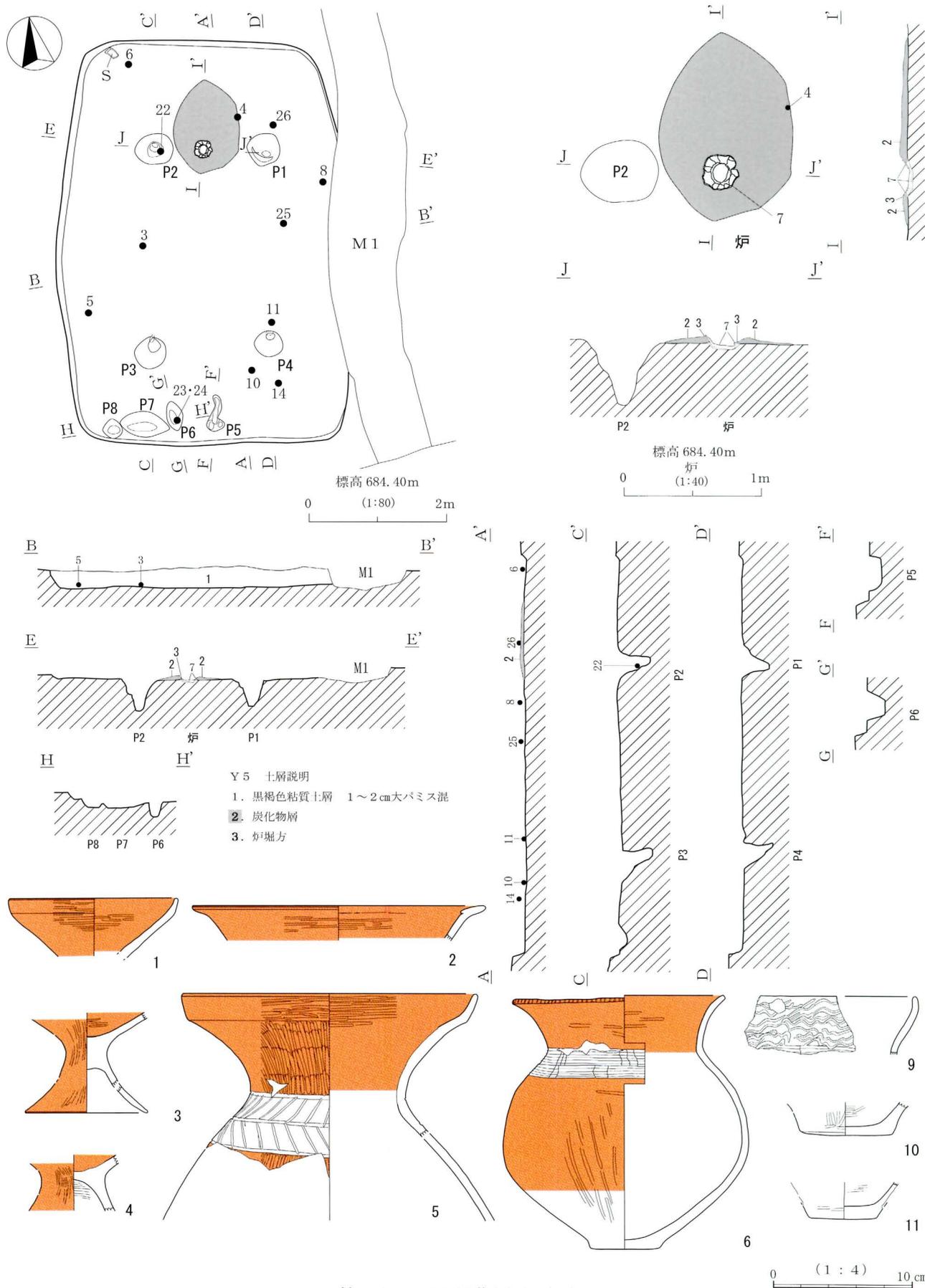
出土遺物には弥生土器、土板、磨・敲石がある。弥生土器には杯、高杯、壺、甕がある。

1の杯は口縁上端が直立し、赤色塗彩されている。2~4の高杯は赤色塗彩され、2の高杯杯部口縁の鏝は内側からの貼付痕(粘土紐)を残したままになっている。3の高杯の赤色塗彩は杯内面にわずかに赤色が残る程度である。5の壺は口縁上部が外稜をもつ受け口の壺で、口縁は大きく外反している。胴上部は球胴形を示す。頸部には篋描矢羽根文が施文される。6は胴部形が球胴形を呈し、口縁は頸部から大きく外反する。器肉は薄く、赤色塗彩されるが従来の弥生土器の赤色塗彩とは異なり淡いもので、所によっては彩色が落ちて地肌になっている。文様は口縁の口唇部に刻み目、頸部というより胴上部に櫛描簾状文、下にもう一段櫛描簾状文を施文する。下段の簾状文は櫛描が波状文になっているところもある。8は文様がないので機種は明確ではないが、台付甕とした。脚内面を除いてミガキ調整される。

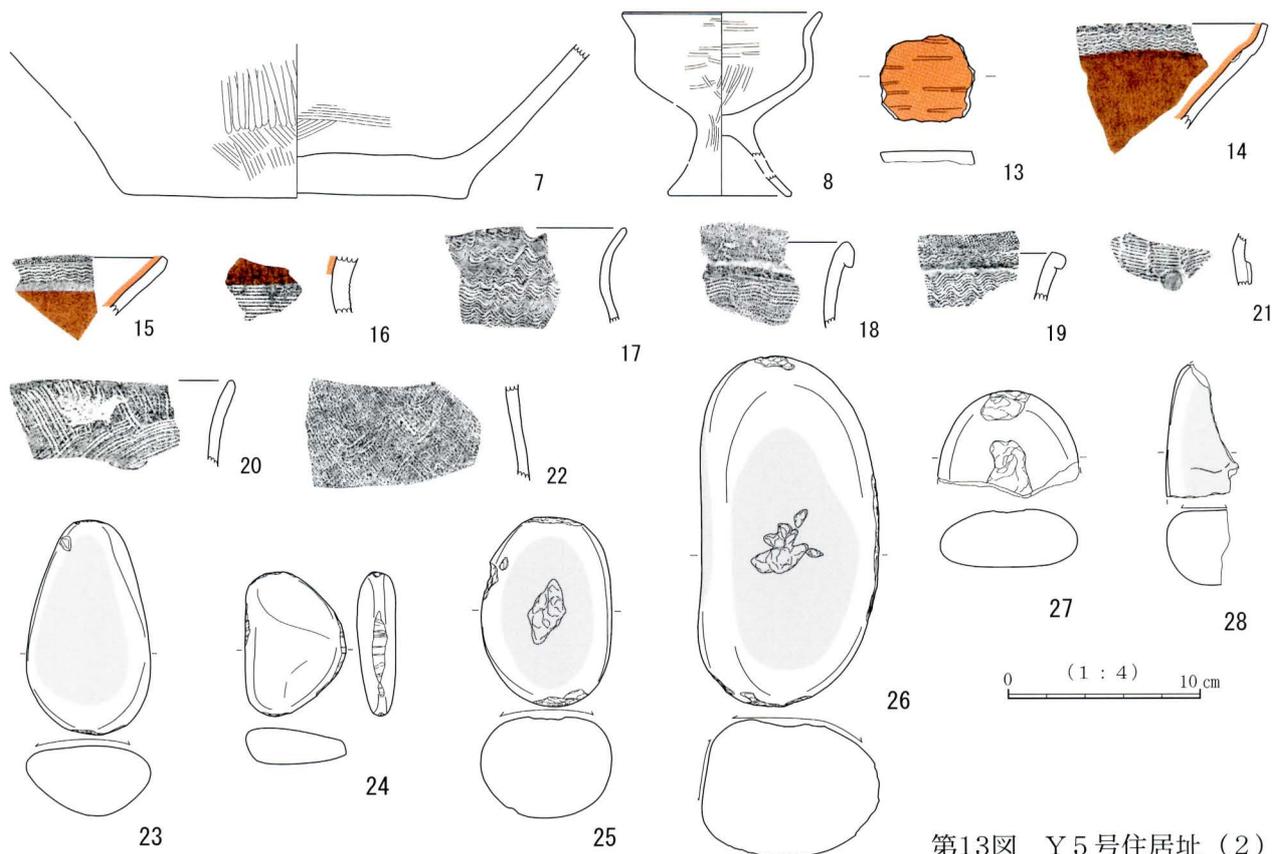
磨面と敲打痕を持つ石が6個あり、何かを加工をしていた住居址であろうか。顕著な使用痕を残している。

これらより、本住居址は弥生時代後期後半新の箱清水式期であろう。

竪穴住居址



第12図 Y5号住居址(1)



第13図 Y5号住居址(2)

6) Y6号住居址(第14・15図、図版1・4・15)

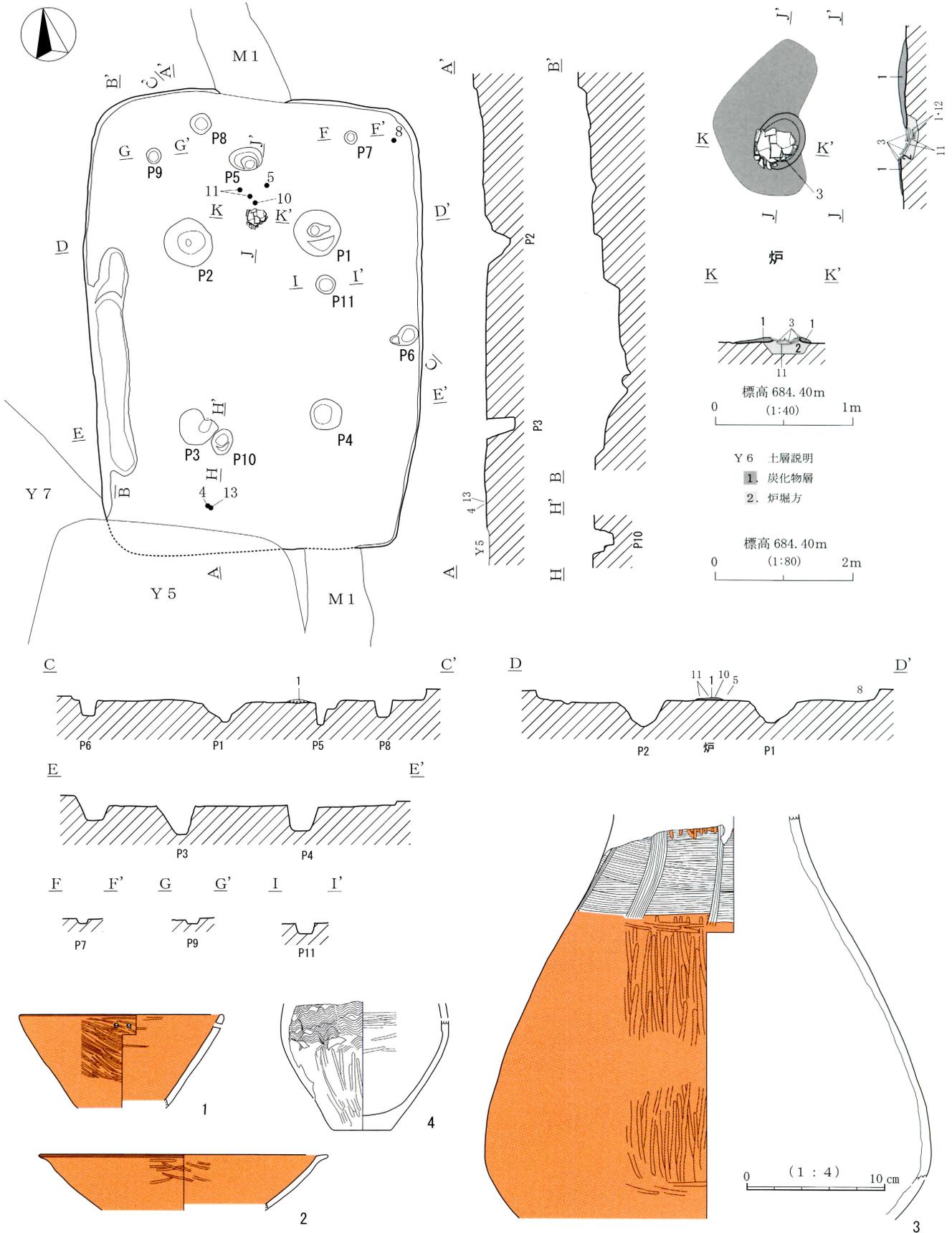
G10グリッドにあり、Y5・Y7号住居址、M1号溝址に切られる。主軸方位はN-7°-Eを指し、隅丸長方形を呈し、南北642cm、東西472cm、壁の最大深19cmを測る。西壁下には周溝がある。主柱穴はP1~P4で円形を呈し、長径46~72cm、短径46~72cmを測る。P1とP2の柱痕の形態は東西に長いプランである。P10はP3の建て替えであろうか、径36cmの円形で、深さ30cmを測る。P5は炉の北にあって、長径48cm、短径36cm、深さ36cmを測る棟持柱であろう。壁柱穴であろうP6~P9は円形で、径20~32cm、深さ8~28cmを測る。

炉は北側主柱穴の中間にあって、中央よりやや少し北に寄る。長径42cm、短径34cm、深さ10cmの楕円形の堀込みの上面に、1・3・11・12の杯と壺の胴部片を重ねて敷いて炉底としている。炉の北にある11の壺破片と10の甕片も炉底に使用されていたものが散乱したようである。炉の周囲の床には炭化物範囲がみられた。炉の土器は、1の杯片と12壺の胴部片を最下に敷き、次に11の壺をその上に、最上部は3の壺の胴部の内側の丸みを利用して炉底にしている。

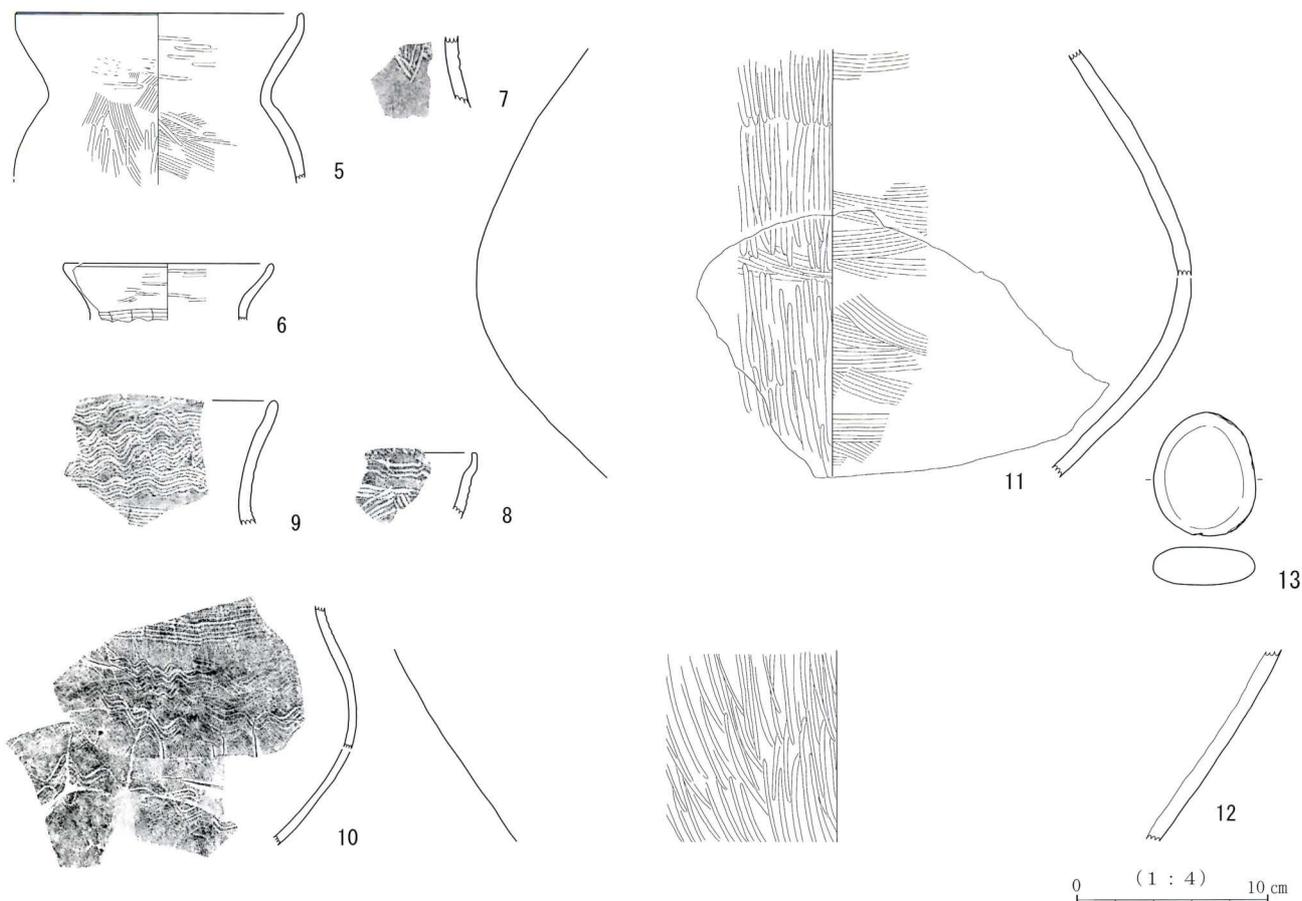
出土遺物には弥生土器と磨石がある。弥生土器は杯・高杯・壺・甕がある。1の杯は赤色塗彩され、直線的に開く口縁部である。炉の底から出土する。2は高杯で、鏝が短く内稜をもって水平に伸びる。3の壺は胴部上半分が炉底に使用され、胴形は無花果形で、肩は張っていない。頸部は櫛描T字文、胴部外面は赤色塗彩される。11の壺も炉に利用されたもので、胴下部への稜線を持たない無花果形のものである。無彩色である。5は口縁部が長く内湾気味に開き、端部は内湾する。器形は後期初頭の吉田式の甕と類似する。内外ともにハケ目調整後雑にミガキ調整されている。櫛描波状文は施文されていない。6の甕の口縁も端部は内湾しており、口縁は文様がなく頸部に等間隔の櫛描簾状文が施される。7・8は弥生中期の壺と甕であろうか。

炉に使用された土器は住居の使用時期より若干古いものの住居の使用時期に近いものである。1の底径の割合の大きい口縁が直線的な杯、3の壺の胴肩部の張らない器形に櫛描T字文の施文などから、本住居址は弥生時代後期前半新の吉田式期であろう。

竖穴住居址



第14图 Y6号住居址(1)



第15図 Y6号住居址(2)

7) Y7号住居址(第16・17図、図版1・4・5・15)

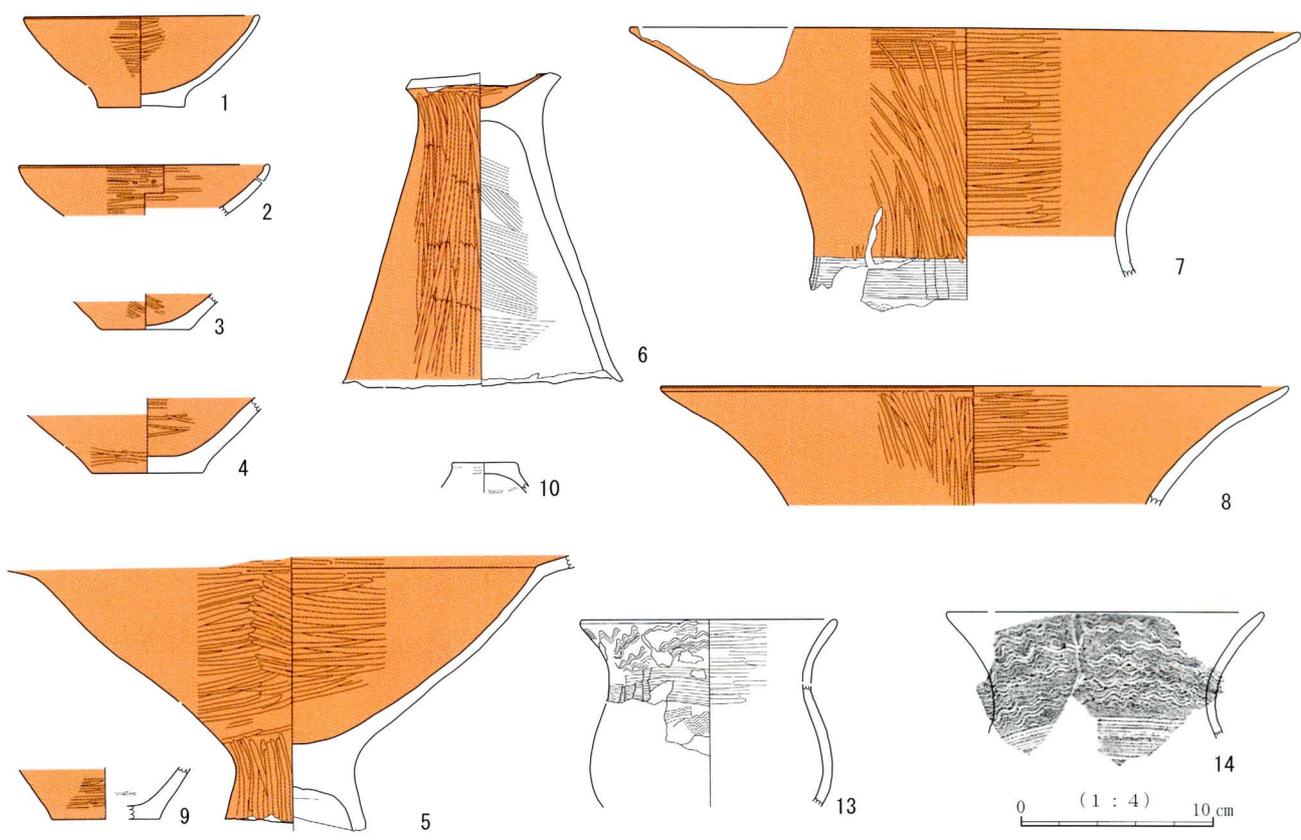
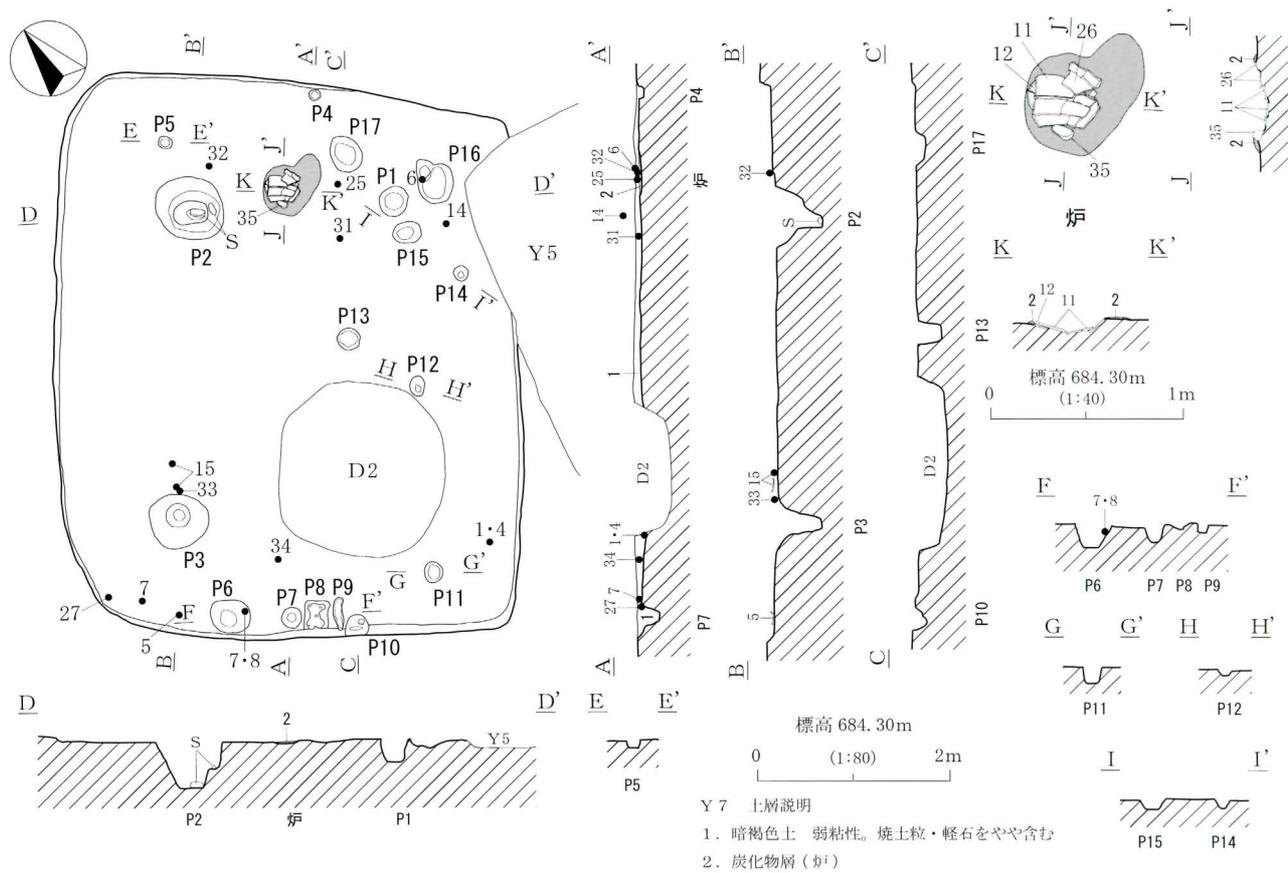
E5グリッドにあり、Y5号住居址・D2号土坑に切られ、Y6号住居址を切る。隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-40°-Eを指す。南北577cm、東西480cm、最大深8cmを測る。主柱穴はP1~P3で、南東はD2に壊されたようである。P1は円形で径32cm、深さ24cmを測る。P2・P3は長径72・64cm、短径68・56cm、深さ42・48cmを測る。P6は貯蔵穴で42×36cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。P7~P9は出入り口のピットとみられる。P4・P5・P12・P14・P15ピットはほぼ円形で径20cm、深さ8cmと小規模なものである。P16・P17の径は40cm前後と大きいが浅い。

炉は北の主柱穴間の中央よりやや北にあって、東西40cm、南北42cm、深さ7cmの堀込みに、11・12の壺胴部を敷いて炉底としている。

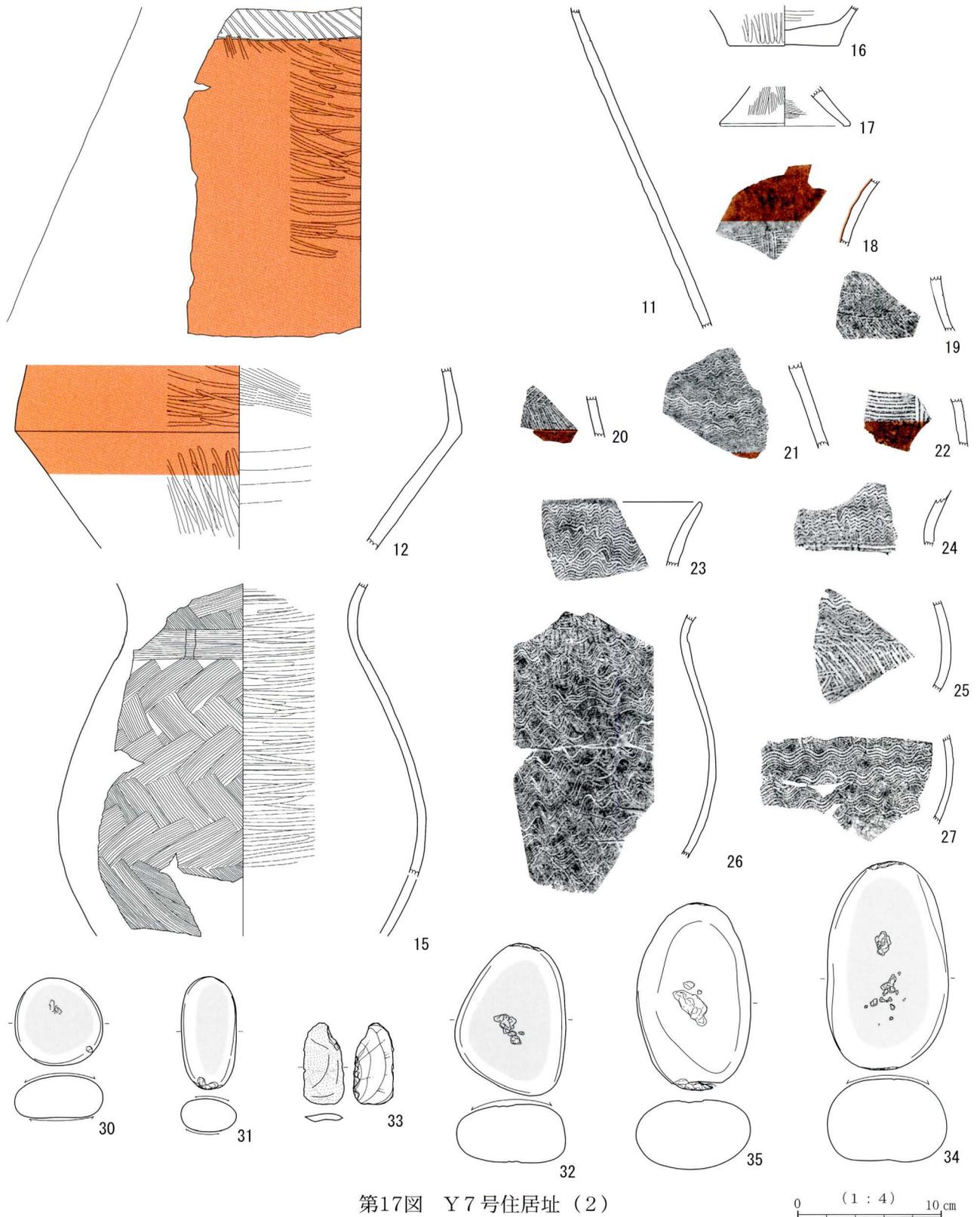
出土遺物には弥生土器と編み物石1個、磨・敲石6個がある。土器は杯・高杯・蓋・壺・甕がある。1の杯は底部が柱状で口縁は内湾気味に開き、内外赤色塗彩される。5・6の高杯は大型品で、5の杯部鏝は内稜を持って外に開く。6の脚は高さをもち筒状である。5・6とも器台として最利用されたようである。

7の壺は口縁部径34.8cmを測る大型品で、口縁は大きく外反し、赤色塗彩される。頸部には櫛描簾状文、その下段に櫛描波状文が施文されている。これも南西隅の壁下において口縁を下にして器台として再利用されたようである。甕は櫛描波状文と櫛描斜走文がある。甕の頸部は窄まって口縁が大きく外反する器形である。炉に使用された11の壺は胴上部が直線的で頸部はヘラ描の斜走文が施される。12の胴下部が稜を持って直線的に底部に至るなど、弥生後期後半古段階の土器様相をもっている。

これらより本住居址は弥生時代後期後半古の箱清水式期であろうか。



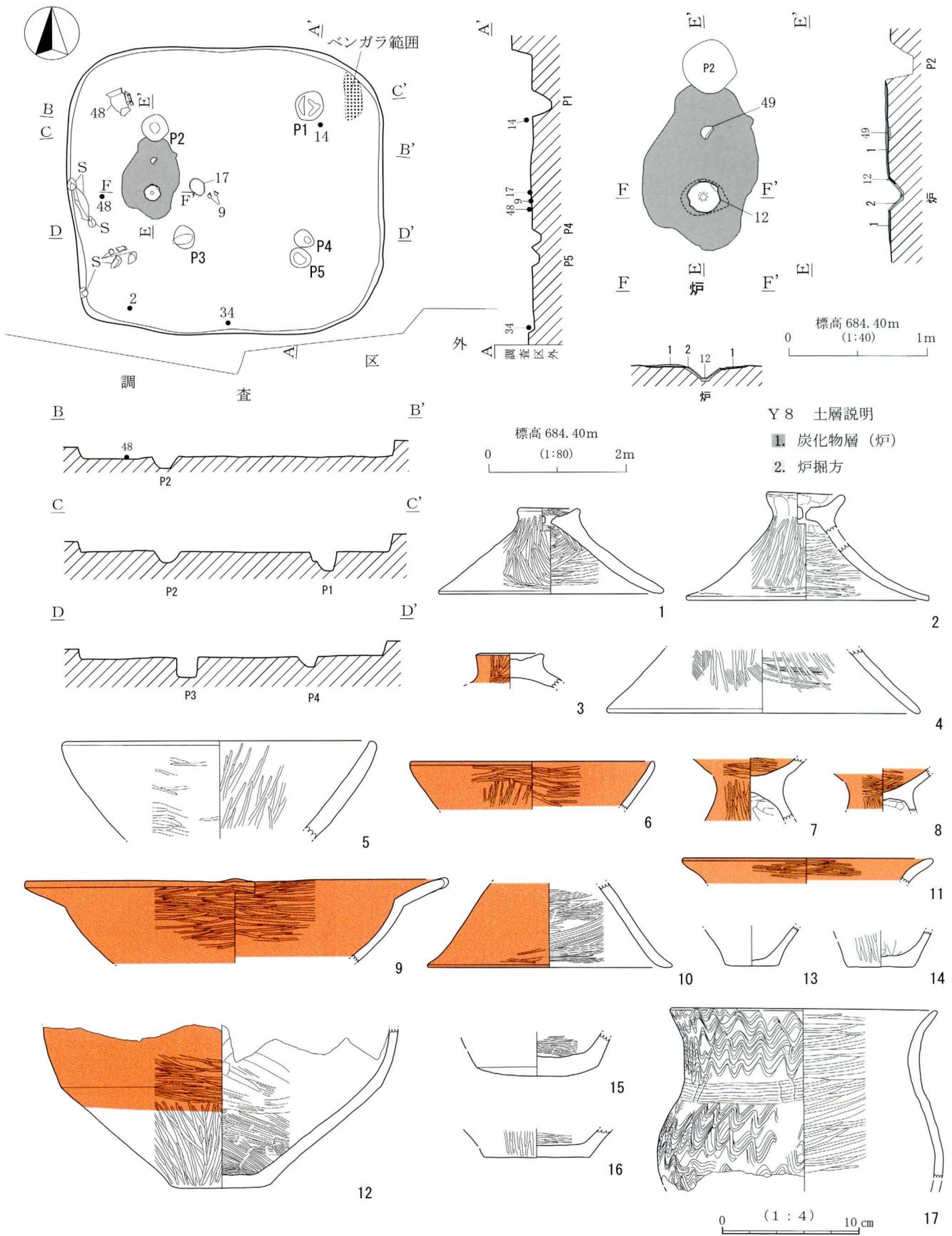
第16図 Y7号住居址（1）



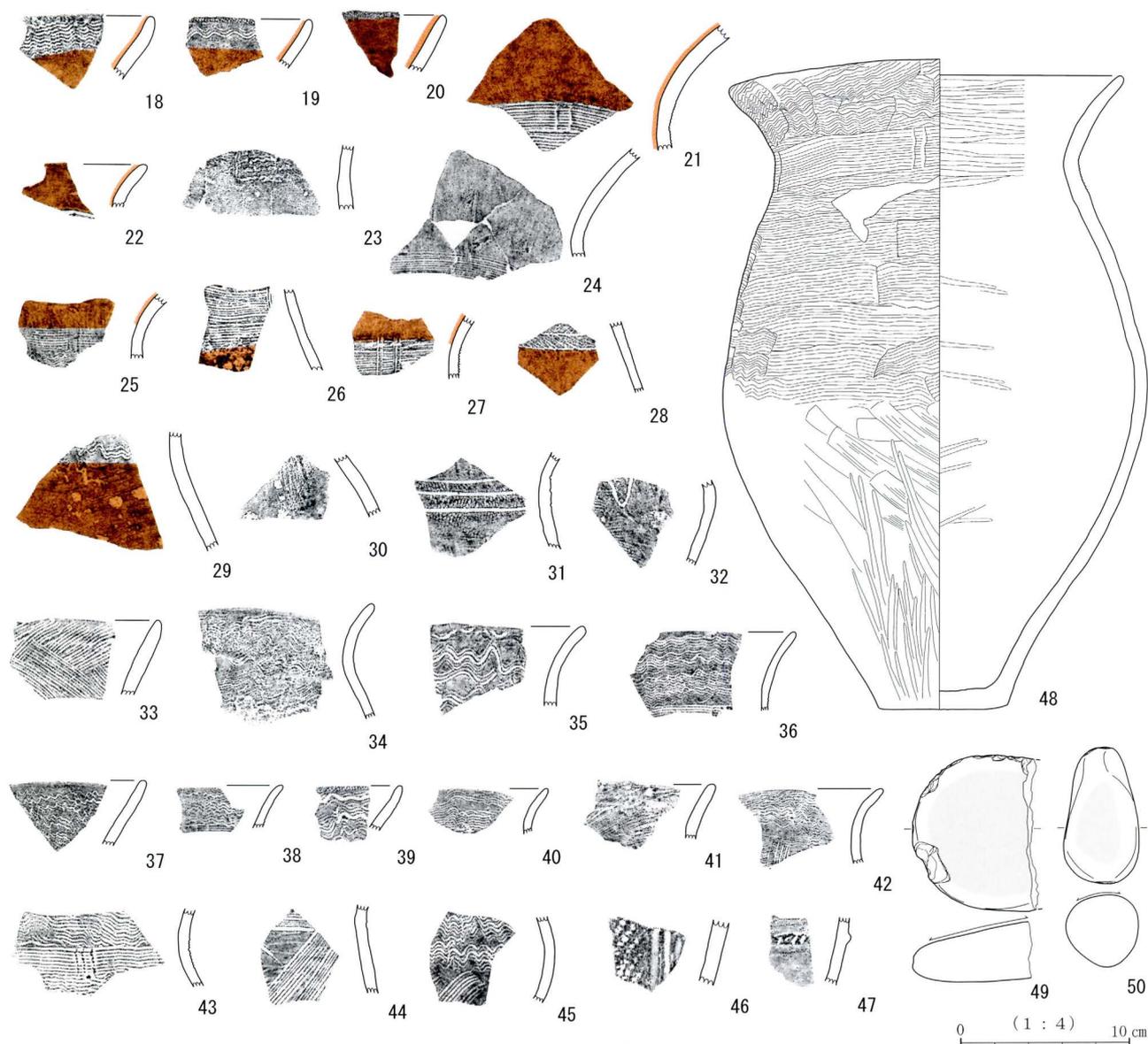
第17図 Y7号住居址(2)

8) Y8号住居址(第18・19図、図版1・5・6・15)

C4グリッドにあり、Y9・Y10・Y11号住居址を切る。主軸方位はN-89°-Wを指す。住居址の形態は方形に近い隅丸長方形を呈し、南北412cm、東西456cm、最大深10cmを測る。主柱穴はP1



第18図 Y8号住居址 (1)



第19図 Y8号住居址(2)

～P5で、P4とP5はどちらかが建て替えであろうか。円形で、長径32～44cm、短径26～41cm、深さ12～32cmを測る。炉は住居址の西側のP2とP3の間にある。12の壺底部を埋設して炉底としている。炉は径24cm、深さ11cmを測る。周囲には炭化物範囲が見られる。

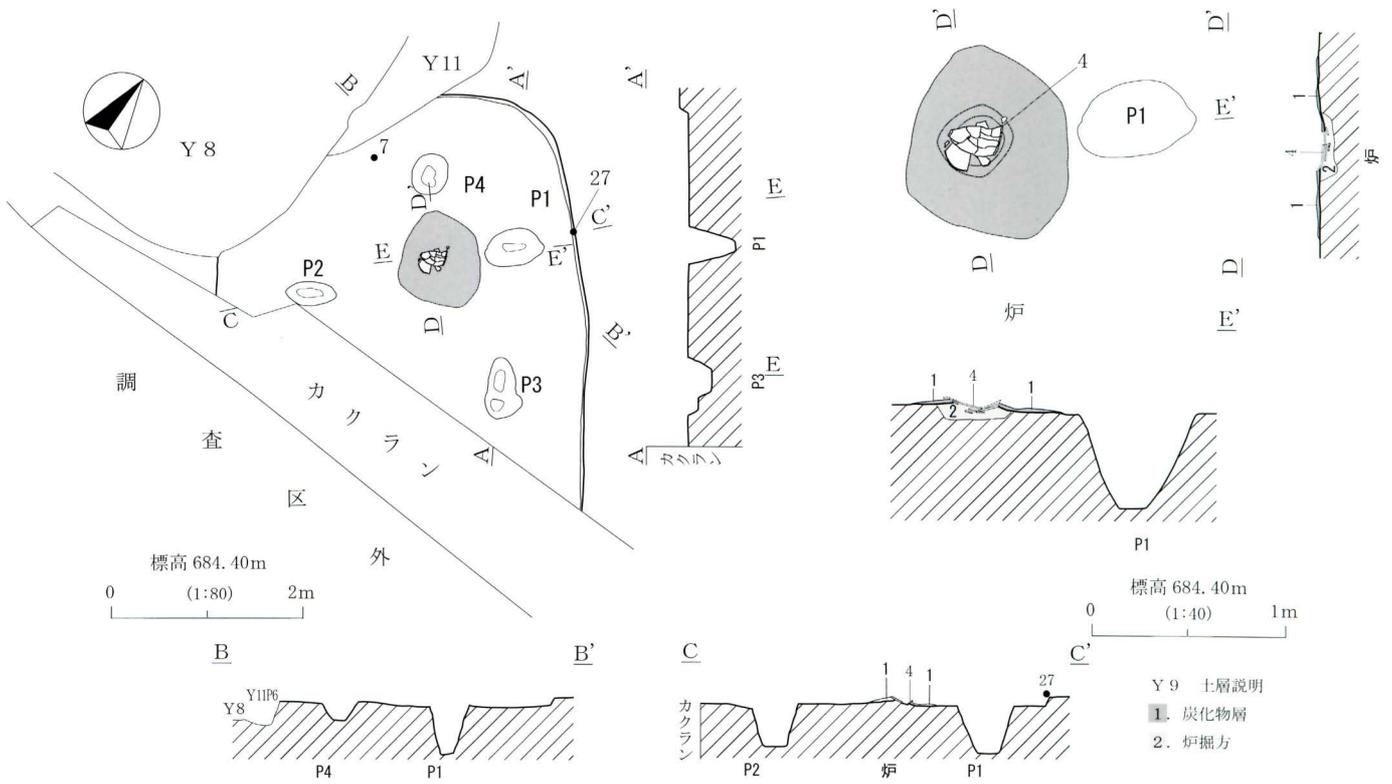
出土遺物には弥生土器・縄文土器片と磨・敲石がある。

弥生土器は蓋・鉢・杯・高杯・壺・甕がある。蓋は3を除いて無彩色である。2の蓋は裾が大きく外反して広がっている。5の鉢は無彩色で小片であり、本址に伴わない前代のものであろう。9の高杯杯部は内湾して開き、内稜をもって鍔が直線的に外に延びている。12の炉に使用した壺下部は胴部が球胴形に膨らみ、下部に外稜をもち、ほぼ直線的に底部にいたる。17の甕は口縁が筒状で端部が外反する。胴部は球胴形を呈す。48の甕は高38cmの大きい甕で住居址の北東隅からほぼ完形で出土している。口縁は比較的短く外反し、胴部は直線的に中位にかけて膨らみが最大径をもつ。施文は口縁と胴上半に、櫛描波状文というより直線文に近いものである。

これらより本址は弥生時代後期後半新の箱清水式期の住居址であろう。

9) Y 9号住居址 (第20・21 図、図版6・7)

C 5グリッドにあり、Y 8・Y11号住居址に切られ、Y10号住居を切る。南は攪乱と調査区域外のため明らかではない。住居址は隅丸長方形を呈すものと思われる。主軸方位はN-45°-Wを指す。南北は454cmを調査し、東西376cm、最大深9cmを測る。

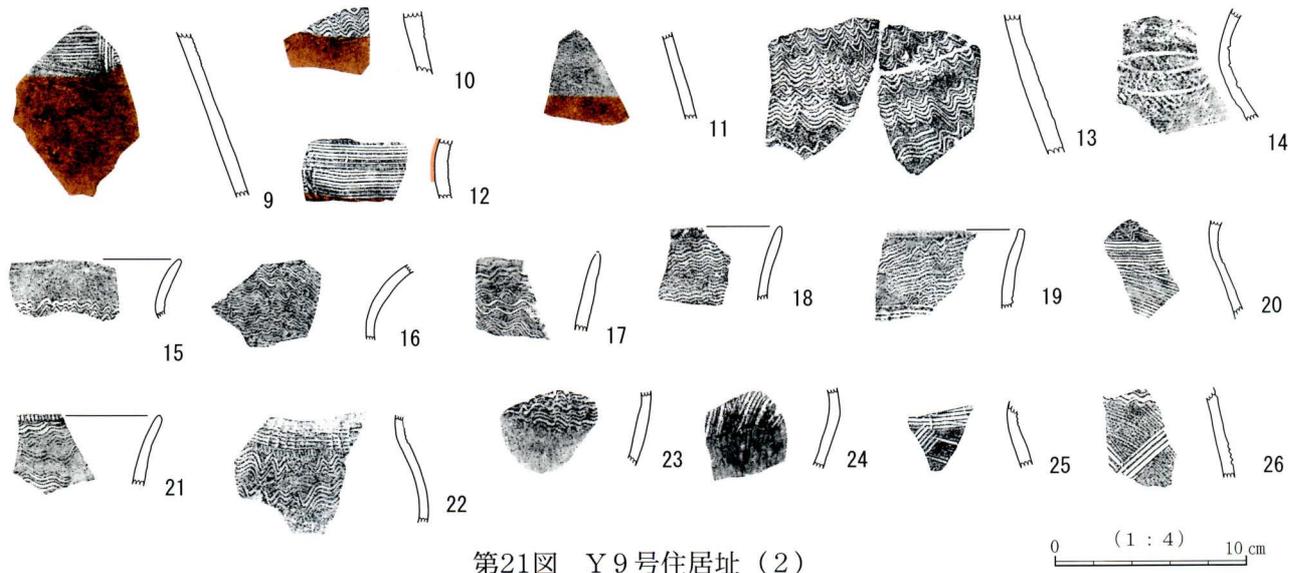


第20図 Y 9号住居址 (1)

主柱穴はP 1～P 3で、P 3は柱穴が重なっているようである。P 1・P 2は東西に長い楕円形を呈し、長径60・54cm、短径38・26cm、深さ49・44cmを測る。P 3は北側の柱穴が深く24cmを測り、南北に長い。P 4は棟持柱であろうかほぼ円形で長径42cm、短径36cm、深さ20cmを測る。炉はP 1とP 2の北の主柱穴間にあり、4の壺を敷いて炉底としている。周囲には炭化物範囲が見られた。炉堀方は38×35cmの隅丸方形のプランを呈し、深さ9cmを測る。

出土遺物には弥生土器、土製円板、土製匙がある。弥生土器は杯・高杯・壺・甕がある。4の壺は炉底として再利用されていたもので、無彩色で、口縁と胴上部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文を施す。灰が多く付着している。5の土板は弥生土器の壺胴部を二次利用し、端部は明らかに磨っている。27の土製匙は推定で長さ10cm、匙幅4.7cm、厚さ1.9cmを測り、無彩色である。ミガキ調整は手捏痕が残り、それほど丁寧ではない。

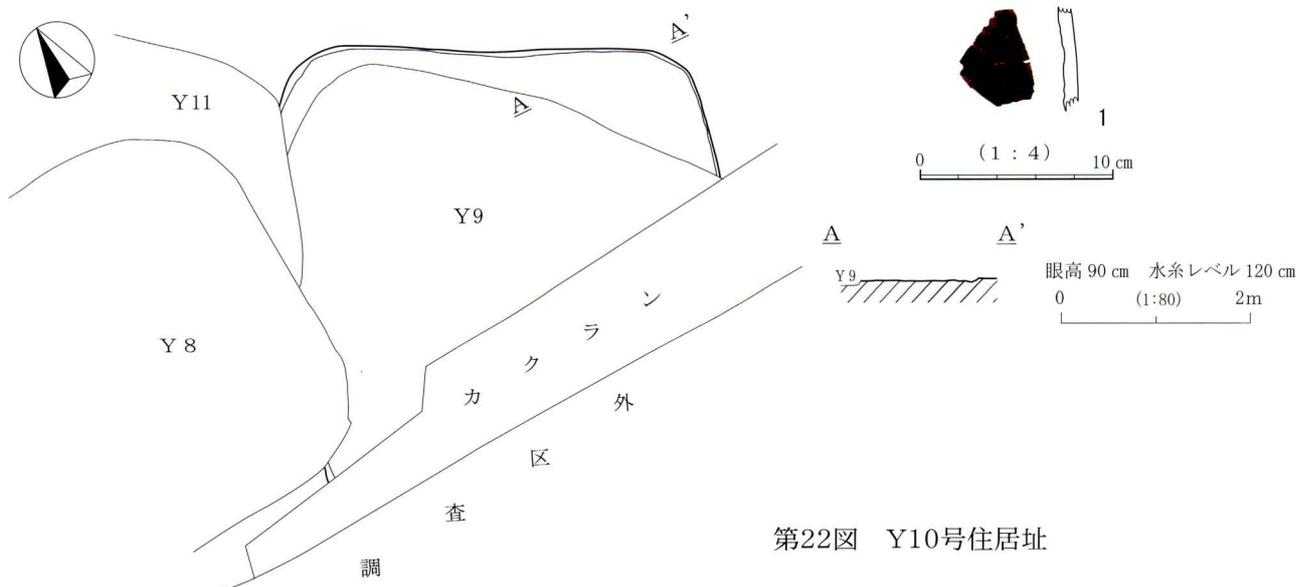
これらより本住居址は4の炉の土器から見ると弥生時代後期前半古の吉田式期ないし、それより若干新しいであろう。



第21図 Y 9号住居址 (2)

10) Y 10号住居址 (第 22 図、図版 7)

B 6 グリッドにあり、Y 9号住居址と重なり切られている。部分的な残存のため、プランと規模は不明確である。また弥生時代の赤色塗彩された壺胴部片があるが、重複関係から、弥生時代後期前半古ないしそれ以前であろうと推定されるものである。



第22図 Y10号住居址

11) Y11号住居址 (第23・24図、図版1・11・15・16)

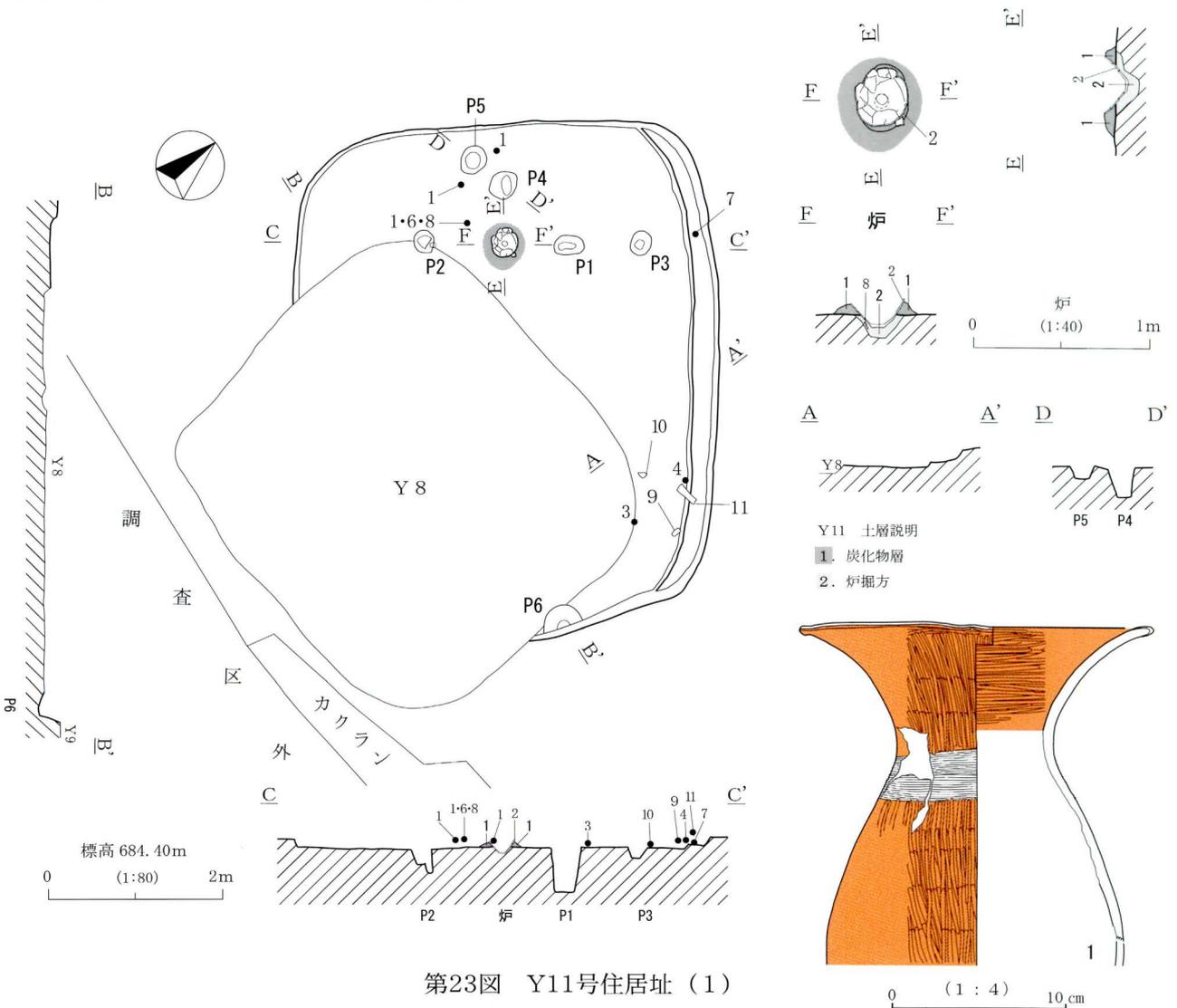
E 2 グリッドにあり、Y 8 号住居址に切られ、Y 9・Y10号住居址を切る。隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-39°-Wを指す。南北536cm、東西436cm、壁最大深21cmを測る。主柱穴はP 1・P 2 で楕円形と円形を呈し、長径34・26cm、短径20・24cm、深さ54・32cmを測る。P 4 は棟持柱で円形を呈し、径32cm、深さ34cmを測る。P 3・P 5 は壁柱穴であろうか長径28・36cm、深さ12・16cmで円形に近い。P 6 は南壁にあって、半円形で長径48cm、深さ18cmを測る。

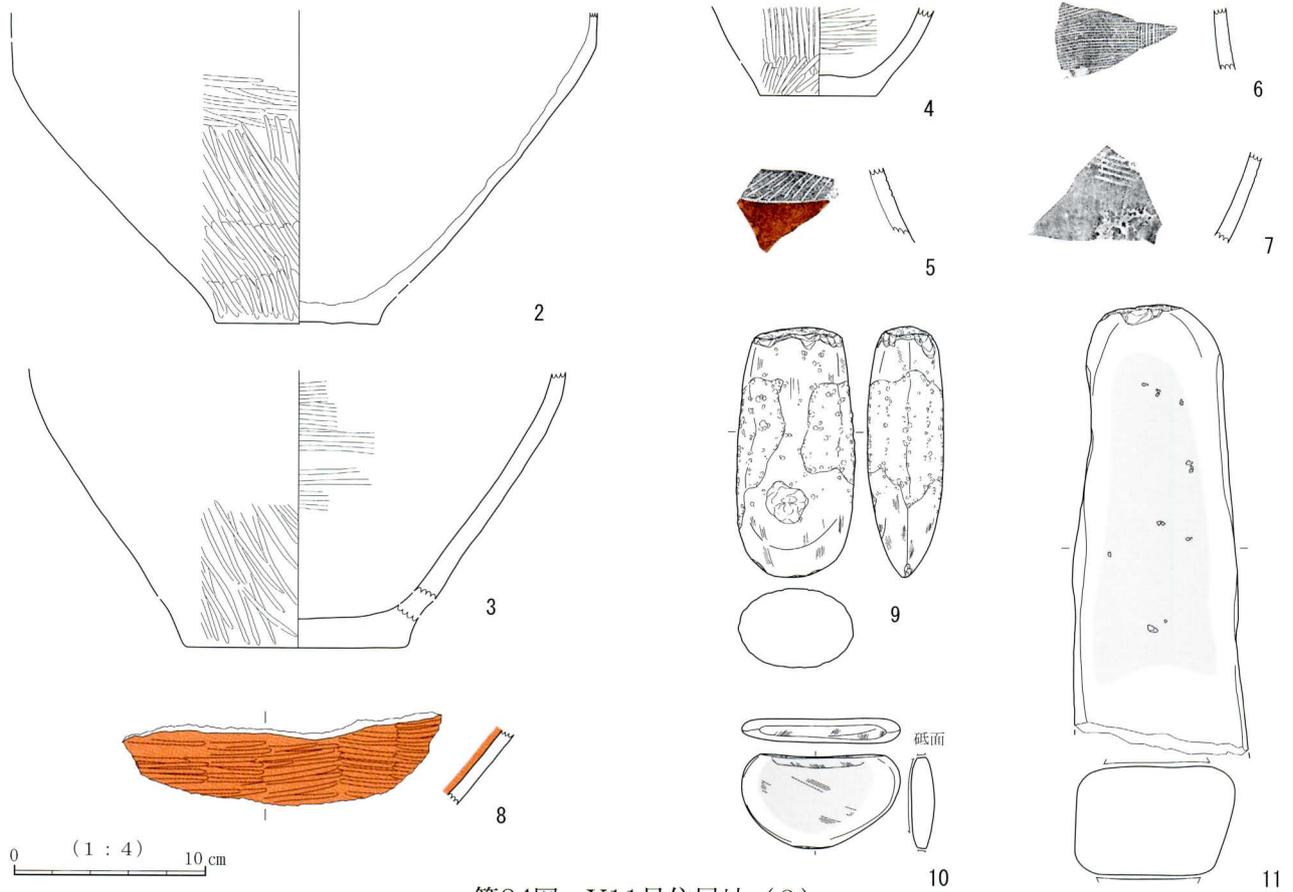
炉は北の主柱穴間にあって、長径39cm、短径29cmを測る楕円形の落ち込みに2の壺胴下部を埋設して炉底としている。2の壺の内側で径30cm、深さ15cmを測る。内面は剥離し、端部は焼けて赤褐色化している。

出土遺物には弥生土器、磨製石斧、砥石、磨・敲石がある。1の壺は頸部に線の細い櫛描文を施し、他はミガキ・赤色塗彩されている。口縁端部には突起を4個もつ。口縁端部は平に近く伸び、胴上部は張らずになで肩である。最大径を口縁にもつ。2の炉に使用した壺は無彩色であり、胴下部が器高をもち、外稜をもっていない。

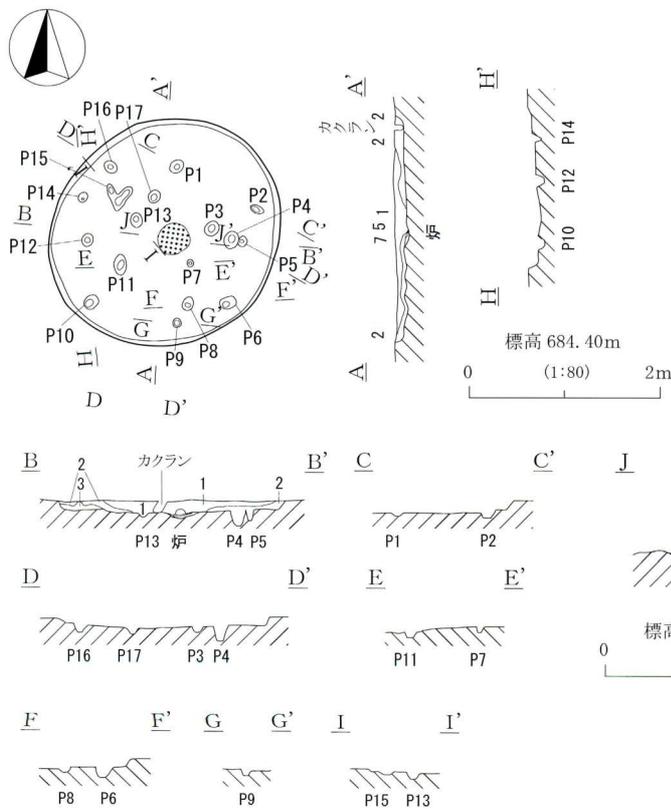
南東の壁下に3点の石が集中しており、9の磨製石斧は長さ13.1cm、幅6.3cmを測り、基部を使って敲石として転用している。10は砂岩製の砥石で、擦痕がある。11は長さ23.6cm、重さ2.43kg、磨面をもち、上端には打痕が残る。

これらより本址は弥生時代後期後半古の箱清水式期であろうか。Y 9号住居址と重複関係があることから、本住居址が新しいものとしたが、限られた資料なので明確ではない。



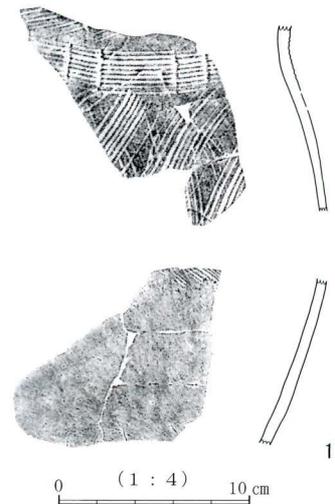


第24図 Y11号住居址 (2)



Y12 土層説明

1. 黒褐色土: 軟質で粒子細かく、やや粘性あり。軽石を少々、ローム粒子を含む。
2. 黄褐色土: 軟質で粒子細かく、粘性あり。ローム粒子を含む。
3. 2層よりやや明るく、軟質で粘性あり。2層と地山の混合土。
4. 灰層
- 焼土
6. 暗褐色土: 粒子細かく、粘性少ない。炭化物が若干混入している。
7. 黄褐色土: 粒子細かく、粘性あり。6層が若干混入している。



第25図 Y12号住居址

12) Y12号住居址 (第25図、図版1・7)

G6グリッドにあり、円形を呈し、長軸は242cm、短軸217cm、最大の深さ11cmを測る。長軸方位はN-53°-Wを指す。中央に灰・焼土範囲があり、P1~P17の多数の小ピットがある。ピットはP4・P15を除くと、径8~15cm、深さ5~9cmと浅く小さい。P4は長径19cm、深さ16cmを測り、P15は不定形である。

炉は中央にあり、径34cm、深さ4cmを測り、灰の下に焼土、若干の炭化物粒子を含む層がみられた。

出土遺物には弥生土器がある。弥生土器は甕のみで、頸部に櫛描簾状文、口縁・胴上部に櫛描斜走文を施している。施文が整って深いことなどから、弥生中期の甕片とみられる。

これらより弥生中期の住居址とみられるが規模が小さく、円形の住居址の例が近辺にないことから、必ずしも住居址とすることもないとも思われる。

第2節 土坑

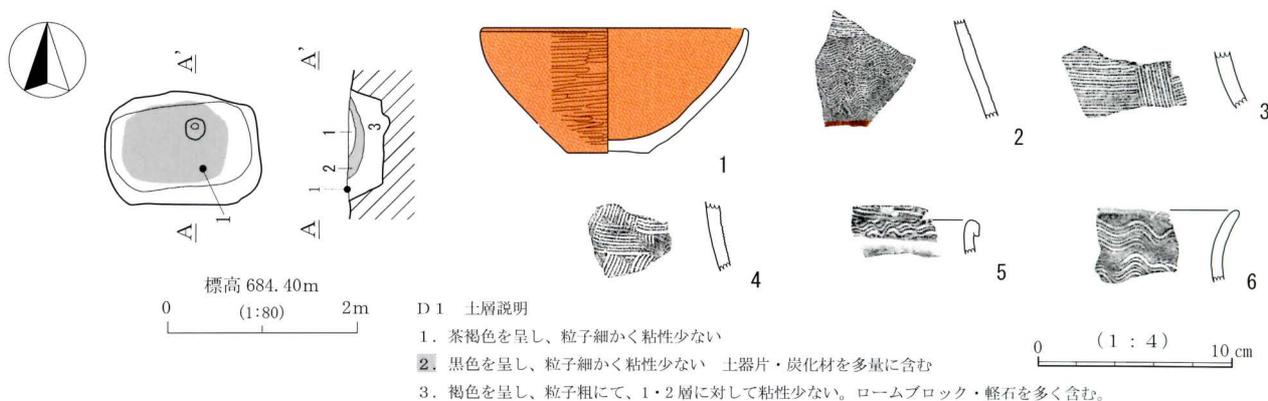
1) D1号土坑 (第26図、図版1・7)

E14グリッドにあり、Y1号住居址を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-89°-Eを指す。

底面は平坦である。長軸長163cm、短軸長118cm、深さ40cmを測る。底面には径22cm、深さ6cmの円形ピットがある。覆土の上層に炭化材層が見られた。上面から粉状の骨片が出土している。

出土遺物には弥生土器と炭化材と骨片がある。1の杯は小さな底部から口縁が全体に内湾気味に外傾するもので、内外赤色塗彩される。赤色塗彩は落ち、大半はわずかに顔料を残す程度である。拓本には壺と甕の破片があり、5の甕は折り返し口縁で、折り返し部に波状文が施される。

これらより本土坑は弥生時代後期箱清水期で、Y1号住居址より新しい。



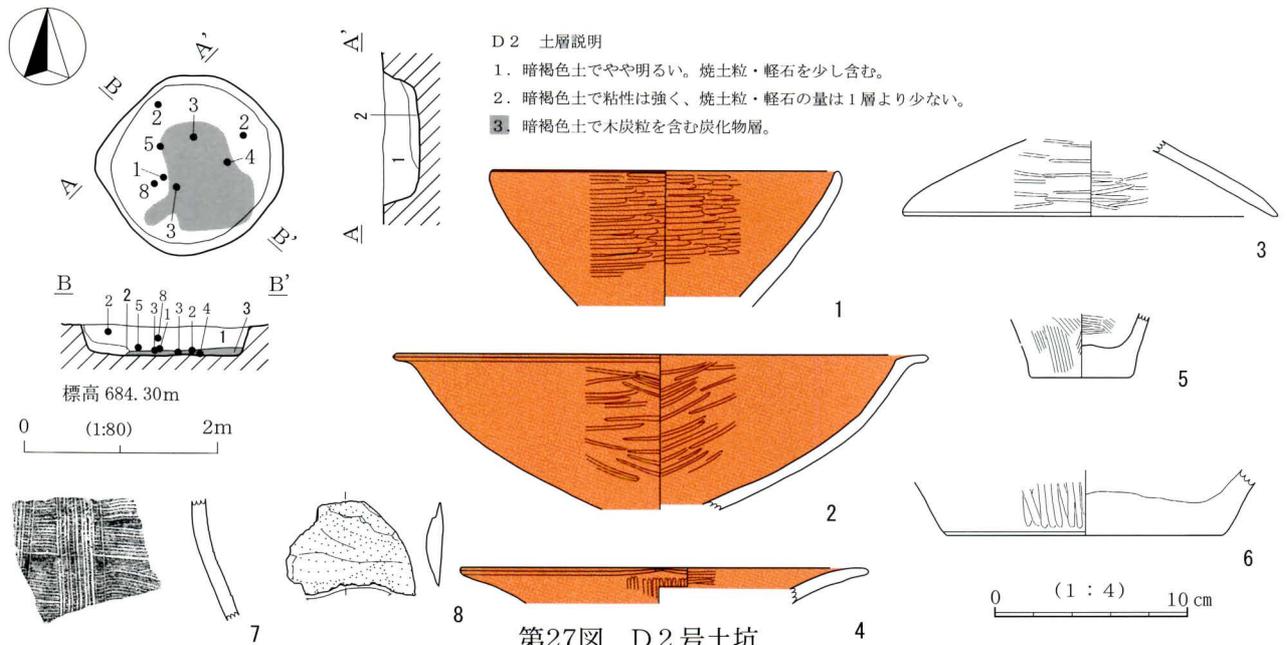
第26図 D1土坑

2) D2号土坑 (第27図、図版7・15)

D6グリッドにあり、Y7号住居址を切る。角張った円形を呈す。長軸方位はN-48°-Eを指す。長軸184cm、短軸176cm、深さ38cmを測る。底面には炭化物層が4cmの厚さで堆積していた。炭化物層の上面からは、1~5の杯・高杯・蓋・壺が出土する。上層には焼土粒子も含んでいる。

出土遺物には弥生土器と頁岩製の使用痕のある剥片が出土する。弥生土器は杯・高杯・蓋・壺形土器である。杯・高杯・壺の口縁は赤色塗彩されている。高杯は鏝が内稜をもって短く直に伸びる。

これらより本土坑は弥生時代後期後半箱清水式期で、Y7号住居址より新しい。

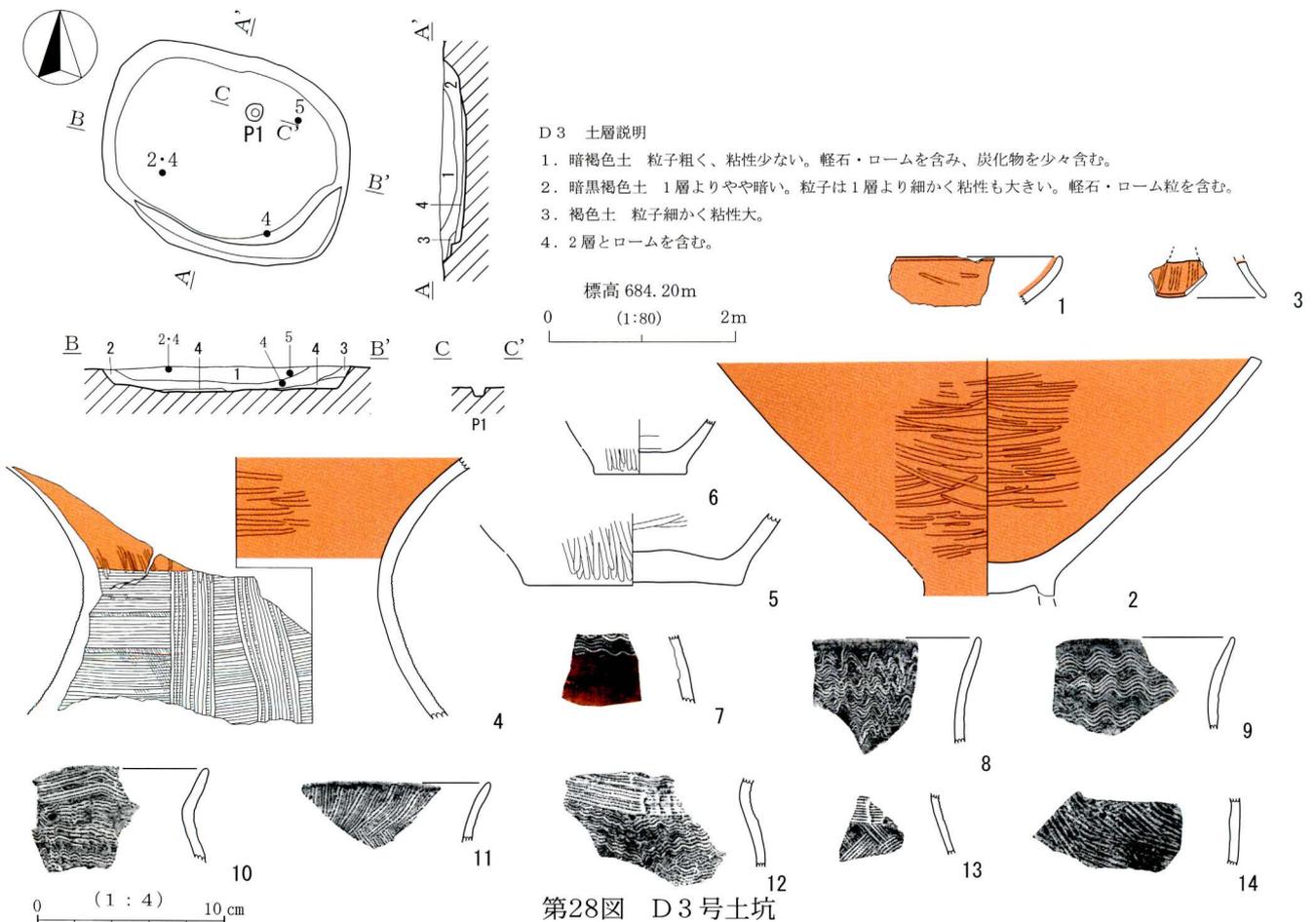


3) D3土坑 (第28図、図版1・7)

J11グリッドにあり、重複関係はない。隅丸長方形を呈し、長軸267cm、短軸221cm、深さ27cmを測る。長軸方位はN-74°-Wを指す。底面は4層上面とみられ、舟底形を呈す。

出土遺物には弥生土器がある。弥生土器は、杯・高杯・壺・甕がある。杯・高杯・壺口縁部は赤色塗彩される。2の高杯杯部は直線的に外傾している。4の壺は口縁が大きく外反して、頸部に櫛描T字文が施される大型の壺片である。甕は櫛描波状文が施文される。14はハケ目のある薄手の甕である。

これらより弥生時代後期箱清水式期の土坑であろう。



4) D 4号土坑 (第29図)

J 10グリッドにあり、径60cmの円形を呈す。深さは7cmと浅く、底面はほぼ平坦である。重複関係はないが、東に隣接してD 3がある。

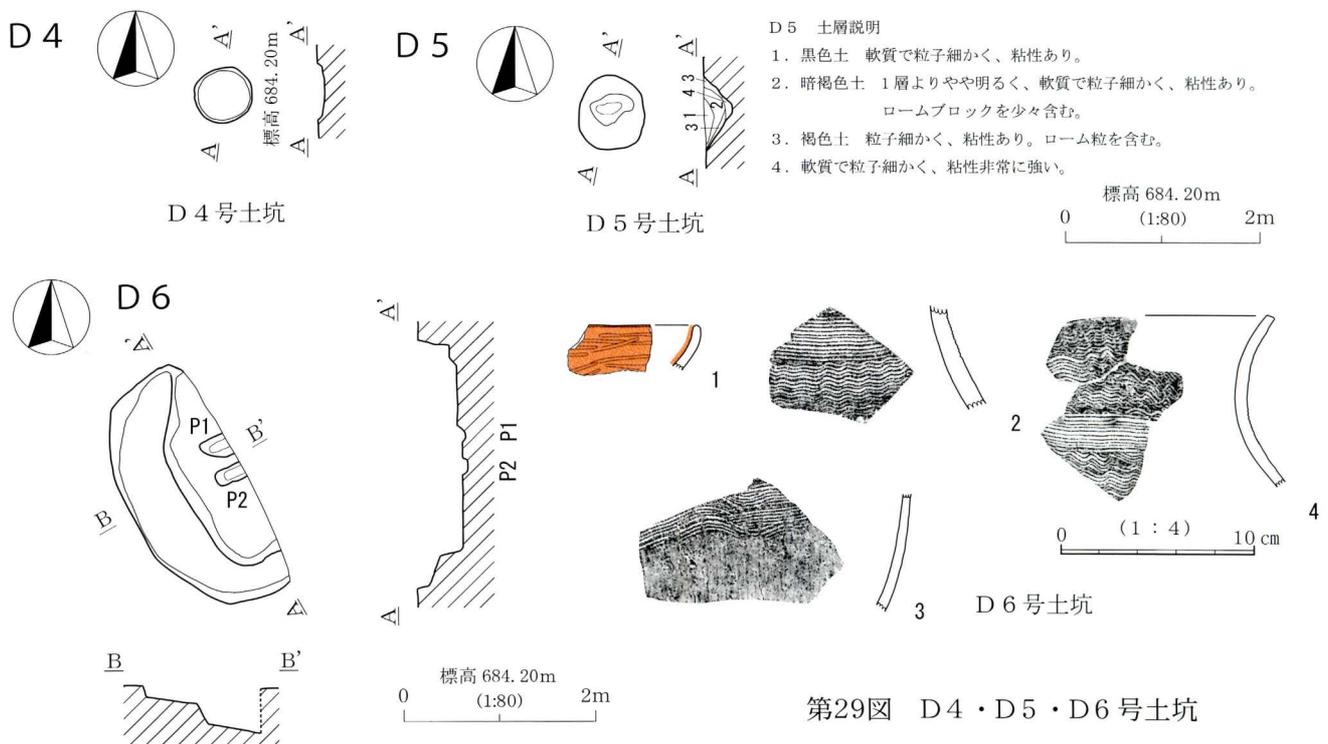
出土遺物はなく、重複関係もないことから時代は不明である。

5) D 5号土坑 (第29図)

G 7グリッドにあり、長軸79cm、短軸69cm、深さ28cmを測る。長軸方位はN-6°-Wである。覆土の堆積・形態から風倒木跡であろうか。遺物は出土していない。

6) D 6号土坑 (第29図、図版 8)

K 14グリッドにあり、半域のみ調査している。長軸長264cm、短軸125cm、深さ55cmを測る。底面にP 1・P 2があり、10・6cm底面より低い。形態は半円形を呈す。遺物はなく、覆土が不明であり、重複関係もないことから、性格・時期ともに不明である。

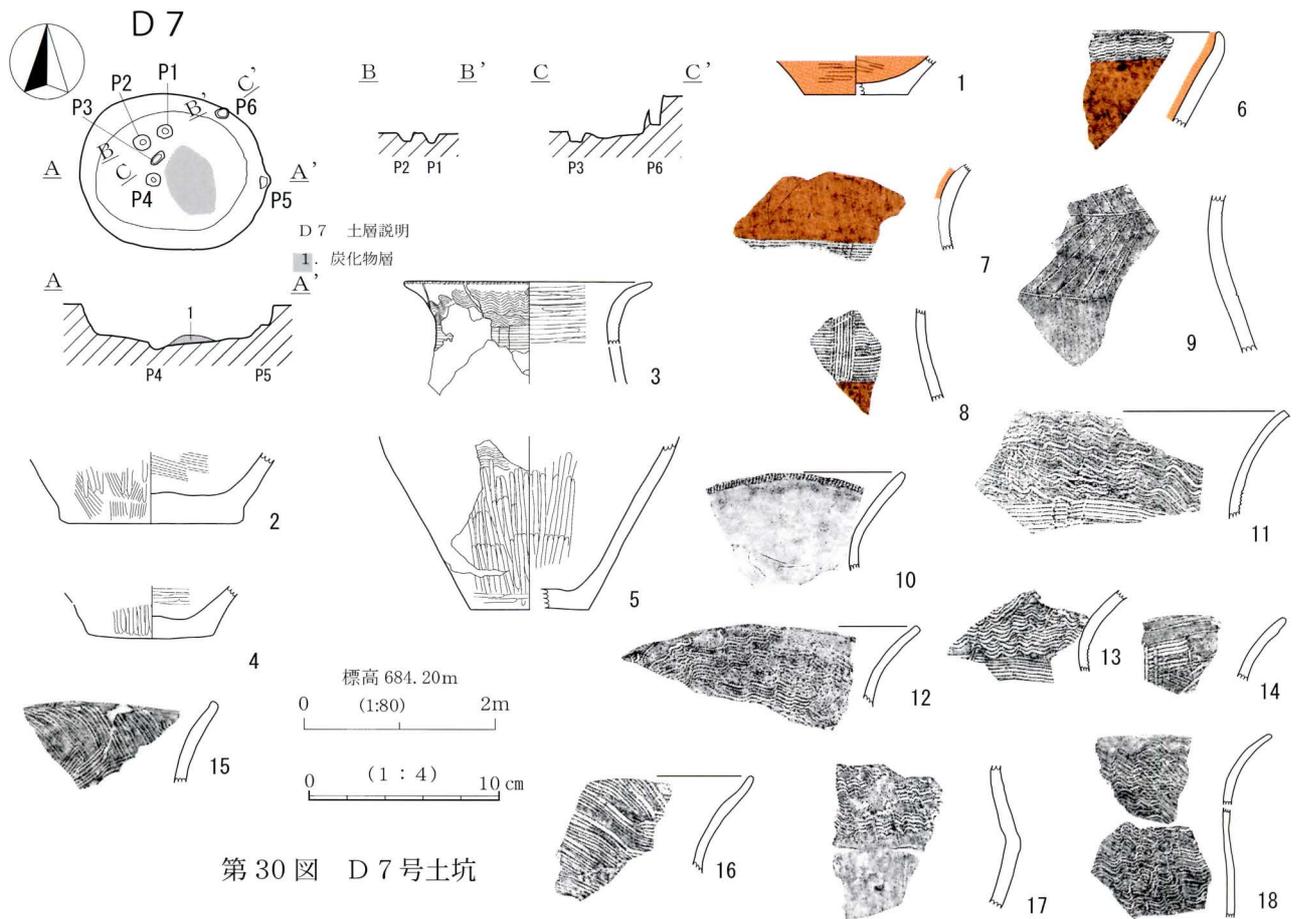


7) D 7号土坑 (第30図、図版 8)

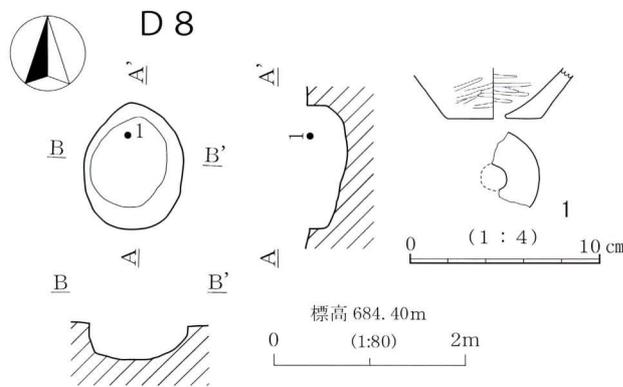
I 13グリッドにあり、長軸199cm、短軸165cmの楕円形を呈し、深さ46cmを測る。長軸方位N-89°-Wを指す。重複関係はない。底面に4個と壁に2個の小ピットがあり、底には炭化物範囲があった。

出土遺物には弥生土器と骨がある。弥生土器は杯・壺・甕があり、壺は赤色塗彩と9・10の無彩色の壺がある。3の甕は櫛描波状文と簾状文が施文され、口縁は強く外反する。全体の器形がわかる資料がないので、詳細はわからない。

これらより本土坑は弥生時代後期箱清水期とみられる。



第30図 D7号土坑



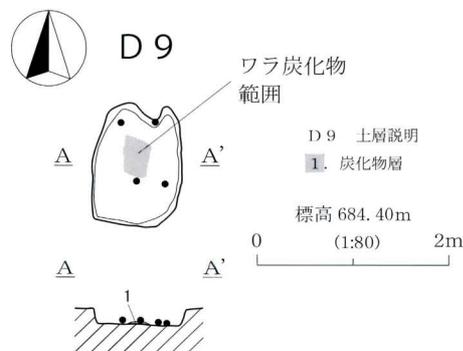
第31図 D8号土坑

8) D8号土坑 (第31図、図版8)

B21グリッドにあり、Y2号住を切る。楕円形を呈し、長軸133cm、短軸106cm、深さ39cmを測る。長軸方位はN-7°-Eを指す。上層から甑が出土する。

出土遺物には弥生土器がある。1は甑で焼成前の穿孔が1孔開く。

土器は1点のみで、覆土もわからないので、時代は弥生時代以降である。



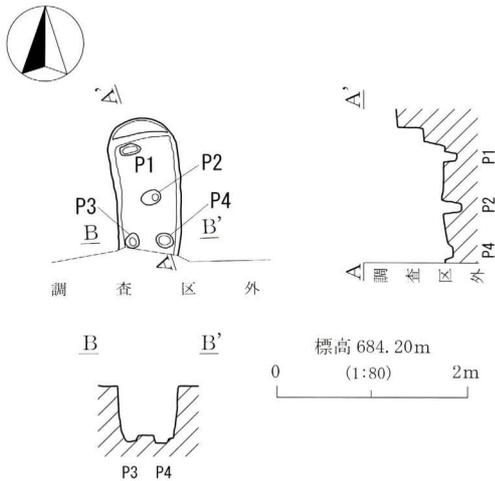
第32図 D9号土坑

9) D9号土坑 (第32図)

C20グリッドにあり、Y2を切る。北辺が窪むがほぼ長方形を呈し、長軸129cm、短軸95cm、深さ20cmを測る。長軸方位はN-4°-Eを指す。底面にはワラ状炭化物の範囲が見られた。

出土遺物はワラ状炭化物と遺物があったようであるが、点が残るのみで、遺物は消失している。

遺物がないため時代はわからないが弥生時代後期またはそれ以降の土坑である。



10) D10号土坑 (第33図)

A20グリッドにあり、南は調査区域外である。Y2・Y3号住居址を切る。長軸長は調査域では142cm、短軸長71cm、深さ51cmを測る。長軸方位はN-4°-Wを測る。

底面には4つの小ピットがある。Y4号住居址に関連するか本土坑にともなうかは不明である。

出土遺物はない。

重複関係から弥生時代後期またはそれ以降の土坑である。

第33図 D10号土坑

第3節 溝址

1) M1号溝址 (第34図、図版1・8・15・16)

グリッドA9～H9まで南北に14.78mにわたって検出される。北は自然消滅、南は調査区域外である。幅は78～106cm、深さ最大で26cmを測り、断面形は箱形である。Y5・Y6号住居址を切る。覆土底面には砂質土が堆積している。

出土遺物には弥生土器がある。土器は鉢・深鉢・杯・甕・台付甕・壺がある。弥生後期の住居と重複関係のあることから二時期が見られる。Y5号住居址の弥生後期後葉とみられるものに3の深鉢、7の甕がある。また、Y6号住居址の弥生後期前半とみられ土器は5の大型壺である。無彩色で頸部にヘラ描横線文を2条巡らせ、その間に櫛描波状文を6段施している。口縁は頸部から直立気味に立ち上がり、上部で外反して開き、端部は内湾する。

土器は弥生時代後期箱清水式土器だけであるため、Y5号住居址よりは新しく近い時期の溝であろうか。

2) M2号溝址 (第7図 全体図参照)

グリッドB11～H10まで南北に延びている。浅いため、プランが明確ではなく、推定の線である。長さ12.2m、幅80～100cmを測る。

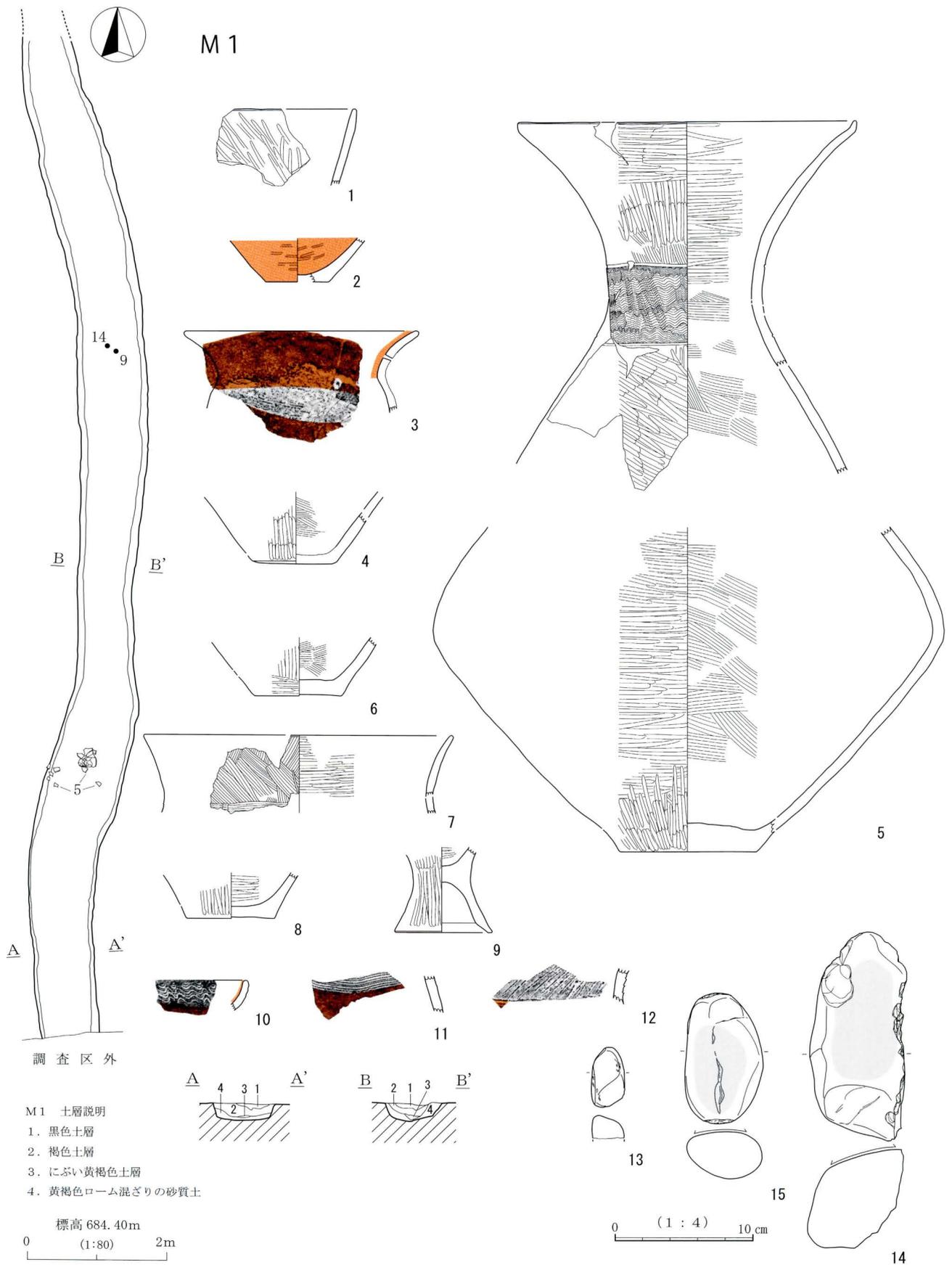
遺構出土遺物はないが、グリッド出土では10甕・11壺・19深鉢・21甕が出土している。(第46図) いずれも弥生時代後期箱清水式の土器群である。

重複関係も無いため時期は不明であるが弥生時代後期とみられる。

3) M3・M4・M6号溝址 (第35図、図版8・14)

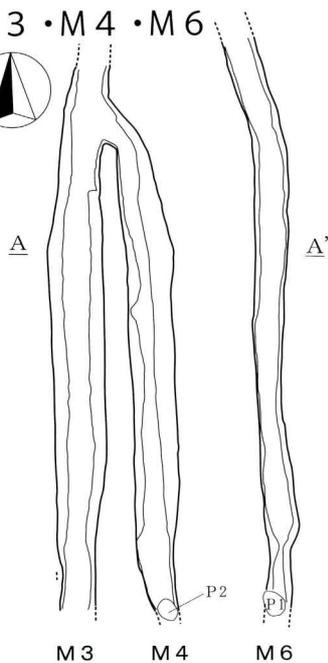
グリッドC12～F13にあり、Y1を切る。長さ600cmを検出し、幅22～58cm、深さ30・34cmを測る。覆土は粒子が細かいようであるが重複する住居の焼土粒子を含んでいる。Y1号住居址でも述べたが、Y1号住居址のP4・P9・P10・P11・P20はM6号溝址に沿い、P13・P15～P19の6個はほぼ直線に並び、M3と並行する。それぞれM6・M3号溝址に伴うピットであろうか。P12・P21もM4に伴うであろう。

出土遺物には弥生土器がある。杯は赤色塗彩され、壺は頸部に櫛描波状文、口縁・胴部は赤色塗彩される。甕は櫛描波状文、斜走文を施される。これらより、Y1号住居址より新しく、近い時期の弥生後期の溝であろう。



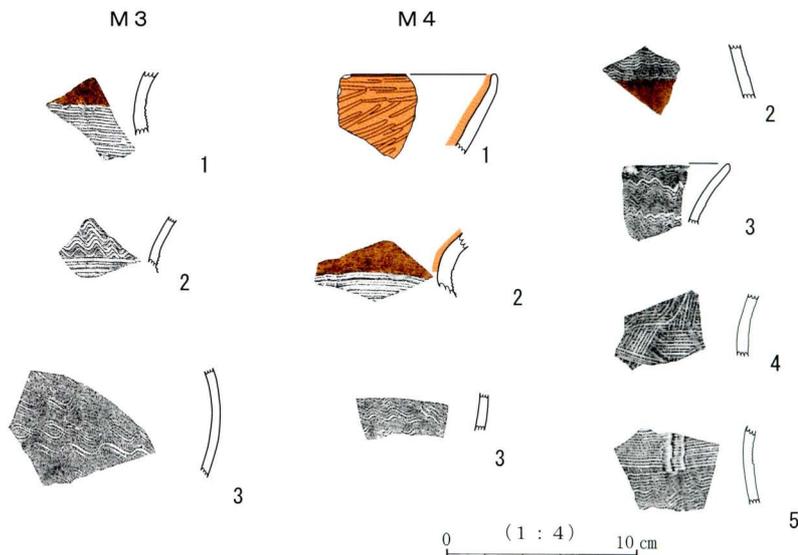
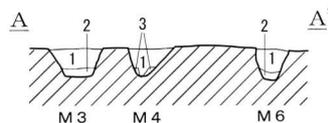
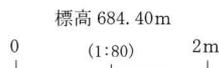
第34図 M1号溝址

M3・M4・M6



M3・4・6 土層説明

1. 黒褐色土 Y1号住居址の2層より小軽石少量で軟質。焼土微粒子、粒子が細かい。
2. 黒褐色土 ロームを含み、1層より軟質、粒子が細かい。
3. 灰褐色土 ロームを含む。



第35図 M3・4・6号溝址

第4節 環濠

1) M5号溝址 (第36～44図、図版9～13・16・17)

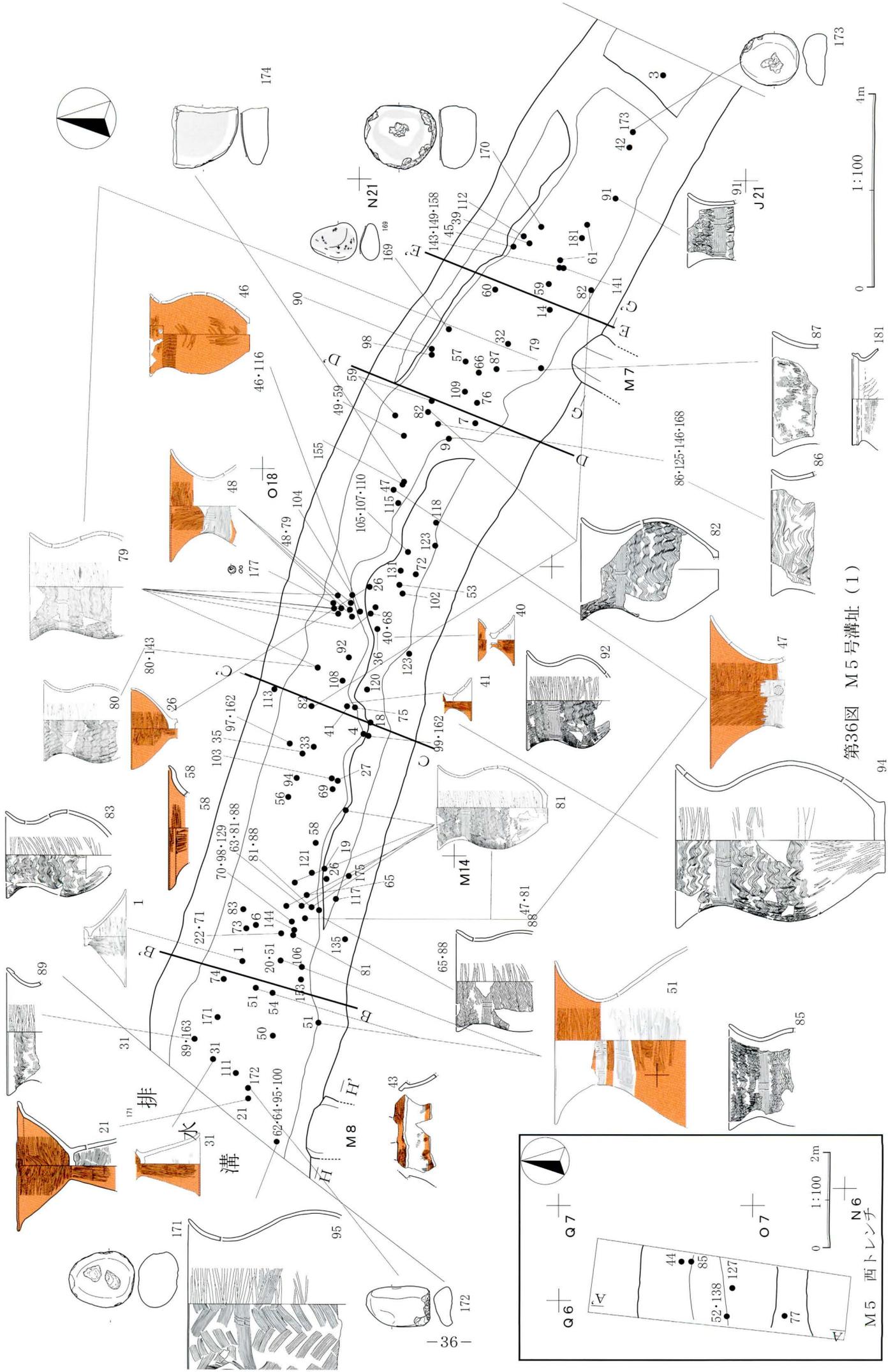
○6～A32グリッドから検出され、中央は連続、西と東はトレンチを設定し調査している。西トレンチはトレンチ幅144cm、溝幅356cm、深さ71cmを測る。中央は連続23.80mを調査し、溝幅338～396cm、深さ60～78cmを測る。東トレンチはトレンチ幅2m、溝幅304cm、深さ45cmを測る。

断面形は台形を呈し、北側が急傾斜に落ち、南側（内側）は緩やかになっている。環濠の下幅は、西のB地点で230cm、E地点で220cm、東に離れたF地点で、252cmを測る。溝底のレベルは西と東でレベル差がなく、ほぼ同じ標高であり溝底の高低差はない。溝幅は検出面にもよるので一概にはいえないが西に上幅は広いようである。

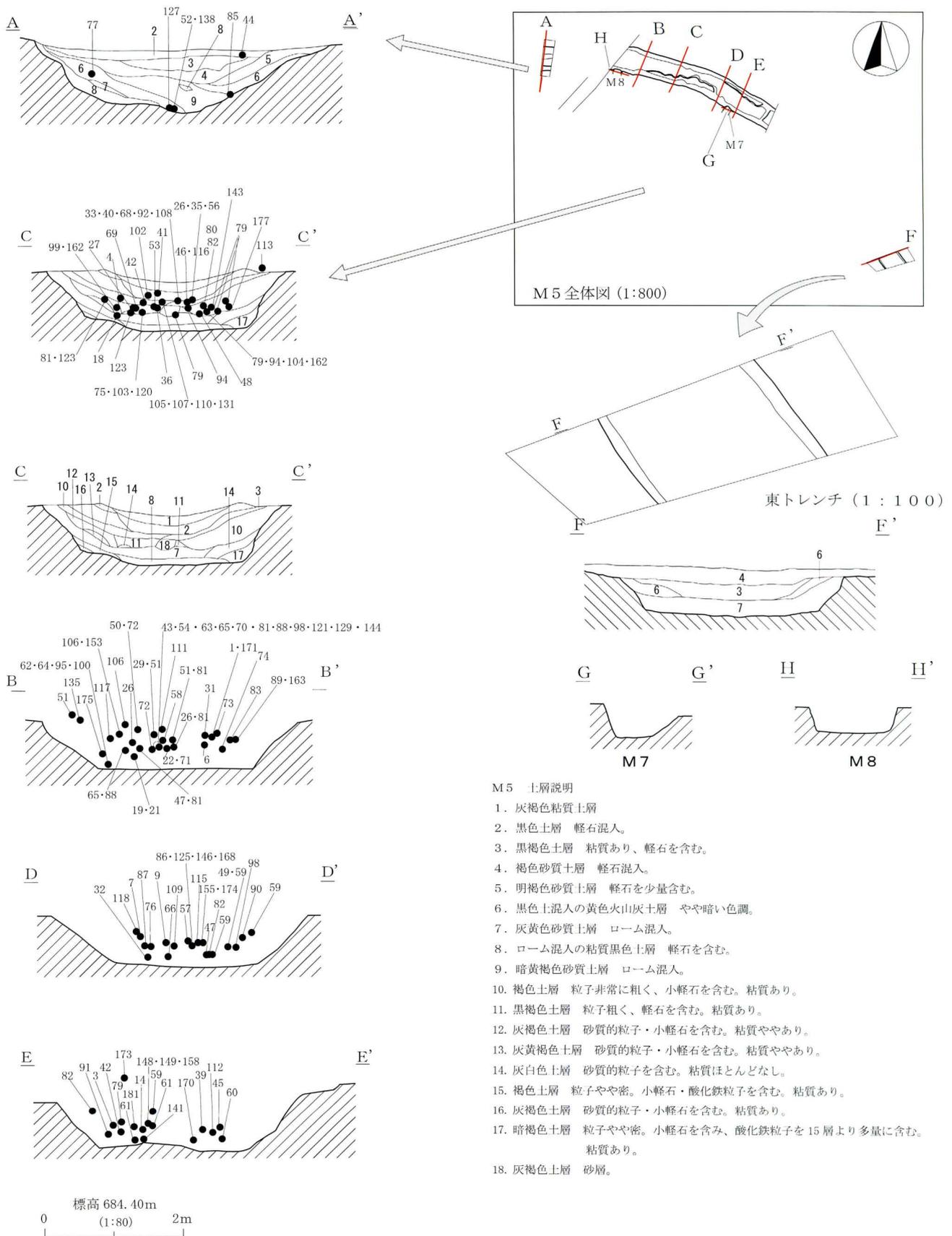
覆土は、底から砂質ローム層、黒褐色土層、褐色土層と互層になって堆積している。溝の覆土からは多数の弥生土器・石器が出土した。遺物はドットからみると、南側（内側）に分布が偏っている。堀底の7・8層はロームの堆積層で遺物はほとんど含まず、遺物包含層は3層の黒褐色土と10～12層の褐色土層、黒褐色土層、灰褐色土層中である。検出面から40～60cmくらいの高さに集中している。

出土遺物は弥生土器と石器があり、弥生土器は蓋・鉢・杯・高杯・深鉢・壺・甕があり、石器は敲打石がある。

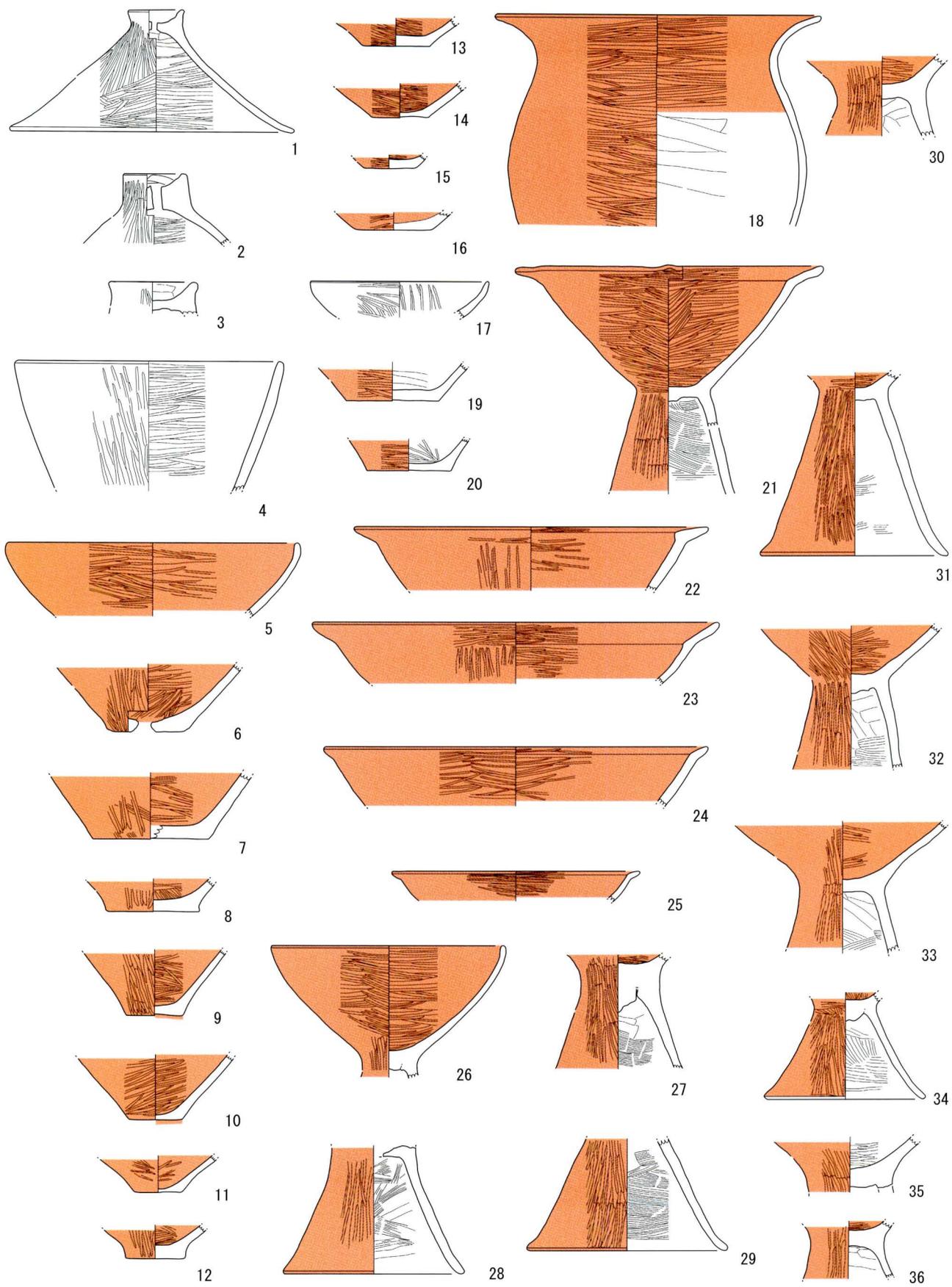
弥生土器は弥生後期前葉の吉田式とみられるものに、24の高杯、53・54の壺、84小甕などがある。24の高杯端部が内稜をもって短く外傾する。53の壺は頸部文様が篋描きの矢羽根文で、下に鋸歯文を施す。無彩色で、胴肩部はなで形を呈している。甕は84の小型甕があり、口縁と胴肩部の形は直線的



第36図 M5号溝址 (1)

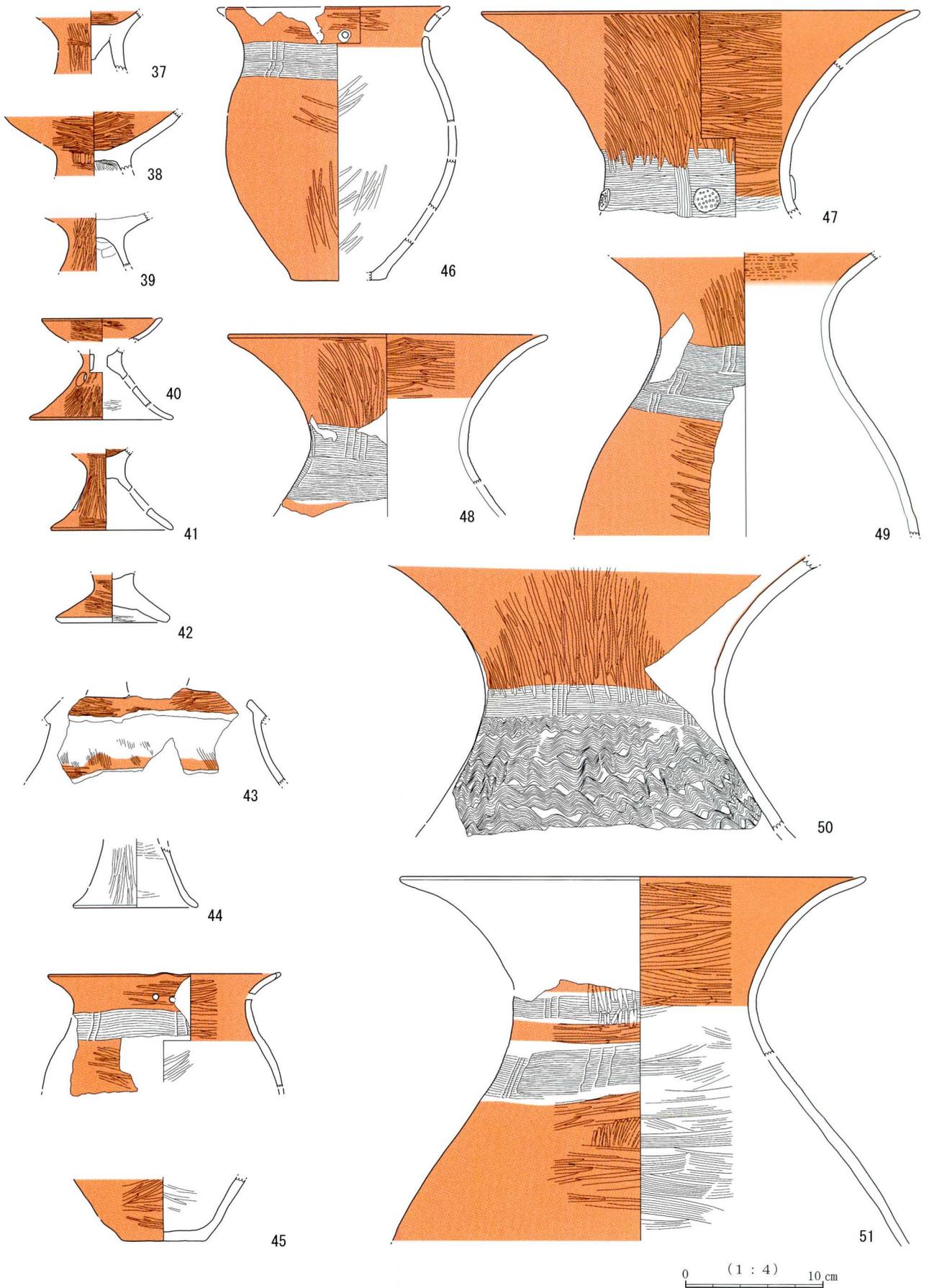


第37図 M5号溝址(2)

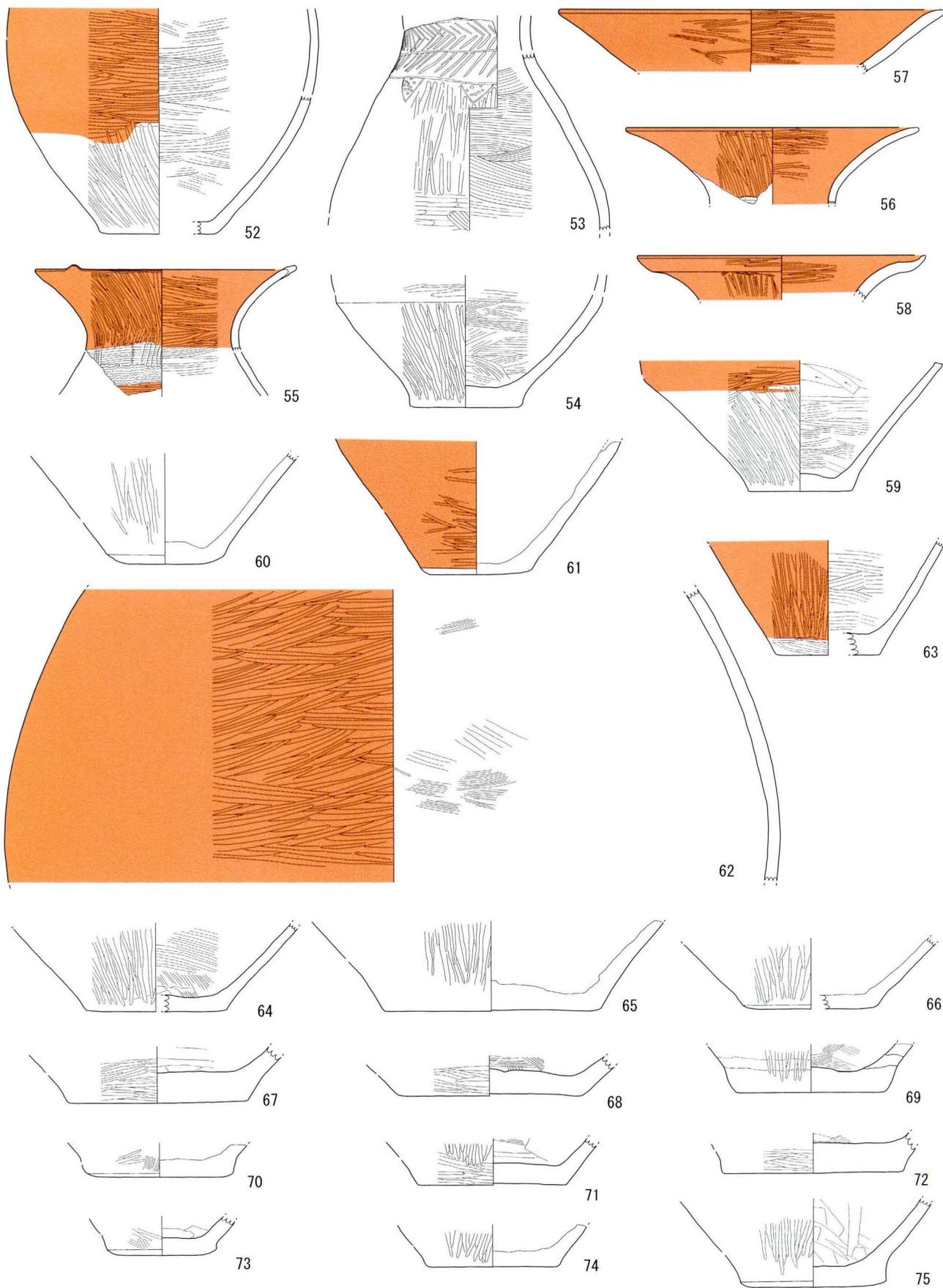


0 (1 : 4) 10 cm

第38图 M5号沟址 (3)

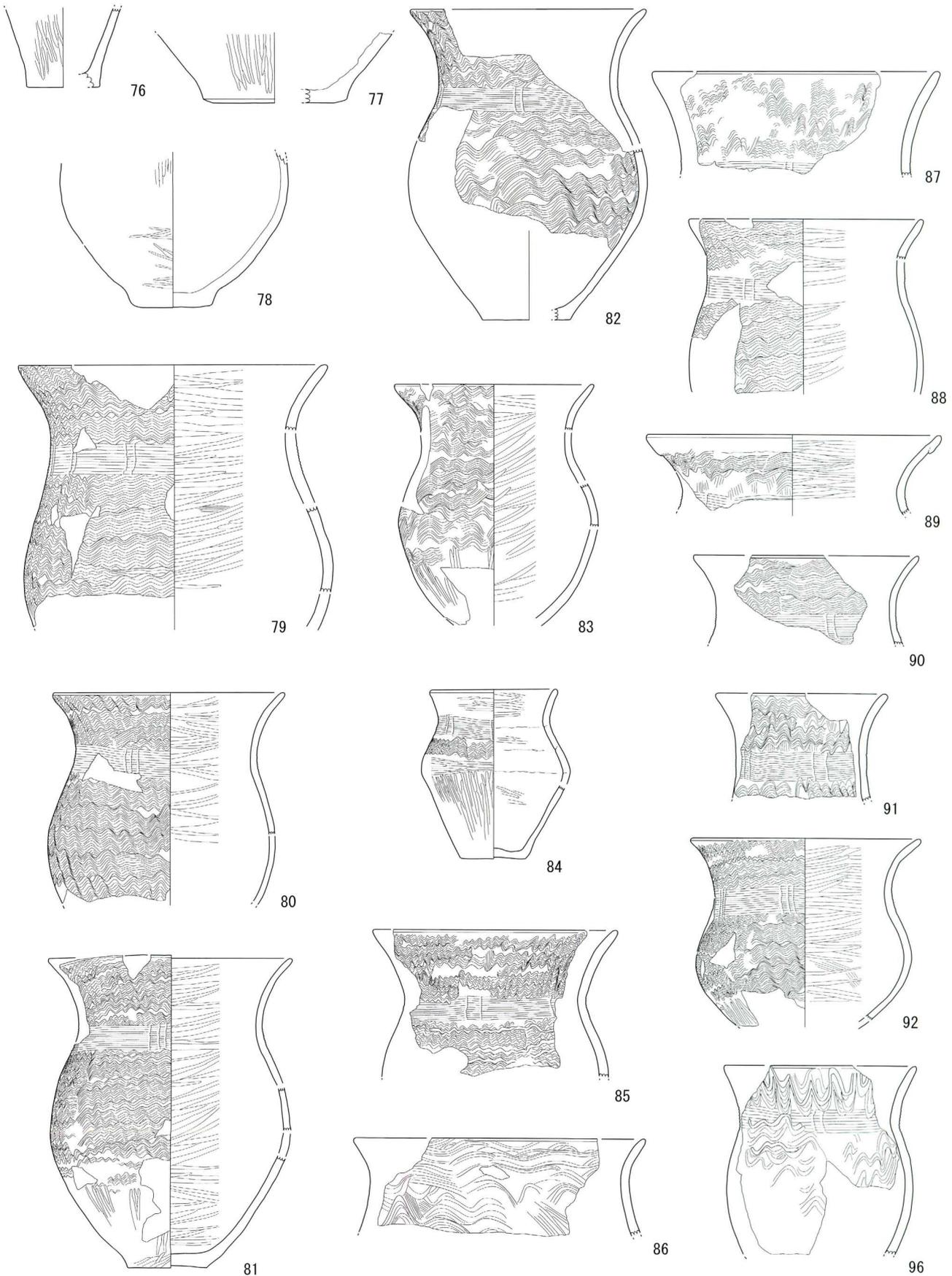


第39图 M5号沟址(4)

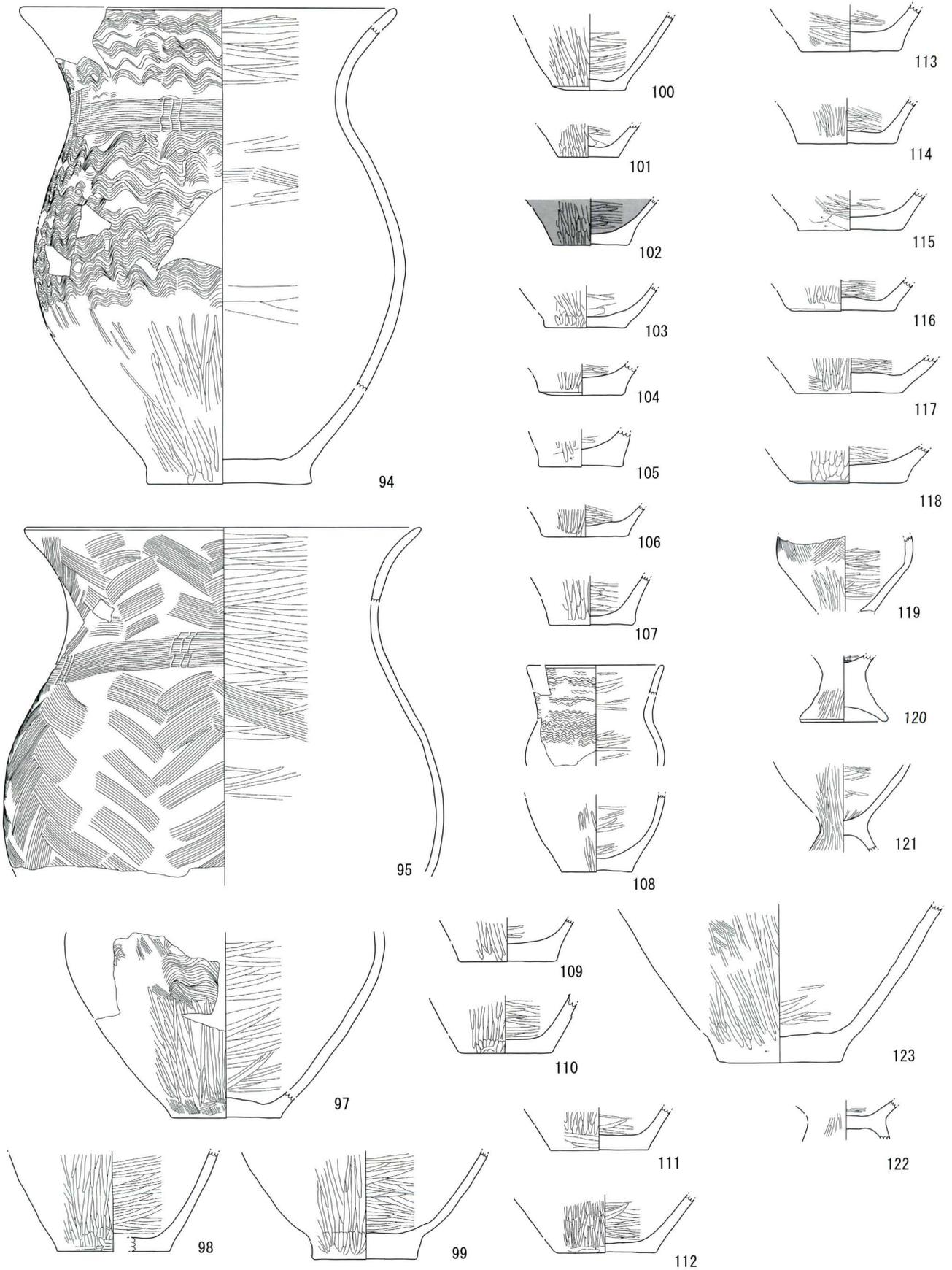


0 (1 : 4) 10 cm

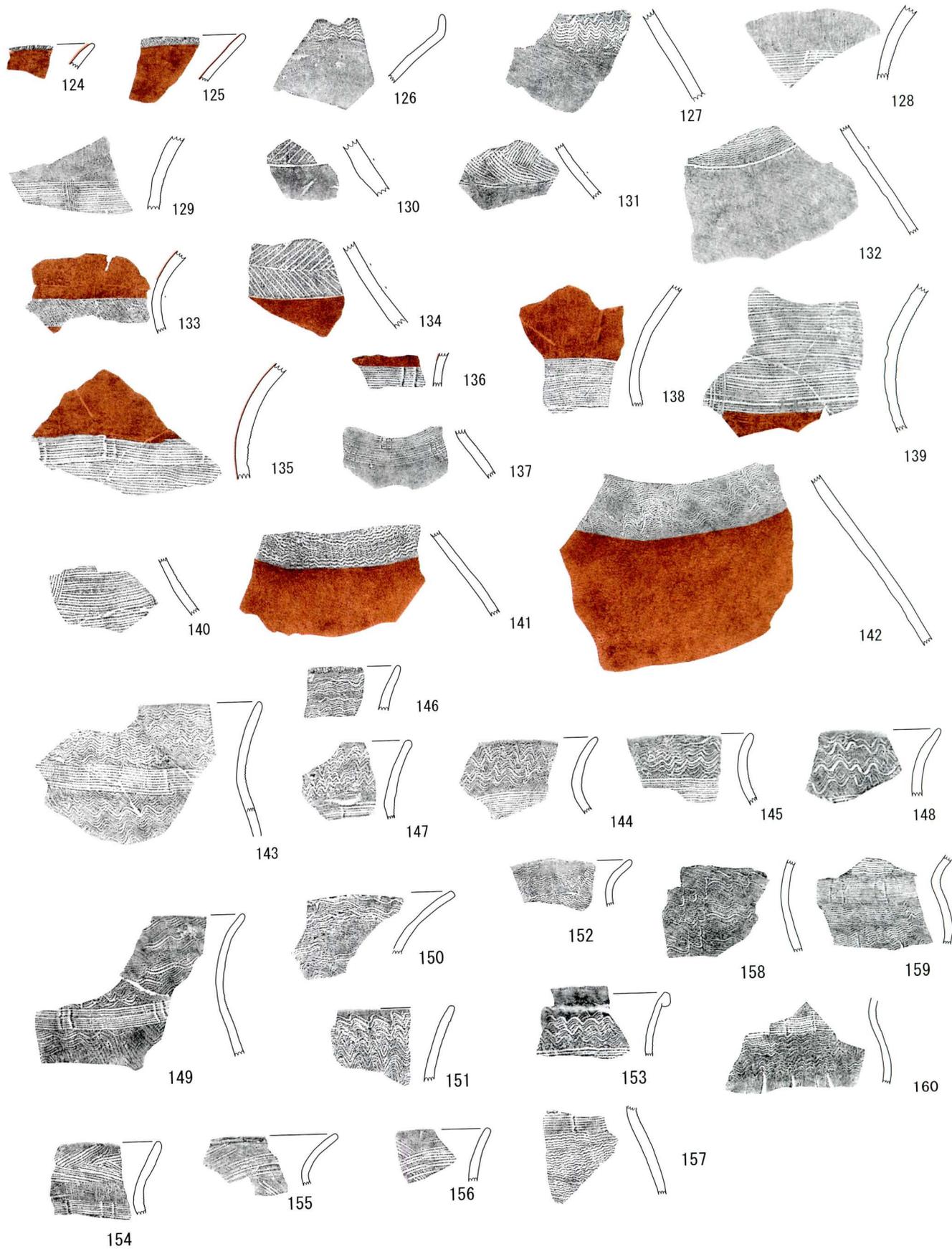
第40图 M5号沟址 (5)



第41图 M5号沟址 (6)

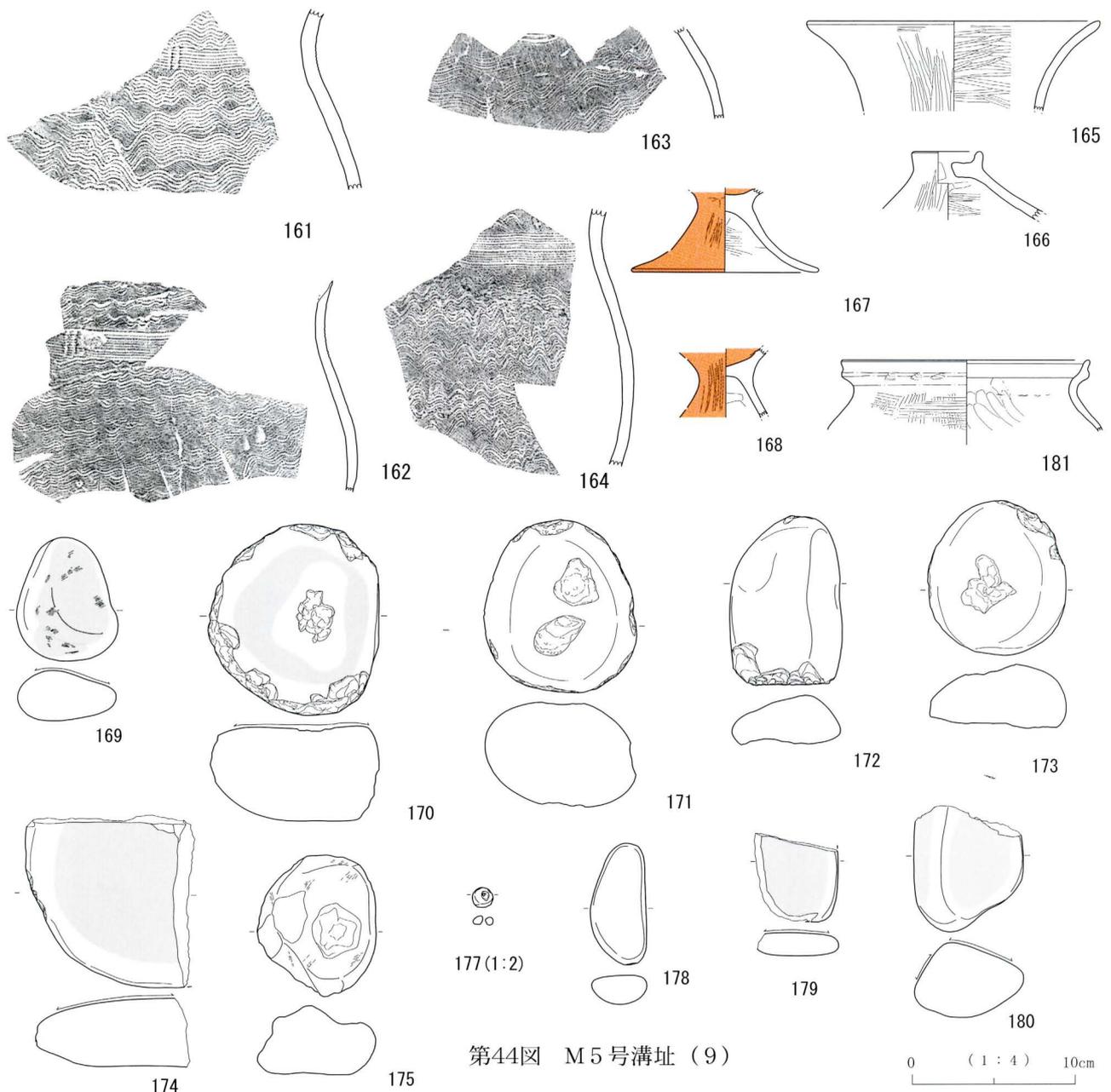


第42图 M5号沟址(7)



第43图 M5号沟址(8)

0 (1:4) 10cm



第44図 M5号溝址(9)

である。文様は頸部に一連止めの櫛描簾状文、その下に一条の細かい櫛描波状文を施す。拓本の154・157の甕も同期とみられる。今回調査した住居址の時代は弥生後期前葉の後半にあたるが、これらは弥生中期末から弥生後期初頭と言えるもので、住居址の炉に使用したものと近い土器である。

次の弥生後期箱清水期前半とみられる土器は壺では47・49の壺である。47の口縁は外反するが、それほど強くない。頸部文様は櫛描T字文で、円形の貼付文がある。口縁内外赤色塗彩される。

82の甕は口縁が長く外反し、外傾はそれほどせずに、胴最大径と口径が同じである。波状文の複雑な重なりはわずかである。91の甕は口縁がほとんど外傾せず直立気味である。85・87なども箱清水式期前半に入れられよう。

箱清水式土器後半では48の壺は口縁が短く強く外反し、頸部には櫛描簾状文と横線文が施される。51の壺は口縁の長さが短く、外反は強くなり端部は内湾気味にである。頸部は櫛描簾状文、赤色塗彩帯、櫛描簾状文とで文様を構成している。装飾性の高い文様である。甕では94・95の甕があり、口縁の外反は強く、胴部が球胴形を呈する。89の折返し口縁の甕がある。折り返し口縁この甕の波状文と簾縄文は途切れている。

弥生時代後期終末から古墳初頭では58の壺は口縁が強く外反し端部は内に屈曲して受け口状になっている。赤色塗彩されるが塗り込める弥生後期タイプの赤色塗彩ではなく、ハケ塗りの塗彩である。甕では86の口縁は短く、上部のみが外反している。施文される波状文は不規則で浅い。小型品の40の器台がある。浅く丸味のある杯部と長い裾を引く脚である。赤色塗彩されるがやはり塗り込めではない。

181のS字甕は調査区中央区の東端の深さは中程から出土している。薄い甕で口縁が屈曲して短く外反している。胴部外面には縦のハケ目、頸より下に横目のハケ目が施される。口縁の屈曲部に刺突文が巡っている。内面は口縁横ナデ、胴部ナデである。口縁内面に粉の圧痕が残る。

これらのようにM5号溝址には弥生時代後期から弥生時代後期末の土器がみられ、中位層から弥生後期末の遺物がみられることからこの溝の廃絶年代をその頃に求められる。

また甕の底部がたくさんみられたので、底部が完存するものの底径を測ったところ4.4~6.2cmに8個体、6.8~8.0cmに12個体である。94は11.8cmでもっとも大きい。壺は7.4cm前後に4個、9.4~10.5cmに8個、13.0cmに3個、最大は15.5cmである。底部だけで壺か甕かは混同する個体もあろうが、大まかには、甕の底径が小さく、壺の底径が大きいことがわかる。

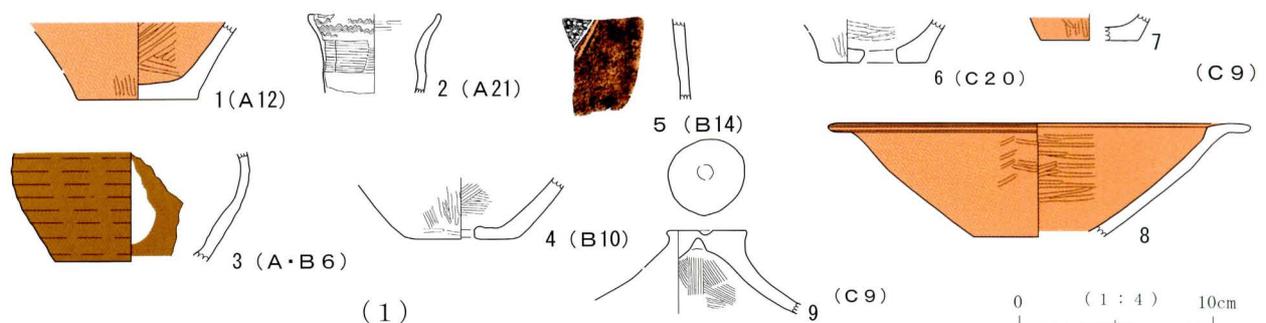
本溝は弥生時代後期の土器を含み、最終は弥生時代後期末の土器がみられた。溝は弥生時代後期後葉の段階の土器が遺物包含層の下層から出土していることから、この弥生時代後期後葉の段階に作られた環壕であるとされよう。なお弥生終末の土器群はその上層にみられ、この頃を最後に環壕は埋められたようである。

第5節 グリッド・表採（第45~47図、図版14・17）

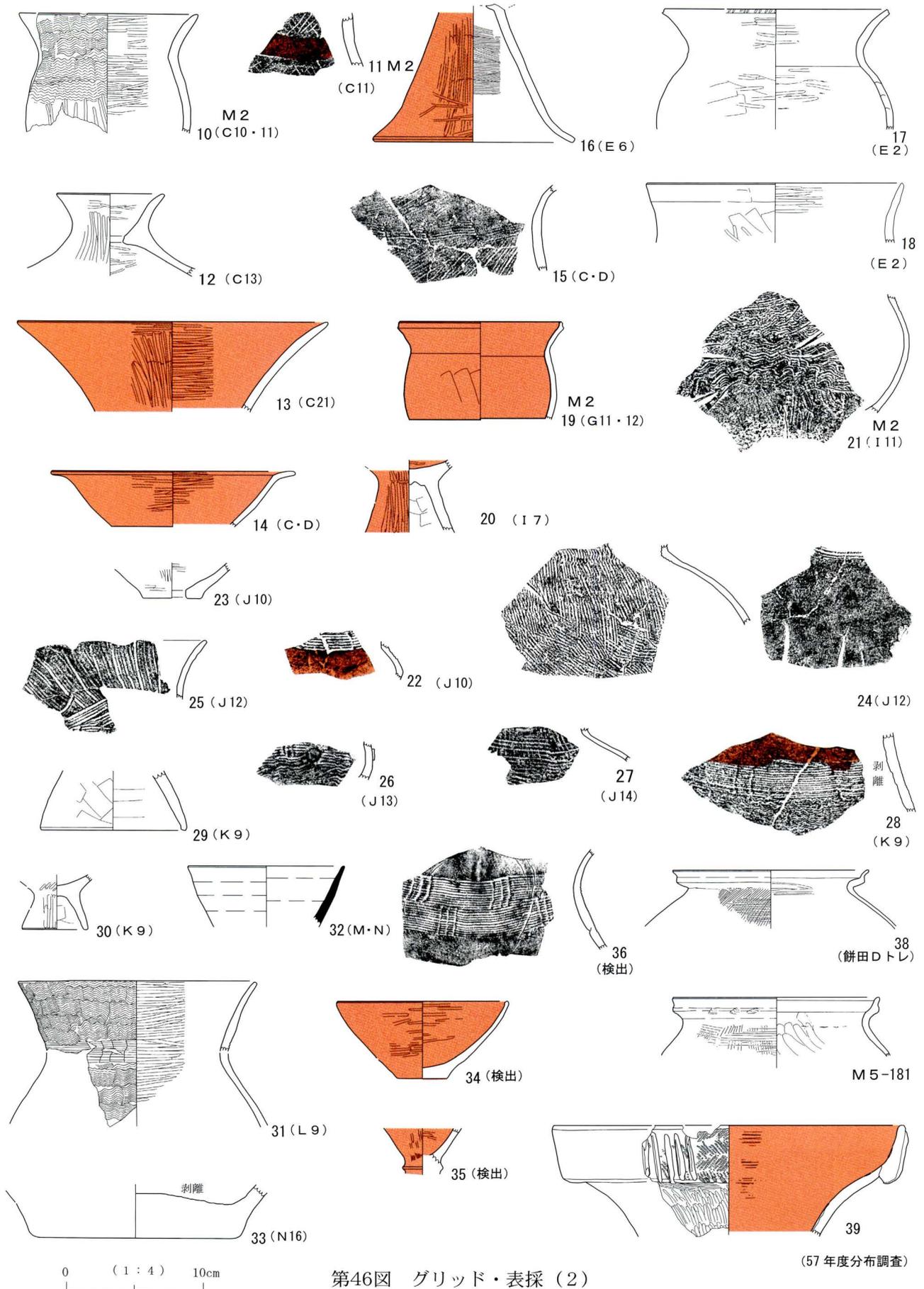
7の壺、8の高杯、9の高杯はM1号溝址またはY5・Y6号住居址、また12の壺はY1号住居址、18はY2号住居址、16の高杯脚は、Y7号住居址と同じグリッドにあり、関連が窺える。

17・18の土器は赤色塗彩されず、17は口唇部に刻みめをのこすが、口縁に文様が施文されていないことから土師器とした。Y5-6の壺と器形が近く古墳前期の土器であろうか。

39は57年度の分布調査の際に、採集されたもので、南関東系の装飾壺である。口縁部形はL字形を呈し、口縁の直立部に粘土を貼り肥厚させている。口唇部に縄文、口縁の直立部下端は面取りしてヘラ（棒状）により刻みをいれている。直立部は縄文を4段、綾杉状に横位にまわし、断面三角形の粘土紐を縦に6本（残存値）貼っている。大きく外反する口縁下部は赤色塗彩の痕跡が残っている。内面口縁部は赤色塗彩される。弥生後期とみられる。38は南に隣接する餅田遺跡から出土した「S字甕」であり、砂粒を含み、灰白色を呈すことから、搬入品とみられる。M5-181が口縁に押し引き文があることからS字甕A類、38は口縁の文様はなく胴部球胴形を呈し、B類とされよう。弥生後期後葉と古墳初頭に該期がも定められようか。

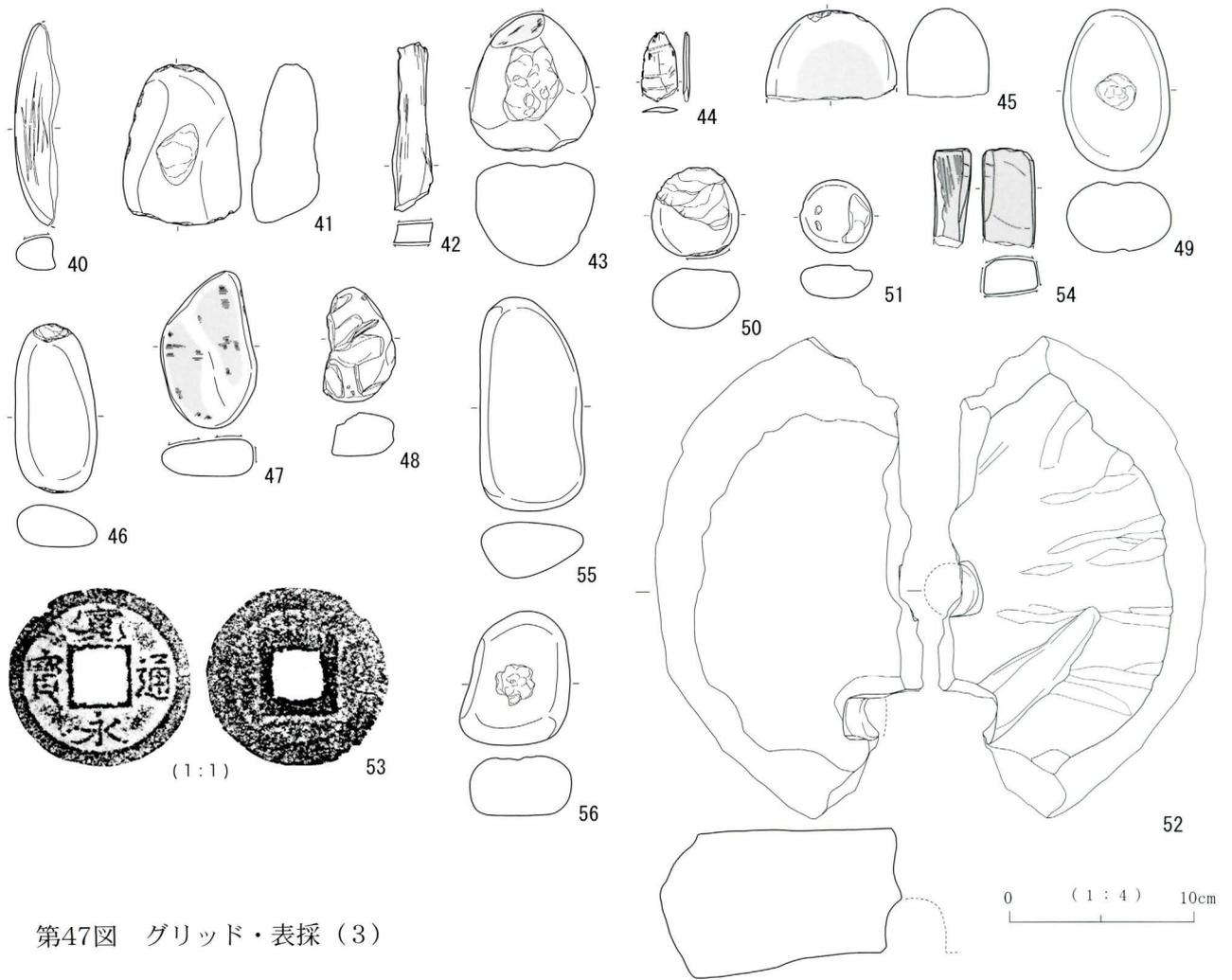


第45図 グリッド・表採（1）



第46図 グリッド・表採 (2)

(57年度分布調査)



第47図 グリッド・表採 (3)

第IV章 総括

第1節 遺構

本調査では以下の遺構が検出された。

竪穴住居址 (Y)	12 棟
弥生時代後期	10 棟—Y 1・Y 2・Y 3・Y 5・Y 6・Y 7・Y 8・Y 9・Y 11
弥生時代中期	1 棟—Y 12
弥生後期か後期以前	1 棟—Y 4・Y 10
土坑 (D)	10 基
弥生時代後期	4 基—D 1・D 2・D 3・D 7
弥生時代後期か後期以降	3 基—D 8・D 9・D 10
時期不明	3 基—D 4・D 5・D 6
溝跡 (M)	8 本
弥生時代後期	6 本—M 1・M 2・M 3・M 4・M 5 (環濠)・M 6
時期不明	2 本—M 7・M 8
単独ピット	5 個

(1) 竪穴住居址

12棟の内10棟が弥生後期の住居址である。出土遺物と重複関係からは

	弥生後期前半古 (吉田式期古)	弥生後期前半新 (吉田式期新)	弥生後期後半古 (箱清水式期古)	弥生後期後半新 (箱清水式期新)
(Y 10)	→Y 9	→	Y 11→	Y 8
		Y 6→	Y 7→	Y 5
(Y 4)	→Y 3	→	→	Y 2
				Y 1

土器の分類からはこのような図式になる。

弥生時代後期前半新 (吉田式期新)

弥生後期前葉の住居址はY 6号住居址が形態規模がつかめている。長軸長642cm短軸長472cmを測る隅丸長方形を呈す。長軸方向がほぼ北を指している。Y 3・Y 9号住居址の全容がわからないが方位は西にふれている。

支柱穴4本で、炉は北側の支柱穴間にあり、やや北に寄っている。炉底には壺胴部の上半の半分近くを置いて、内湾する器形を炉底として利用している。その下には杯と他の壺胴部片入っている。炉の北に棟持ち柱を持ち、壁際には壁柱穴を設けている。南側にある貯蔵穴・出入り口のピットは検出できていないようである。

この期の住居址では西一本柳遺跡Ⅲ・ⅣのH41号住居址が同規模・同形態で、4本柱の北の柱穴間に炉を持っている。やはり貯蔵穴はない。西一本柳遺跡ⅩのH33号住居址もほぼ同規模である。両遺跡には長軸が899cm、短軸が640cmを測る住居址が最大規模とみられる。いずれも隅丸長方形である。北西の久保遺跡に後期前半の住居址新・古があり、北西の久保遺跡Y 70 (570×565cm)・Y 77号住居址 (401×402cm) は方形を呈し、北の柱穴間に炉をもっている。これらはこの時期でも古い土器様相をもち、方形の住居址である。本報告の西一里塚遺跡Ⅰの後期前半新の段階では方形の住居址は姿を消す可能性がある。弥生時代後期後半に設けられる南隅にある貯蔵穴はみられない。

弥生時代後期後半古 (箱清水式期古)

後期後半古の住居址は2棟あり、Y 11とY 7号住居址であるが、近接しているので、同時期ではない。

Y 11号住居址はY 6号住居址に近い時期である。炉底に使用した壺は弥生時代後期前半新の様相を

もっている。Y11号住居址は長軸536cm、短軸436cm、主軸は西に振れている。形態は隅丸長方形である。長軸が前代より長くなっている。南は検出されていないが4本柱で北側の柱穴間に炉を持っている。炉の北に棟持ち柱を持つ。Y7号住居址は長軸577cm、短軸480cmを測り、主柱穴は4本であろう。北側の柱穴間に炉を持っている。

弥生時代後期後半新（箱清水式期新）

住居址の形態が2つになる。前代の隅丸長方形と同じY5号住居址、方形に近いY2・Y8・Y1号住居址である。4本柱穴であることは変わりなく炉も柱穴間に設けられている。（Y1・Y2の炉は重複遺構に壊されているとみる）この時期では棟持ち柱は見られなくなっている。北一本柳遺跡にみられた10mを越える住居址は今回は見られなかった。方形の住居址Y1・Y2・Y8号住居址の長軸/短軸の比率は共通して約1.1を測り、炉を持つ側に長軸をもっている。北一本柳遺跡Ⅲの方形住居址の長軸/短軸の比率は1.1を下まわっており、より方形化傾向がみられる。

北一本柳遺跡Ⅲの隅丸長方形の住居址H51号住居址は長軸/短軸の比率は1.82という細長い形になっている。同遺跡のH30号住居址の床下住居址は1.18、拡張した床上の住居址は1.50を測り、より長細くしている。

これらより本遺跡のこの期は北一本柳遺跡ⅢのH51・H30号住居址を弥生時代後期の最終期として比較したところでは少し古めの数値である。

（2）土坑

土坑10基の内、ほぼ時代の推測が可能なものは7基である。重複関係は、Y1（箱清水式期新）→D1、Y7（箱清水式期古）→D2、Y2（箱清水式期新）→D8・D9・D10である。単独のD3・D7からは弥生後期後半新の土器が出土する。これらの土坑D1・D3は隅丸長方形である。D2は角ばった円形、D7は楕円形を呈す。D9・D10は遺物からはわからないので、弥生時代後期後半以降ということになる。

D1は上層に炭化材と骨片を出土する。弥生時代後期の赤色塗彩された杯は、底面より40cmほど上に出土する。骨は細片である。

D2は底面に炭化物層があり、弥生時代後期の赤色塗彩の杯や蓋が炭化物層の上面から出土する。

D3は長軸236cm、短軸221cmの隅丸長方形で、南東から南に小テラスが付いている。弥生後期の壺・高杯は16cmほど浮いたところから出土している。

D7は長軸199cm、短軸165cmの楕円形を呈す。底面に炭化物層がみられ、弥生時代後期の外反の強い波状文の甕や壺片が多数、細骨片が出土している。

D8は弥生土器の甕片と細骨片が出土する。

D9の底面にはワラ状炭化物が出土している。

これらの土坑は、多くの弥生土器を含み、炭化物層がみられるなどの共通点がある。また深さをもっている。中部横断自動車道建設に先立って発掘調査された西一里塚遺跡群の④-4地区で検出された土坑には、円形周溝墓・方形周溝墓の主体部の土坑、また木棺墓・土器棺墓の土坑が検出されている。SM04の主体部は200×78cmの長方形を呈し、底面に小口のある木棺墓である。本遺跡の土坑は木棺墓のように細長いものはなく、小口孔も無い。炭化物層のみられる土坑例は近辺にはみられない。

おなじく中部横断自動車道の周防畑遺跡群の土坑SK5079は長さ183cm、幅139cm、深さ20cmを測る。土坑はテラスを持ち、20cmほど底から上に土器が多くみられ、桃核、植物繊維、細骨片などの出土から土坑墓としている。

西一里塚遺跡Ⅰの土坑も周防畑遺跡群の形態に近く、浮いた高さに多器種の土器を出土するなど共通点がみられる。

（3）溝址

本遺跡からは8本の溝が検出された。M5は環濠なので後述する。ここでは5本についてみる。

Y6（弥生時代後期前半新）・Y5（弥生時代後期後半新）→M1

Y 1 (弥生時代後期後半新) → M 3・M 4・M 6

M 2はグリッド10・11付近を南北に伸びている。弥生時代後期の甕・壺・深鉢が同じグリッドで検出されている。

M 1はY 6・Y 5を切っているので、それ以降ということになる。底のレベルは北から南に12cmほど低くなるがそれほどの高低差はない。弥生時代後期前半新の壺があるが、Y 6の遺物が流下と考えられる。Y 5も切っているので、弥生後期後半新以降またそれに近い時期であろう。

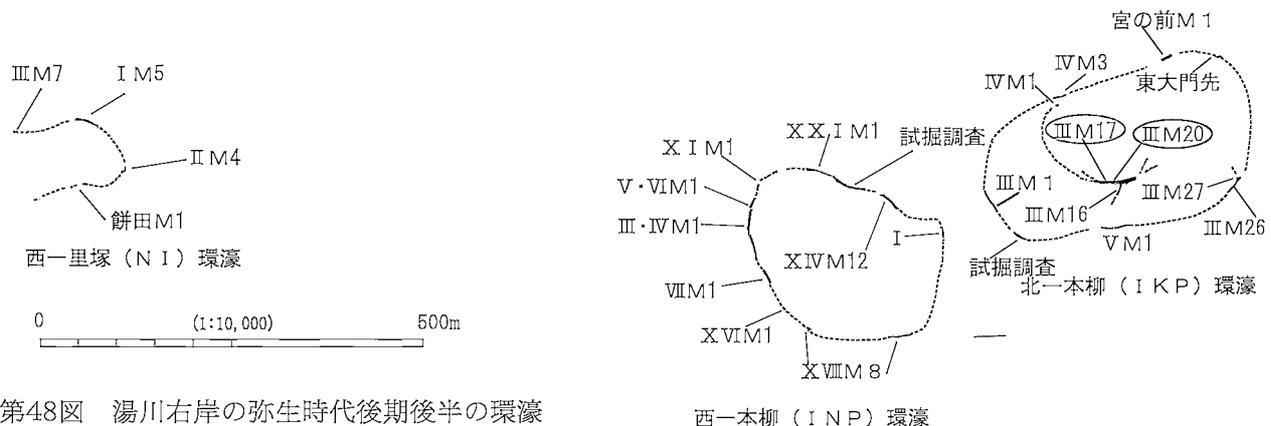
M 3・M 4・M 6は細い溝であるがY 1を切っているので、弥生後期後半新または近い時期である。これらの溝に特別な性格見受けられない。

(4) 環濠 (M 5号溝址)

M 5は弧状に調査区北側にあり、総延長は64.5mを測る。最大で溝幅は4m、深さ91cmを測る。断面形は逆台形で、南側の傾斜が緩く、北側は急傾斜である。このような溝は西一里塚遺跡の他の地点からも同規模の弥生時代後期の土器を含む溝が検出されている。

遺 跡 名	規模 (最大値)			溝底標高 (m)
	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)	
N I III M 7	3.0	2.0	65	682.65
N I I M 5 西トレンチ	3.56	1.8	71	683.16
N I I M 5 B地点	3.68	2.64	72	683.24
N I I M 5 東トレンチ	3.28	2.56	56	683.20
N I II M 4	2.0	1.2	48	681.76

第2表 西一里塚遺跡環濠規模表



第48図 湯川右岸の弥生時代後期後半の環濠

西一本柳 (I N P) 環濠

湯川右岸の弥生時代後期後半とみられる環濠について、本遺跡の西一里塚遺跡と西一本柳遺跡・北一本柳遺跡の3遺跡において、その規模や形態が明らかになってきている。

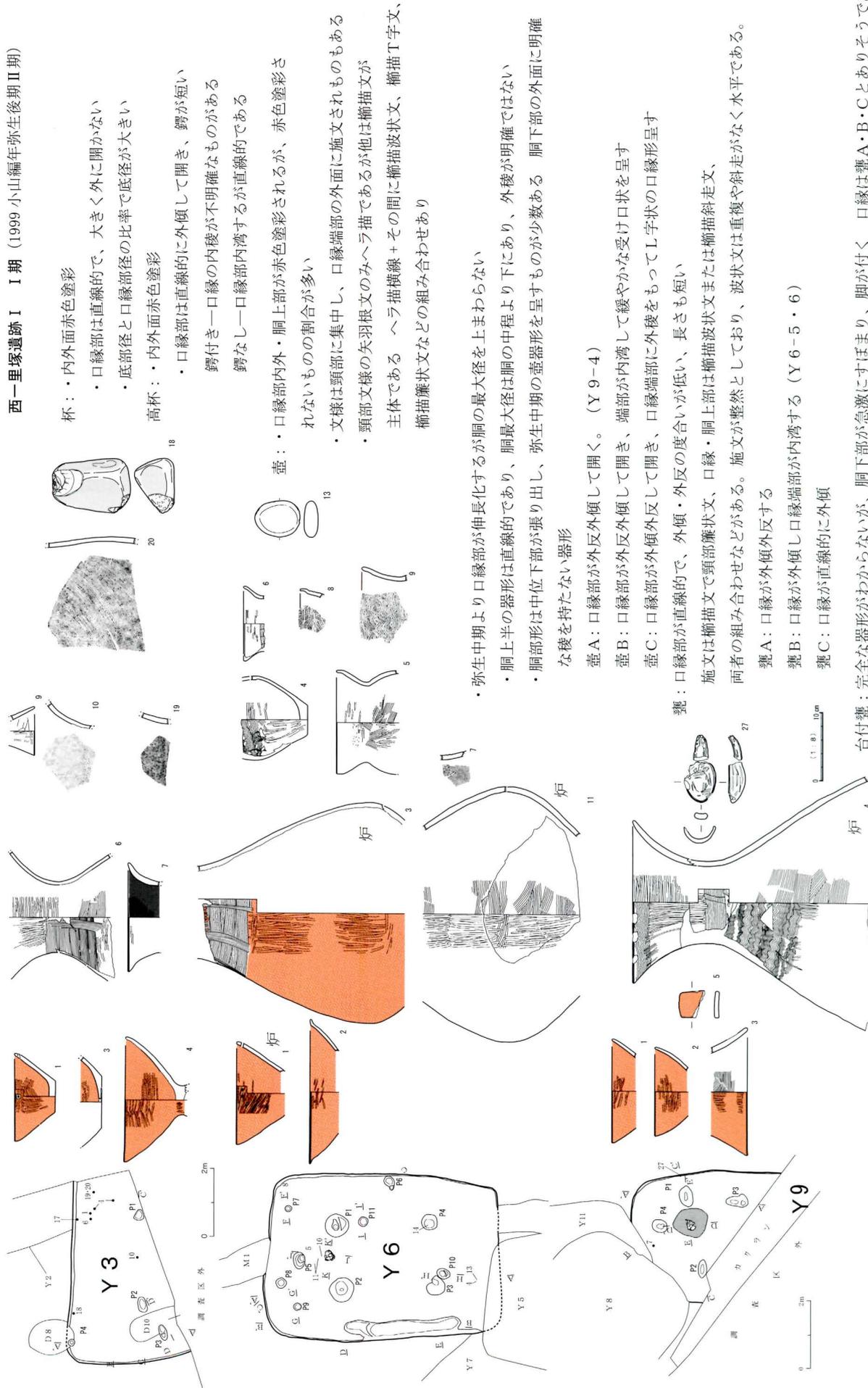
北一本柳遺跡をみるとあくまで推定の域を出ないが、大きな環濠の中に小区画がある。それらは
M 20(古) → M 16 → M 17(新)

と3時期に環濠が重複関係をもつことから、後期後半の中でも3時期の形態の環濠が集落を囲んでいるようである。

西一里塚遺跡では中部横断自動車道の調査域の西一里塚遺跡群①-2調査地区北端のSD01などは境界の溝と報告している。墓域を含めた西一里塚遺跡の外側の環濠にあたりとみられ、M 5の環濠の約100mほど外側で弧状に連なっている。西一里塚遺跡も二重の環濠が推測される。(第5図参照)

西一里塚遺跡	長径 162m	短径115m	(長径は判明範囲の数値)
西一本柳遺跡	長径 270m	短径210m	
北一本柳遺跡	長径 360m	短径200m	

第49図 西一里塚遺跡 I 土器変遷図 (1) I 期



西一里塚遺跡 I Ⅱ期 (1999 小山編年 弥生後期Ⅲ)

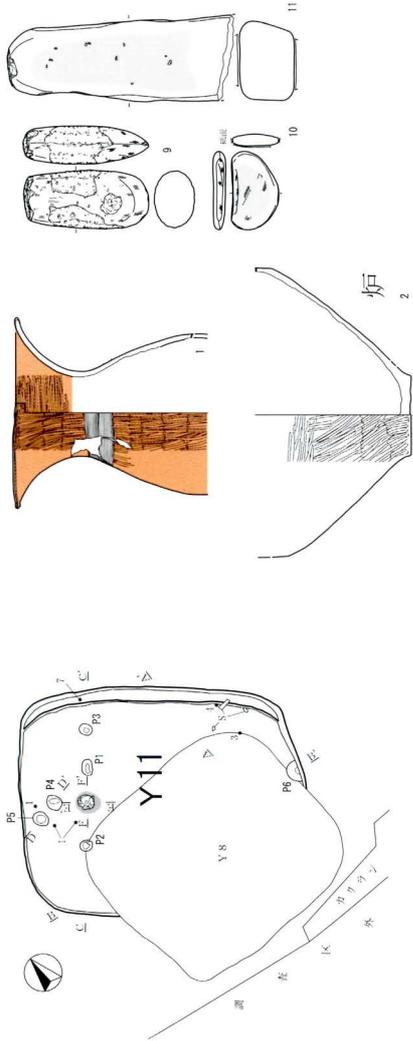
杯：赤色塗彩される。

杯A：口縁に内湾傾向が強まり、底径の割合が小さくなったため、下部が外反気味に開く

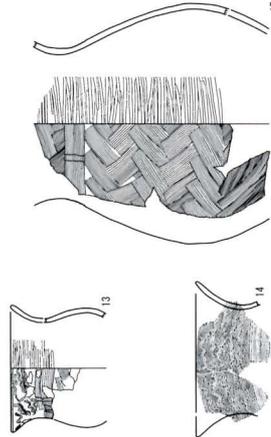
高杯：赤色塗彩される

杯B：罍付き高杯の内稜が明確化し、罍が長くなる
前段階の内稜が明確でないものも残る 大型化

杯C：杯下部に外稜をもって屈曲し端部が外反する



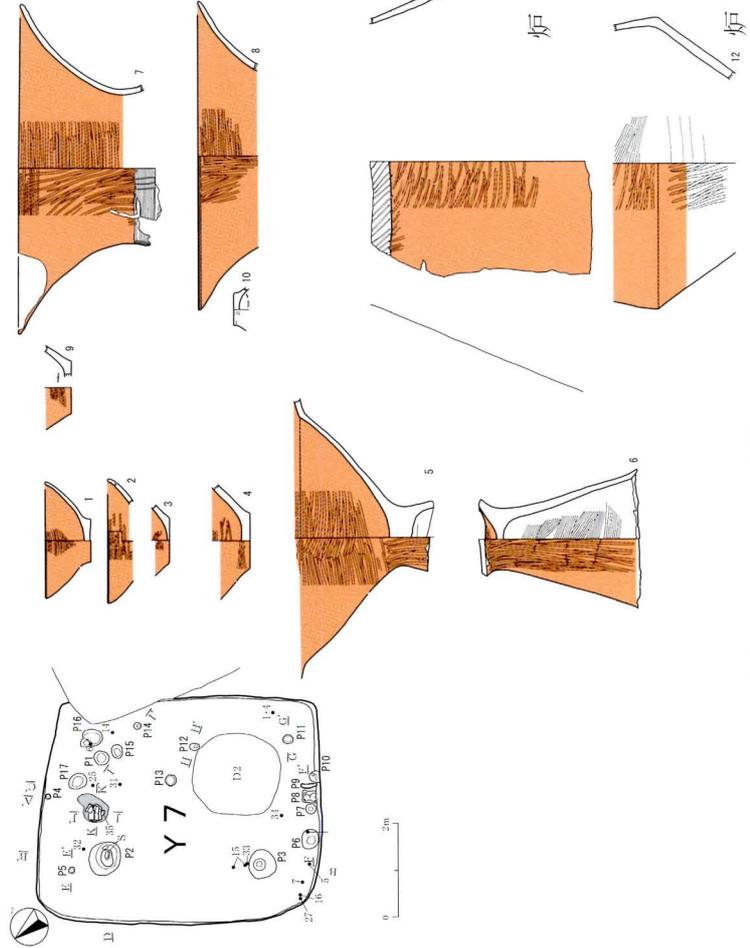
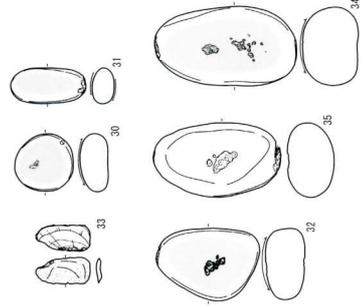
壺：口縁の外反が強くなり、伸長化してくる、
壺A：口縁と胴最大径がほぼ同じになる、
胴下部の外稜が明確で直線的に窄まるものと
明瞭ではなく下部が膨らみを持つ二者がある
壺B：口縁の受け口状の内湾が無くなり、
外反器形となる
壺C：口縁のL字が明瞭化し、
L字の口縁の直立部が長くなる



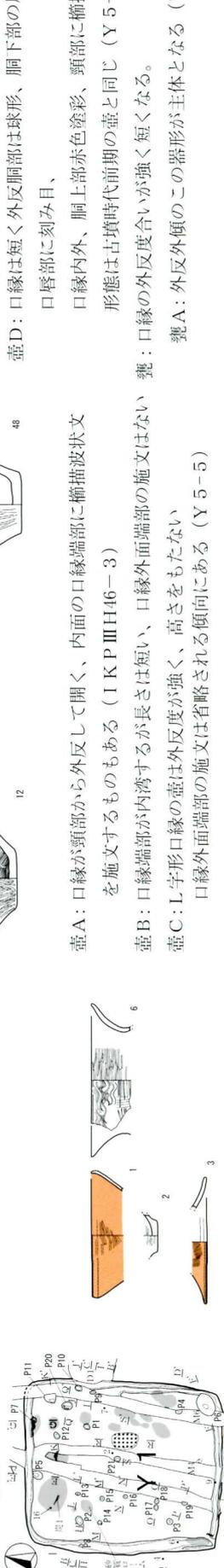
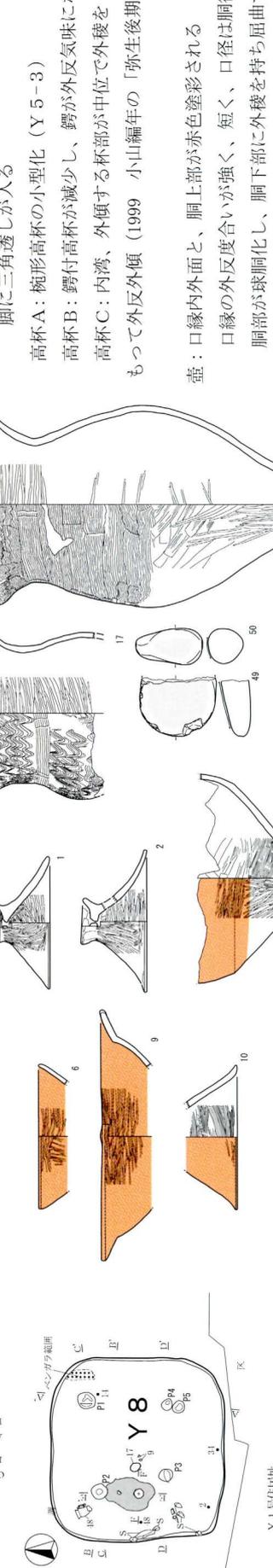
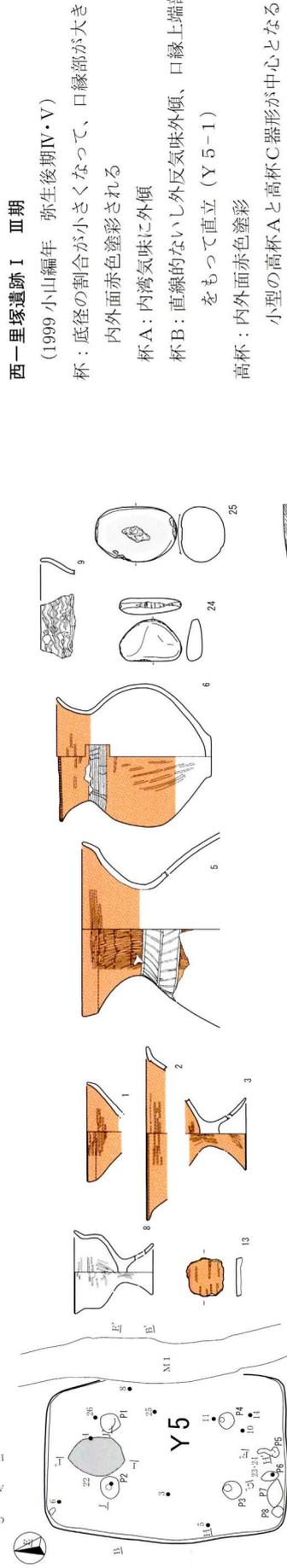
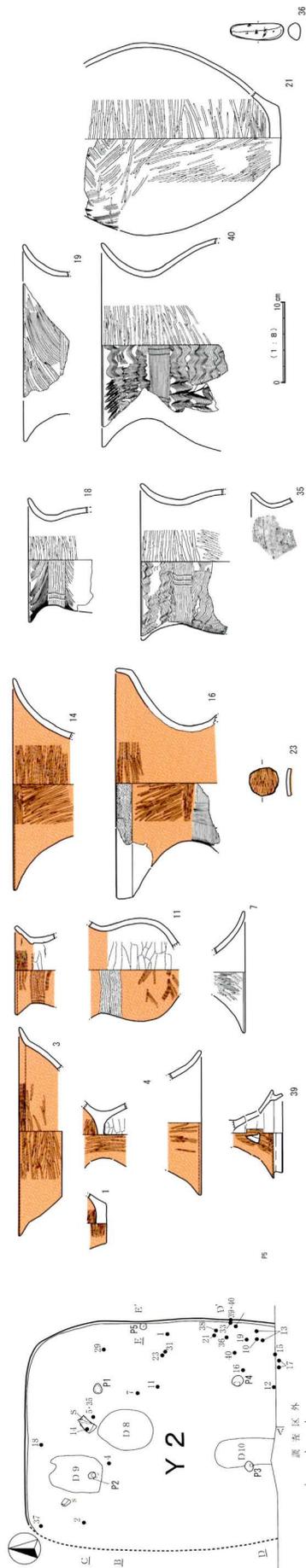
甕：口縁の外反が強くなり、口縁径と胴最大径がほぼ近い
甕A：外反外傾し、口縁部が伸長化

甕B：前代ほど口縁部上半全体の内湾ではなく
端部がわずかに内湾するのみになる

甕C：口縁が直線的に外傾するものは無くなる



第50図 西一里塚遺跡 I Ⅱ期 土器変遷図 (2)



第51図 西一里塚遺跡 I 土器変遷図 (3) Ⅲ期

西一里塚遺跡 I Ⅲ期

(1999 小山編年 弥生後期Ⅳ・Ⅴ)

杯：底径の割合が小さくなって、口縁部が大きく外傾する
内外面赤色塗彩される

杯A：内湾気味に外傾

杯B：直線的ないし外反気味外傾、口縁上端部で外稜
をもって直立 (Y 5-1)

高杯：内外面赤色塗彩

小型の高杯Aと高杯C器形が中心となる
脚に三角透しが入る

高杯A：椀形高杯の小型化 (Y 5-3)

高杯B：鐙付高杯が減少し、鐙が外反気味になる

高杯C：内湾、外傾する杯部が中位で外稜を
もって外反外傾 (1999 小山編年の「弥生後期型高杯」)

壺：口縁内外面と、胴上部が赤色塗彩される

口縁の外反度合いが強く、短く、口径は胴径より小さい
胴部が球胴化し、胴下部に外稜を持ち屈曲する器形が顕著

壺D：口縁は短く外反胴部は球形、胴下部の屈曲はない、
口唇部に刻み目、

口縁内外、胴上部赤色塗彩、頸部に櫛描文を施文
形態は古墳時代前期の壺と同じ (Y 5-6)

甕：口縁の外反度合いが強く短くなる。

甕A：外反外傾のこの器形が主体となる (Y 2-40)

壺A：口縁が頸部から外反して開く、内面の口縁端部に櫛描波状文
を施文するものもある (I K P III H 46-3)

壺B：口縁端部が内湾するが長さは短い、口縁外面端部の施文はない

壺C：L字形口縁の壺は外反度が強く、高さをもたない
口縁外面端部の施文は省略される傾向にある (Y 5-5)

北一本柳遺跡では内周する環濠が時期差をもってとらえられている。西一里塚遺跡と西一本柳遺跡とは800mほど離れている。中間の舌状丘陵上にある北西の久保遺跡は、弥生時代後期後半古までを中心とする遺跡であり、この環濠は弥生時代後期後半新にいたって集落を囲む必要性が生じ、湯川右岸に展開している。

第2節 遺物

西一里塚遺跡Ⅰからは土器、土製品、石製品、古銭、炭化物、骨片、ベンガラが出土している。土器は弥生式土器が大半を占め、縄文式土器はY8号住居址で2点報告。土製品はスプーンと土製円板がある。石製品は磨り面と敲击痕をもつ敲打石である。Y11号住居址の磨製石斧も凹をもつ敲打石に転用されている。

砥石、磨製石鏃の未製品が2点ほどある。

炭化物・骨片などの自然科学分析については機会を得なかったので、他の折にデータを加えたい。ここでは弥生後期の土器の検討をして、本遺跡の時期変遷について考察してみることとする。

弥生後期の土器変遷については1999 シンポジウム『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会を基準として各者が報告をしているのが現状である。佐久地域は小山編年が示されておりこの編年をふまえて本遺跡の弥生時代後期の土器を分類してみる。

西一里塚遺跡Ⅰ I期(弥生時代後期前半・1999 小山編年弥生後期Ⅱ期)

本遺跡—N I Y 3・Y 9・Y 6

炉に使用されている土器は弥生後期前半の吉田式(1999 小山編年弥生後期Ⅰ)の様相をもっている。

他の土器は炉の土器より新しい様相がある。

他の遺跡—北西の久保(KN) Y64・66・104・123 他9棟

西一本柳(I N PⅢ・Ⅳ) H117

周防畑遺跡群S B17・S B21 他にあり

西一里遺跡Ⅰ II期(弥生時代後期後半古・1999 小山編年 弥生後期Ⅲ)

本遺跡—Y11・Y7

他遺跡—北西の久保(KN) Y100

前段階同様で、炉に使用された土器に古相を持つ 箱清水式期古にあたる

西一里塚遺跡Ⅰ III期(弥生時代後期後半新・1999 小山編年 弥生後期Ⅳ・Ⅴ)

本遺跡—Y2・Y5・Y8・Y1

他遺跡—北一本柳(I K PⅢ) H35、西一本柳(I N P XⅣ) H1・H9

壺や甕の胴部上半形が球形に近く張る

甕の櫛描波状文の施文が雑で浅くなり、不規則に重なり、ななめに施文

東海系のS字甕や壺Dなど古墳前期の土師器の器形の壺を伴う

これらより本遺跡の弥生時代後期は弥生時代後期吉田式期新を炉の土器として使用する箱清水式期古に集落が形成され、そして箱清水式期新に環濠が掘られたようである。

引用参考文献

西一本柳遺跡関係

- 1990 佐久埋蔵文化財調査センター『一本柳遺跡群 東大門』第22集
- 1995 佐久市教育委員会『西一本柳遺跡Ⅱ』第37集
- 1999 佐久市教育委員会『西一本柳Ⅲ・Ⅳ』第73集
- 2001 佐久市教育委員会『西一本柳遺跡群Ⅴ・Ⅵ』第91集
- 2006 佐久市教育委員会『西一本柳遺跡ⅩⅢ』第139集
- 2008 佐久市教育委員会『西一本柳遺跡ⅩⅥ』第160集
- 2010 佐久市教育委員会『西一本柳遺跡ⅩⅣ』第175集
- 2011 佐久市教育委員会『西一本柳遺跡ⅩⅧ』第190集

北一本柳遺跡関係

- 2006 佐久市教育委員会『宮の前遺跡』第140集
- 2006 佐久市教育委員会『年報14(北一本柳遺跡Ⅱ)』(P39)
- 2008 佐久市教育委員会『北一本柳遺跡Ⅳ』第158集
- 2009 佐久市教育委員会『年報17(北一本柳遺跡Ⅳ)』
- 2010 佐久市教育委員会『北一本柳遺跡Ⅲ』第175集
- 2012 佐久市教育委員会『市内遺跡発掘調査報告書2010(西一本柳遺跡ⅩⅨ)』第196集 (P71 M1)
- 2014 佐久市教育委員会『東一本柳遺跡Ⅱ』第218集 (P25 M2)

西一里塚遺跡関係

- 1973 佐久市教育委員会『西一里塚遺跡発掘調査概報』－弥生後期環濠集落－
- 1973 佐久市教育委員会『岩村田餅田』－佐久市岩村田餅田緊急発掘概報－
- 2009 佐久市教育委員会『西一里塚遺跡Ⅲ』第165集 (P43～)
- 2011 佐久市教育委員会『西一里塚遺跡Ⅱ』第188集

中部横断自動車道建設関係

- 2012 長野県埋蔵文化財センター『濁り遺跡 久保田遺跡 西一里塚遺跡群』
- 2014 長野県埋蔵文化財センター『周防畑遺跡群』
- 2014 長野県埋蔵文化財センター『森平 寄せ塚遺跡群』

その他

- 1999 長野県考古学会『長野県弥生土器集成図録』・99シンポジウム『長野県の弥生土器編年』

第3表 西一里塚遺跡Ⅰ検出遺構一覧表
竪穴住居址

() は推定・〈 〉 残存値

遺構名	検出位置	時代	形態	規模 (cm, m)				主軸方位	炉	柱穴	備考
				南北長	東西長	壁高	面積				
Y1	E13	弥生後期	方形	472	432	4~13	20.39	N-8°-W	—	主柱4、壁柱3 貯穴1、他13	D1・M3・4・6に切られる。
Y2	C21	〃	隅丸長方形	〈609〉	(580)	6~20	—	N-0°	—	主柱4、壁柱1	南側調査区外 D8・9・10に切られ、Y3・4を切る。
Y3	A22	〃	〃	〈308〉	(564)	5~16	—	N-21°-E	—	主柱2、棟持柱1 壁柱1	南側・東側調査区外 Y2、D8・10に切られる。
Y4	D21	〃	—	〈48〉	〈306〉	—	—	N-9°-W	—	—	Y2に切られる。
Y5	D9	〃	隅丸長方形	582	400	4~20	—	N-9°-E	北	主柱4、出入口2 貯穴2	M1に切られ、Y6・7を切る。
Y6	G10	〃	〃	642	472	3~19	—	N-7°-E	〃	主柱5、棟持柱1 壁柱4、他1	Y5・7、M1に切られる。
Y7	E7	〃	〃	577	480	0~8	—	N-40°-E	〃	主柱3、壁柱1 出入口3、他9	Y5・6、D2に切られる。
Y8	C4	〃	隅丸方形	412	456	9~16	18.79	N-89°-W	西	主柱5	Y8・11に切られ、Y10を切る。
Y9	C5	〃	隅丸長方形	〈454〉	376	5~9	—	N-45°-W	北	主柱3、壁柱1	Y8・9・11に切られる。
Y10	B6	〃	—	〈456〉	402	1~10	—	N-33°-E	—	—	Y8・9に切られ、Y11を切る。
Y11	E2	〃	隅丸長方形	536	436	3~21	—	N-39°-W	北	主柱2、壁柱2 棟持柱1、出入口1	Y8に切られ、Y9・10を切る。
Y12	G6	弥生中期	円形	長軸 242	短軸 217	1~11	—	長軸方位 N-53°-E	中央	柱穴17	

土坑

単独ピット

遺構	位置	平面形	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	備考
D1	E14	隅丸長方形	163	118	40	N-89°-E	Y1を切る。
D2	D6	円形	184	176	38	N-48°-E	Y7を切る。
D3	J11	隅丸長方形	267	221	27	N-74°-W	
D4	J10	円形	60	60	7	—	
D5	G7	楕円形	79	69	28	N-6°-W	
D6	K14	長楕円形	264	125	55	N-30°-W	
D7	I13	楕円形	199	165	46	N-89°-W	
D8	B21	〃	133	106	39	N-7°-E	Y2を切る。
D9	C20	長方形	129	95	20	N-4°-E	〃
D10	A20	隅丸長方形	〈142〉	71	51	N-4°-W	南側調査区外 Y2・3を切る。

遺構名	位置	規模 (長×短×深) (cm)	平面形	備考
P1	C13	28×21×17	楕円形	M6を切る。
P2	C13	23×18×10	〃	M4を切る。
P3	D1	26×25×21	円形	
P4	E2	26×24×37	円形	
P5	E2	11×8×—	楕円形	

溝址

遺構名	検出位置	全長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	備考
M1	A9~H9	〈14.78〉	78~106	26	Y5・6を切る。
M2	B11~H10	(12.2)	(80~100)	—	
M3	C12~E13	(5.72)	36~58	30	Y1を切る。
M4	C13~E13	(5.76)	36~58	30	P2に切られ、Y1を切る。
M5	O6~A32	(64.5)	300~400	50~91	M7・8に切られる。
M5 西トレンチ	Q7	(1.44)	356	67~71	
M5 中央	O11~L23	(23.8)	338~396	60~78	
M5 東トレンチ	A31・32	(2.0)	328	38~56	
M6	C13~F13	(6.04)	22~36	34	P1に切られ、Y1を切る。
M7	I19~L20	(6.7)	104	49	M5を切る。
M8	O12	(0.48)	132	35	〃

第4表 西一里塚遺跡Ⅰ 出土遺物一覧表

() は推定値 () は残存値

遺構	番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)		内面	外面		
Y1	1	弥生	杯	口縁	(15.6)	—	(3.9)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	W	
	2	弥生	杯	底	—	3.9	(1.7)	ミガキ	ミガキ・底部ミガキ	完全実測	NI No.13	
	3	弥生	盞	口縁	(15.6)	—	(1.8)	口縁部横ナデ	ハケ目→ミガキ・赤色塗彩	回転実測	E	
	4	弥生	壺	底	—	15.3	(5.2)	剥離	ミガキ 一部剥離	完全実測	NI No.26	
	5	弥生	甗	底	—	(6.4)	(2.1)	ミガキ	ミガキ	回転実測 底部中央縁後穿孔	W	
	6	弥生	甗	口縁	(19.0)	—	(4.8)	ミガキ	口縁部横ナデ→ミガキ 頸部横線	回転実測	NI No.4	
	7	弥生	台付甗	脚	—	(8.9)	(7.5)	胴部ミガキ	口縁部横ナデ→ミガキ 磨耗	完全実測	NI No.18 M6	
	8	弥生	壺	口縁	—	—	—	ミガキ・赤色塗彩	口縁部横ナデ→ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	W	
	9	弥生	壺	頸	—	—	(9.0)	口縁部ミガキ	頸部横線→口縁・胴部ミガキ	拓本 断面実測	NI No.6 W	
	10	弥生	壺	頸	—	—	—	剥離	頸部横線→口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	W	
	11	弥生	壺	頸	—	—	—	剥離	頸部横線→口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	P1	
	12	弥生	壺	頸	—	—	—	剥離	頸部横線→口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	W	
	13	弥生	壺	頸	—	—	—	ハケ目 剥離	頸部横線→口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	E	
	14	弥生	壺	頸	—	—	—	ハケ目 剥離	頸部横線→口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	W	
	15	弥生	甗	胴	—	—	(4.9)	ミガキ	横ナデ	拓本 断面実測	E C-13・E-13	
	16	弥生	甗	口縁	—	—	—	ミガキ	横ナデ	拓本 断面実測	NI No.1	
Y2	1	弥生	杯	底部	—	5.0	(2.4)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩 底部ハラナデ	完全実測	NI No.62	
	2	弥生	高坏	口縁	(25.6)	—	(4.7)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	NI No.83 C-20	
	3	弥生	高坏	口縁	(26.0)	—	(5.3)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	NI No.72	
	4	弥生	高坏	頸	—	—	(5.5)	杯部ミガキ・赤色塗彩	杯部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	NI No.48	
	5	弥生	高坏	脚	—	(18.0)	(4.1)	ハケ目→横ナデ	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	NI No.91	
	6								欠番			
	7	弥生	盞	口縁	(15.2)	—	(3.9)	横ナデ	ハケ目→口縁部横ナデ→ミガキ	回転実測	NI No.45	
	8	弥生	盞	口縁	(14.0)	—	(3.4)	ミガキ	ミガキ	回転実測		
	9	弥生	高坏	頸	—	—	(2.7)	杯部ミガキ・赤色塗彩	杯部ミガキ・赤色塗彩	完全実測		
	10	弥生	盞	つまみ	—	—	(6.8)	雑なミガキ	雑なミガキ	天井に穿孔1 完全実測	NI No.68 C-20	
11	弥生	壺	胴	—	—	(11.1)	胴部ハラナデ	頸部横線(2段) 口縁・胴部ハラナデ→ミガキ・赤色塗彩	回転実測	NI No.44		
12	弥生	壺	口縁	(11.2)	—	(5.0)	胴部ハラナデ	頸部横線→赤色塗彩 口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩	回転実測	NI No.64		
13	弥生	壺	口縁	(18.4)	—	(5.4)	ミガキ・赤色塗彩	頸部横線→赤色塗彩	胎上橙色 回転実測	NI No.67・70		
14	弥生	壺	口縁	(26.6)	—	(7.5)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	NI No.51		
15	弥生	壺	口縁	(36.4)	—	(3.5)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	NI No.66		
16	弥生	壺	口縁	(29.4)	—	(2.5)	ミガキ・赤色塗彩	口縁部横線→口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩	回転実測	NI No.39		
17	弥生	甗	口縁	(19.6)	—	(10.6)	ミガキ	口縁・胴上部横線→頸部横線(3連止め)	回転実測	NI No.65・90		
18	弥生	甗	口縁	(15.6)	—	(7.8)	ミガキ	口縁・胴上部横線→頸部横線(2連止め)	回転実測	NI No.52		
19	弥生	甗	口縁	(24.6)	—	(5.7)	ミガキ	口縁部横線→頸部横線	27回転実測	NI No.71		
20	土師	台付甗	頸	—	—	(3.2)	胴部ミガキ	横ナデ	回転実測			
21	弥生	甗	胴~底	—	7.4	(24.3)	ミガキ 一部に赤色顔料付着	胴上部ハケ目→横線斜走文→胴中部・下部 底部ミガキ	完全実測	NI No.75		
22	弥生	台付甗	脚	(6.2)	—	(1.3)	横ナデ	横ナデ→ミガキ				

※出土位置の「NI No.」は遺跡全体の通しNo.である。

遺構 番号	種類	器種	部位	法量 (cm)		重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置
				口径(長)	底径(幅)		器高(厚)	内面		
Y2	23	弥生 土板			3.6	3.6	0.5	ミガキ・赤色塗彩	杯転用	NI No.40
	24	弥生 壺	頸		—	—	—	櫛描斜走文	拓本 断面実測	
	25	弥生 壺	口縁		—	—	—	口唇・口縁部縄文	中期 拓本 断面実測	
	26	弥生 壺	口縁		—	—	—	口唇部縄文	中期 拓本 断面実測	
	27	弥生 壺	口縁		—	—	—	ハケ目→口縁部横ナデ	中期 拓本 断面実測	
	28	弥生 壺	頸		—	—	—	口縁ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	NI No.60
	29	弥生 壺	頸		—	—	—	頸部櫛波状文(2連止め) 櫛波状文	拓本 断面実測	
	30	弥生 壺	頸		—	—	—	頸部ヘラ描矢羽根文	拓本 断面実測	
	31	弥生 甕	頸		—	—	—	頸部櫛波状文	拓本 断面実測	NI No.42
	32	弥生 甕	口縁		—	—	—	頸部櫛波状文(2連止め)	拓本 断面実測	
	33	弥生 甕	口縁		—	—	—	頸部櫛波状文(2連止め)	拓本 断面実測	NI No.73
	34	弥生 甕	口縁		—	—	—	櫛波状文	拓本 断面実測	
	35	弥生 甕	口縁		—	—	—	櫛波状文(少し波状)	拓本 断面実測	NI No.91
	36	石器 磨・敲石			6.6	2.1	1.5	上下端部に敲打痕 全体に磨り	拓本 断面実測	NI No.74
	37	銅製品 沓銭			2.2	—	0.05	(1.37)		NI No.82
	38	弥生 鉢	口縁		(25.6)	—	(6.4)	—	回転実測	NI No.96
	39	弥生 裝飾高坏	脚		—	9.6	(6.4)	—	完全実測 三角形透かし4ヶ	NI No.209
	40	弥生 甕	口縁		(25.2)	—	(14.3)	—	回転実測	NI No.41・209
Y3	1	弥生 杯	口～底		(4.27)	4.5	5.8	—	口縁部に穿孔 φ5mm 回転実測	NI No.211
	2									
	3	弥生 鉢	底		—	(7.6)	(3.1)	—	回転実測	
	4	弥生 高坏	杯		18.2	—	(9.2)	—	完全実測	NI No.212・213
	5									
	6	弥生 壺	口～頸		—	—	(14.6)	—	完全実測	NI No.210 A・211 Z
	7	弥生 壺	口縁		(15.8)	—	(4.7)	—	回転実測	
	8									
	9	弥生 台付甕	脚		—	(7.0)	(3.5)	—	回転実測	
	10	弥生 壺	口縁		—	—	—	—	拓本 断面実測	NI No.208
	11	弥生 壺	頸		—	—	—	—	拓本 断面実測	
	12	弥生 壺	頸		—	—	—	—	拓本 断面実測	
	13	弥生 甕	口縁		—	—	—	—	拓本 断面実測	
	14	弥生 甕	口縁		—	—	—	—	拓本 断面実測	
	15	弥生 甕	口縁		—	—	—	—	拓本 断面実測	
	16	弥生 甕	頸		—	—	—	—	拓本 断面実測	NI No.95
	17	弥生 甕	胴		11.4	8.0	5.8	663.29	拓本 断面実測	NI No.211
	18	石器 磨・敲石			—	—	—	—	拓本 断面実測	NI No.214
	19	弥生 甕	口縁		—	—	—	—	拓本 断面実測	NI No.214
	20	弥生 甕	胴		—	—	—	—	拓本 断面実測	NI No.214

遺構	番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			成形・調整		備考	出土位置
					口径(長)	底径(幅)	高さ(厚)	重量(g)	内面		
Y5	1	弥生	杯	口縁	12.4	—	(4.3)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	
	2	弥生	高坏	口縁	(21.4)	—	(2.6)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	
	3	弥生	高坏	胴	—	(8.8)	(7.5)	杯部ミガキ・赤色塗彩 黒色塗 胴部ナデ	ミガキ・赤色塗彩	完全実測	N I No.98
	4	弥生	高坏	頸	—	—	(4.2)	杯部ミガキ・赤色塗彩 胴部ハケ目	ミガキ・赤色塗彩	完全実測	N I No.123
	5	弥生	壺	口縁	21.4	—	(17.0)	胴部ナデ 口縁部ミガキ・赤色塗彩 口縁下部刻文	頸部ヘラ指線文・ヘラ指線刻文 口縁・胴上部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	N I No.104
	6	弥生	壺	完形	15.4	5.0	19.0	胴部ミガキ? 口縁部ミガキ・赤色塗彩 磨耗	頸部指線文(2段) 口縁・胴上部ミガキ・赤色塗彩 胴下部ミガキ	完全実測	N I No.97
	7	弥生	壺	底	—	17.9	(8.2)	ハケ目 灰付着	底部ミガキ 胴下部ハケ目→ミガキ	完全実測	N I 炉
	8	弥生	台付甕	口縁	(10.4)	(6.4)	9.7	ミガキ 脚部ナデ	ミガキ	完全実測	N I No.118
	9	弥生	甕	口縁	—	—	(4.3)	ミガキ	頸部指線文(等間隔止め) 口縁部指線文	破片実測	
	10	弥生	甕	底	—	6.7	(2.6)	ミガキ	胴・底部ミガキ	完全実測	N I No.113
	11	弥生	甕	底	—	4.8	(2.8)	ミガキ	胴・底部ミガキ	完全実測	N I No.107
12											
											欠番
Y6	13	弥生	土板		4.6	4.8	0.7	剥離	ミガキ・赤色塗彩	完全実測	N I No.103
	14	弥生	壺	口縁	—	—	—	ミガキ・赤色塗彩	口縁部指線文→口縁部ミガキ・赤色塗彩 口唇部細文 剥離	拓本 断面実測	N I No.111
	15	弥生	壺	口縁	—	—	—	ミガキ・赤色塗彩	口縁部指線文・口唇部細文 口縁部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	
	16	弥生	壺	頸	—	—	—	胴部ナデ 口縁部ミガキ・赤色塗彩	頸部指線文→口縁部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	
	17	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	指線文	拓本 断面実測	
	18	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	口縁下部指線文	拓本 断面実測 折り返し口縁	
	19	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	口縁部指線文	拓本 断面実測 折り返し口縁	
	20	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	指線文	拓本 断面実測	
	21	弥生	甕	頸	—	—	—	ミガキ	頸部指線文(等間隔止め)→頸部指線文→円形指線文	拓本 断面実測	
	22	弥生	甕	胴	—	—	—	ミガキ	ハケ目→指線文	拓本 断面実測	N I No.117
23	石器	磨・敲石		11.4	6.5	3.7	380.82	上下端部に敲打痕 正面に磨り面	安山岩	N I No.106	
24	石器	磨・敲石		7.6	5.3	2.0	110.35	上下端部に敲打痕 縁辺に糸痕線の使用痕	安山岩	N I No.106	
25	石器	磨・敲石		10.0	6.9	5.5	581.44	上下端部と中央に敲打痕 正面に磨り面	安山岩	N I No.108	
26	石器	磨・敲石		18.5	9.6	7.7	1900	上下端部と中央、裏面に敲打痕 正面・左側に磨り面	硬砂岩	N I No.119	
27	石器	敲石		(5.7)	(7.4)	(3.0)	(175.70)	下部欠損 上端部正面に敲打痕	硬砂岩		
28	石器	磨石		(7.0)	(3.9)	(4.3)	(126.09)	右側～下側欠損 正面に磨り面	安山岩		
1	弥生	杯	口縁	(14.8)	—	(7.0)	—	ミガキ・赤色塗彩	回転実測 口縁上部に頸2 φ4mm	炉 3	
2	弥生	高坏	口縁	(21.0)	—	(4.2)	—	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	炉 1	
3	弥生	壺	胴	—	—	(30.2)	—	剥離	頸部指線文→ミガキ・赤色塗彩	完全実測	N I No.125
4	弥生	甕	胴～底	—	4.2	(9.6)	—	ミガキ	胴上部指線文 胴下・底部ミガキ	完全実測	N I No.129
5	弥生	甕	口縁	(15.0)	—	(9.0)	—	ハケ目→ミガキ	ハケ目→ミガキ	中期 回転実測	E-8 7
6	弥生	甕	口縁	(10.8)	—	(3.0)	—	頸部指線文(等間隔止め)→口縁部指線文→ミガキ	頸部指線文(等間隔止め)→口縁部指線文→ミガキ	中期 回転実測	
7	弥生	壺	頸	—	—	—	—	ハケ目指線文→ミガキ	ハケ目指線文→ミガキ	中期 拓本 断面実測	
8	弥生	甕	口縁	—	—	—	—	口唇部刻目 口縁部指線文 胴部指線斜走文	口唇部刻目 口縁部指線文 胴部指線斜走文	中期 拓本 断面実測	N I No.127
9	弥生	甕	口縁	—	—	—	—	口縁部指線文	口縁部指線文	拓本 断面実測	
10	弥生	甕	胴	—	—	—	—	頸部指線文(等間隔止め) 胴上部ハケ目→指線文	頸部指線文(等間隔止め) 胴上部ハケ目→指線文	拓本 断面実測	N I No.130 炉 1

遺構	番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			成形・調整		備考	出土位置	
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	重量(g)	内面			外面
Y6	11	弥生	甕	胴	—	—	(22.8)	ハケ目	ミガキ	回転実測	NI No.131・132 炉1・2	
	12	弥生	甕	胴	—	—	(10.2)	剥離	ミガキ・赤色顔料付着	回転実測	炉3	
	13	石器	蔽石		6.5	5.4	2.1	107.83	縁辺に蔽打痕	安山岩	NI No.125	
Y7	1	弥生	杯	口~底	(12.2)	4.5	4.8		ミガキ・赤色塗彩	口縁・底部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	NI No.152
	2	弥生	杯	口縁	(13.0)	—	(2.7)		ミガキ・赤色塗彩	口縁端部に穿孔φ2mm 2	回転実測	
	3	弥生	杯	底	—	(4.6)	(1.9)		ミガキ・赤色塗彩	底部剥離	回転実測	
	4	弥生	杯	底	—	5.8	(4.0)		ミガキ・赤色塗彩	底部へラナデ→ミガキ	完全実測	NI No.152
	5	弥生	器台	口~底	—	—	(14.7)		杯部ミガキ・赤色塗彩	脚部ナデ	完全実測	脚部二次加工あり
	6	弥生	高坏	脚	—	—	(16.6)		杯部ミガキ・赤色塗彩	脚部ハケ目	完全実測	高坏脚部転用
	7	弥生	甕	口縁	34.8	—	(14.5)		胴部ハケ目	口縁部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	NI No.134
	8	弥生	甕	口縁	(32.6)	—	(6.4)		ミガキ・赤色塗彩	頸部描線状文(3連止め)→口縁部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	NI No.150
	9	弥生	深鉢	底	—	(5.6)	(2.8)		ミガキ・赤色塗彩	底部ミガキ	回転実測	NI No.150
	10	弥生	蓋	底	—	3.3	(1.6)		ナデ	ナデ→ミガキ?	完全実測	
	11	弥生	甕	胴上	—	—	(22.5)		剥離	頸部へラ描矢羽根文→胴部ミガキ・赤色塗彩	回転実測	炉
	12	弥生	甕	胴中	—	—	(12.9)		ハケ目・へラナデ	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	炉
	13	弥生	甕	口~胴	(13.3)	—	(10.1)		ミガキ	口縁・胴上御描線状文→頸部御描線状文(止め不明跡)	完全実測	NI No.135
	14	弥生	甕	口縁	(16.4)	—	(6.8)		ミガキ 磨耗	口縁・頸部描線状文→頸部御描線状文	拓本 回転実測	NI No.137
	15	弥生	甕	胴	—	—	(24.8)		ミガキ	口縁・胴部御描線状文(横方向)→頸部御描線状文(2連止め)	回転実測	NI No.144・145
	16	弥生	甕	底	—	7.5	(2.8)		ミガキ	ミガキ	完全実測	頸部二次加工か
	17	弥生	台付甕	脚	—	(8.8)	(2.8)		ハケ目	ハケ目	回転実測	
18	弥生	甕	口縁	—	—	—		ミガキ・赤色塗彩	頸部御描線状文 口縁部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測		
19	弥生	甕	頸	—	—	—		剥離	へラ描矢羽根文	拓本 断面実測		
20	弥生	甕	頸	—	—	—		剥離	頸部へラ描矢羽根文 胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測		
21	弥生	甕	頸	—	—	—		ハケ目	御描線状文→胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測		
22	弥生	甕	頸	—	—	—		剥離	御描線状文→胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測		
23	弥生	甕	口縁	—	—	—		ミガキ	御描線状文	拓本 断面実測		
24	弥生	甕	口縁	—	—	—		ミガキ	口縁部御描線状文 頸部御描線状文(2連止め)	拓本 断面実測		
25	弥生	甕	胴	—	—	—		ミガキ	胴上部御描線状文 胴中部御描線状文(横方向)	拓本 断面実測	NI No.153	
26	弥生	甕	胴	—	—	(17.1)		ミガキ	御描線状文	拓本 回転実測	炉	
27	弥生	甕	胴	—	—	—		ミガキ	御描線状文	拓本 断面実測	NI No.142・147	
28									欠番			
29									欠番			
30	石器	磨石			6.2	6.1	3.0	161.03	正面に磨り面	安山岩		
31	石器	磨・蔽石			7.9	3.8	2.6	104.65	正裏に磨り面 下端部に蔽打痕	安山岩	NI No.139	
32	石器	磨・蔽石			10.8	7.8	4.3	498.63	正面に磨り面 正裏と上端部に蔽打痕	安山岩	NI No.142	
33	石器	剥片			5.7	2.8	0.5	10.00	正裏は自然面	黒色頁岩	NI No.146	
34	石器	磨・蔽石			14.7	8.5	5.7	1137.77	正面に磨り面 正裏と上下端部に蔽打痕	安山岩	NI No.151	
35	石器	蔽石			13.3	8.0	5.1	731.53	正裏と下端部に蔽打痕 被熱あり?	安山岩	炉	

遺構	番号	種類	器種	部位	法量 (cm)		成形・調整		備考	出土位置
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	重量(g)		
Y8	1	弥生	蓋	口縁部	16.6	—	6.4	三ガキ	完全実測	天井に穿孔1
	2	弥生	蓋	口縁部	19.8	—	—	八ケ目→ミガキ	完全実測	天井に穿孔1
	3	弥生	蓋	つまみ	—	—	(2.6)	三ガキ・赤色塗彩	完全実測	高杯を蓋に転用か
	4	弥生	蓋	口縁	(23.0)	—	(4.8)	八ケ目→ミガキ	回転実測	
	5	弥生	鉢	口縁	(23.2)	—	(7.3)	三ガキ	回転実測	
	6	弥生	杯	口縁	(18.0)	—	(3.6)	三ガキ・赤色塗彩	回転実測	
	7	弥生	高杯	頸	—	—	(4.7)	杯部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	
	8	弥生	高杯	頸	—	—	(3.2)	杯部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	
	9	弥生	高杯	口縁	(31.0)	—	(6.2)	三ガキ・赤色塗彩	完全実測	
	10	弥生	高杯	脚	—	—	(6.8)	三ガキ・赤色塗彩	回転実測	口唇部に突起あり
	11	弥生	壺	口縁	(18.4)	—	(1.9)	三ガキ・赤色塗彩	回転実測	
	12	弥生	壺	胴下	—	7.4	(12.3)	胴部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	炉
	13	弥生	壺	底	—	(4.0)	(3.0)	磨耗	回転実測	
	14	弥生	壺	底	—	(4.8)	(2.7)	ナデ	完全実測	NI No.170
	15	弥生	壺	底	—	8.9	(3.2)	八ケ目	完全実測	NI No.154
	16	弥生	甕	底	—	7.8	(2.2)	三ガキ 黒色	完全実測	NI No.166
	17	弥生	甕	口~胴	19.5	—	(14.0)	頸部縹波状文(2連止め)→口縁・胴上部縹波状文	完全実測	縹波状止めが不明瞭
	18	弥生	壺	口縁	—	—	—	上部縹波状文→ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測
	19	弥生	壺	口縁	—	—	—	口唇部縹文 上部縹波状文 下部ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測
	20	弥生	壺	口縁	—	—	—	口唇部縹文 ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測
	21	弥生	壺	頸	—	—	—	頸部縹波状文(2連止め) 口縁部ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測
	22	弥生	壺	口縁	—	—	—	ミガキ・赤色塗彩・頸部縹波状文 口縁部ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測
	23	弥生	壺	頸	—	—	—	頸部縹波状T字文→胴部ミガキ	拓本	断面実測
	24	弥生	壺	口縁	—	—	—	頸部縹波状文 口縁部ミガキ	拓本	断面実測
	25	弥生	壺	頸	—	—	—	頸部縹波状文(3連止め)・縹波状文 口縁部ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測
	26	弥生	壺	頸	—	—	—	頸部縹波T字文→胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測
	27	弥生	壺	頸	—	—	—	頸部縹波T字文→口縁部ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測
	28	弥生	壺	頸	—	—	—	頸部へラ描矢羽根文→胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測
	29	弥生	壺	頸	—	—	—	頸部縹波状文→胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測
	30	弥生	壺	頸	—	—	—	縹波文(へラ描)→ミガキ	拓本	断面実測
	31	弥生	壺	頸	—	—	—	頸部縹文→へラ描押引縹線文	中期	拓本 断面実測
	32	弥生	壺	胴	—	—	—	へラ縹波状文→ミガキ	中期	拓本 断面実測
	33	弥生	甕	口縁	—	—	—	縹波斜走文(横方向)	拓本	断面実測
	34	弥生	甕	口縁	—	—	—	縹波状文	拓本	断面実測
	35	弥生	甕	口縁	—	—	—	縹波状文	拓本	断面実測
	36	弥生	甕	口縁	—	—	—	頸部縹波状文→口縁部縹波状文	拓本	断面実測
	37	弥生	甕	口縁	—	—	—	縹波状文	拓本	断面実測
	38	弥生	甕	口縁	—	—	—	頸部縹波状文→口縁部縹波状文	拓本	断面実測

遺構	番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)		内面	外面		
Y8	39	弥生	甕	口縁	—	—	—	三ガキ	口縁部縄文 口縁部縹波状文	拓本 断面実測		
	40	弥生	甕	口縁	—	—	—	三ガキ	口縁部縹波状文	拓本 断面実測		
	41	弥生	甕	口縁	—	—	—	三ガキ	縹斜走文	拓本 断面実測		
	42	弥生	甕	口縁	—	—	—	三ガキ	口縁部縹波状文→縹斜走文	拓本 断面実測		
	43	弥生	甕	口縁	—	—	—	三ガキ	口縁・胴部縹波状文→頸部縹波状文(3連止め)	拓本 断面実測		
	44	弥生	甕	胴	—	—	—	三ガキ	頸部縹波状文→胴上部縹斜走文	拓本 断面実測		
	45	弥生	甕	胴	—	—	—	三ガキ	縹斜走文→縹斜走文	拓本 断面実測		
	46	縄文	鉢鉢	胴	—	—	—	三ガキ	縄文・沈線	拓本 断面実測		
	47	縄文	鉢	胴	—	—	—	三ガキ	凸帯→刻目→ミガキ	拓本 断面実測		
	48	弥生	甕	壳形	23.4	7.7	38.1	三ガキ	口縁・胴上部縹波状文→頸部縹波状文(2連止め) 胴下部・底部へラナテ→ミガキ	拓本 断面実測 胴上部の状文は縹波状	N I.No.155・157	
Y9	49	石器	磨・敲石		(9.4)	(7.4)	(358.02)	被熱あり?	右側欠損 正面に磨り面 縁辺に敲打痕	安山岩		
	50	石器	磨・敲石		8.2	4.5	210.88		正面に磨り面 上下端部に敲打痕	安山岩		
	1	弥生	杯	口縁	(15.0)	—	(3.5)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	回転実測		
	2	弥生	杯	口縁	(12.8)	—	(4.9)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	回転実測		
	3	弥生	高坏	脚	—	(18.6)	(5.3)	ハケ目 裾部横ナテ	三ガキ・赤色塗彩	回転実測		
	4	弥生	壺	口縁	23.6	—	(34.0)	口縁部ミガキ 胴部ハケ目	口縁上部縹波状文・下部ミガキ 頸部縹波状文(2連止め) →胴上部縹波状文→胴部ミガキ	灰付着 回転実測	炉	
	5	弥生	土板		3.4	3.7	0.6	ハケ目	三ガキ・赤色塗彩 磨耗	完全実測		
	6	弥生	壺	底	—	(13.8)	(3.0)	剥離	鉄分付着	回転実測		
	7	弥生	壺	底	—	11.5	(6.0)	剥離	三ガキ	完全実測	N I.No.172	
	8	弥生	甕	底	—	4.9	(3.1)	三ガキ	三ガキ	完全実測		
	9	弥生	甕	胴	—	—	—	ハケ目	頸部縹波T字文 胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測		
	10	弥生	甕	胴	—	—	—	ハケ目	縹波状文 ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測		
	11	弥生	甕	胴	—	—	—	ハケ目	縹波状文→ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測		
	12	弥生	壺	頸	—	—	—	三ガキ・赤色塗彩	頸部縹波状文	拓本 断面実測		
	13	弥生	壺	頸	—	—	—	ハケ目	縹波状文	拓本 断面実測		
	14	弥生	壺	頸	—	—	—	三ガキ	縄文→へラ描横線文(3本)	中期 拓本 断面実測		
	15	弥生	甕	口縁	—	—	—	三ガキ	頸部縹波状文	拓本 断面実測		
16	弥生	甕	口縁	—	—	—	三ガキ	縹波状文	拓本 断面実測			
17	弥生	甕	口縁	—	—	—	三ガキ	縹波状文	拓本 断面実測			
18	弥生	甕	口縁	—	—	—	三ガキ	縹波状文	拓本 断面実測			
19	弥生	甕	口縁	—	—	—	三ガキ	頸部縹波状文 口縁部縹波状文	拓本 断面実測			
20	弥生	甕	口縁	—	—	—	三ガキ	口縁部縹波状文 胴上部縹斜走文 頸部縹波状文	拓本 断面実測			
21	弥生	甕	口縁	—	—	—	三ガキ	縹波状文 口唇部刻目	拓本 断面実測			
22	弥生	甕	胴	—	—	—	三ガキ	頸部縹波状文(4連止め) 胴上部縹波状文	拓本 断面実測			
23	弥生	甕	胴	—	—	—	三ガキ	縹斜走文 胴下部ミガキ	拓本 断面実測			
24	弥生	甕	胴	—	—	—	三ガキ	縹斜走文 胴下部ミガキ	拓本 断面実測			
25	弥生	甕	胴	—	—	—	三ガキ	頸部縹波状文 胴上部縹斜走文(縦方向)	中期 拓本 断面実測			

遺構	番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			成形・調整		備考	出土位置
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	重量(g)	内面		
Y9	26	弥生	甕	胴	—	—	—	櫛描波状文	中期 拓本	断面実測	
	27	弥生	土製甕	—	(10.0)	4.7	1.9	ミガキ	完全実測		NI No.101・203 B-8グ
Y10	1	弥生	壺	胴上	—	—	—	ミガキ・赤色塗彩	破片実測		
	1	弥生	壺	口~胴	20.0	—	(20.2)	頸部櫛描横線文 口縁・胴上部ミガキ・赤色塗彩	口縁部4割程度 破片実測	被熱あり	NI No.177・178・179
Y11	2	弥生	壺	胴~底	—	8.3	(16.3)	剥離	完全実測		炉
	3	弥生	壺	胴~底	—	11.5	(14.5)	ハケ目→ナデ	完全実測		NI No.168 C-Dグ
Y12	4	弥生	甕	胴~底	—	6.1	(4.6)	ミガキ	完全実測		NI No.176
	5	弥生	壺	頸	—	—	—	頸部へラ描矢羽根文 胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測	
D1	6	弥生	壺	頸	—	—	—	櫛描T字文	拓本	断面実測	NI No.177
	7	弥生	甕	胴下	—	—	—	櫛描斜走文 下部ミガキ	拓本	断面実測	NI No.180
D2	8	弥生	高坏	杯	—	—	(3.7)	ミガキ・赤色塗彩	破片実測	被熱あり	NI No.177 炉
	9	石器	磨製石斧形用礫石	—	13.1	6.3	4.1	545.45	上部と正裏に敲打痕	緑色片岩	NI No.173
D3	10	石器	砥石	—	8.3	4.9	1.3	63.32	砥面数3(右側顕著)	砂岩	NI No.174
	11	石器	磨・敲石	—	(23.6)	(9.2)	(6.7)	(2430)	下部欠損 上部部に敲打痕 正裏に磨り面	安山岩	NI No.175
D1	1	弥生	甕	口~胴	—	—	—	ミガキ 磨耗	頸部櫛描横線文 口縁~胴部櫛描斜走文 胴下部ミガキ	中期 拓本	断面実測
	1	弥生	杯	口~底	(13.8)	4.3	6.6	ミガキ・赤色塗彩 磨耗 剥離	口縁部ミガキ・赤色塗彩 底部ミガキ	完全実測	NI No.204 E-13グ
D2	2	弥生	壺	頸	—	—	—	ハケ目	頸部櫛描横線文→櫛描波状文 胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測
	3	弥生	壺	頸	—	—	—	ミガキ	櫛描T字文	拓本	断面実測
D3	4	弥生	壺	頸	—	—	—	ハケ目→ミガキ	櫛描斜走文	拓本	断面実測
	5	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	櫛描波状文	拓本	断面実測
D2	6	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	櫛描波状文	拓本	断面実測
	1	弥生	鉢	口縁	(18.2)	—	(7.2)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	NI No.187
D3	2	弥生	高坏	杯	(27.8)	—	(8.2)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	NI No.182・186
	3	弥生	壺	口縁	19.4	—	(4.0)	ミガキ	ミガキ	つまみ欠損 完全実測	NI No.188・193
D3	4	弥生	壺	口縁	(20.8)	—	(1.9)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	NI No.192
	5	弥生	壺	底	—	5.1	(3.4)	ハケ目	ハケ目 底部ミガキ	完全実測	NI No.183
D3	6	弥生	壺	底	—	(14.4)	(3.5)	剥離	ミガキ	回転実測	NI No.184
	7	弥生	壺	頸	—	—	—	櫛描T字文	拓本	断面実測	
D3	8	石器	使用痕のある剥片	—	6.8	5.0	0.9	32.41	下辺は使用による剥離面か	黒色頁岩	NI No.181
	1	弥生	杯	口縁	—	—	(2.6)	ミガキ・赤色塗彩 剥離	ミガキ・赤色塗彩 磨耗	破片実測	
D3	2	弥生	高坏	杯	—	—	(12.9)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	完全実測	NI No.196
	3	弥生	高坏	脚	—	—	(1.9)	横ナデ	ミガキ・赤色塗彩	透かし 破片実測	
D3	4	弥生	壺	頸	—	—	(14.6)	ハケ目・ナデ 口縁部ミガキ・赤色塗彩	頸部櫛描T字文 口縁部ミガキ・赤色塗彩	回転実測	NI No.196・197
	5	弥生	甕	底	—	11.8	(3.9)	ミガキ	ミガキ	完全実測	NI No.195
D3	6	弥生	甕	底	—	4.9	(3.0)	ナデ	ミガキ	完全実測	
	7	弥生	壺	頸	—	—	—	剥離	頸部櫛描波状文→ミガキ・赤色塗彩	拓本	断面実測
D3	8	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	櫛描波状文	拓本	断面実測
	9	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	櫛描波状文	拓本	断面実測

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			内面	成形・調整		備考	出土位置	
				口径(長)	底径(幅)	器高(厚)		重量(g)	外面			備考
D8	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	櫛描波状文	拓本 断面実測			
	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	櫛描斜走文	拓本 断面実測			
	弥生	甕	頸	—	—	—	ミガキ	胴部櫛描波状文→頸部櫛描籬状文	拓本 断面実測			
	弥生	甕	頸	—	—	—	ミガキ	胴部櫛描斜走文→頸部櫛描籬状文	中期 拓本 断面実測			
	弥生	甕	胴	—	—	—	ナデ→ミガキ?	ハケ目	拓本 断面実測			
	D6	弥生	杯	口縁	—	—	<2.4>	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	破片実測		
		弥生	壺	頸	—	—	—	ハケ目	頸部櫛描横線文 櫛描波状文	拓本 断面実測		
		弥生	甕	胴	—	—	—	ミガキ	胴中位櫛描波状文 下部ミガキ	拓本 断面実測		
		弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	口縁・胴上部櫛描波状文→頸部櫛描横線文	拓本 断面実測		
		D7	弥生	杯	口縁	—	—	<2.1>	ミガキ・赤色塗彩	口縁部ミガキ・赤色塗彩 底部ミガキ	回転実測	
			弥生	壺	底	—	—	(3.8)	ハケ目	ハケ目→ミガキ	回転実測	
			弥生	甕	口~胴	12.9	—	(5.4)	ミガキ	口縁・胴上部櫛描波状文→口縁部ミガキ→胴部櫛描波状文(2連止め)	完全実測	
			弥生	甕	底	—	—	(2.8)	ミガキ	ミガキ	完全実測	
			弥生	甕	底	—	—	(9.2)	ミガキ	ミガキ	回転実測	
弥生			壺	口縁	—	—	—	ミガキ	口唇部縦文 口縁上部櫛描波状文→ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測		
弥生	壺		頸	—	—	—	ミガキ	頸部櫛描籬状文(3連止め)→口縁部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測			
弥生	壺		頸	—	—	—	ミガキ	櫛描丁字文→ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測			
弥生	壺		頸	—	—	—	胴部ハケ目 口縁部ミガキ	頸部へラ描矢羽根文→ミガキ	拓本 断面実測			
弥生	壺		口縁	—	—	—	ミガキ	口唇部縦文 ミガキ	中期 拓本 断面実測			
D8	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	口縁部櫛描波状文→頸部櫛描籬状文(3連止め)	口唇部取り 拓本 断面実測			
	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	櫛描波状文	拓本 断面実測			
	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	頸部櫛描横線文→口縁部櫛描波状文	拓本 断面実測			
	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	口縁部櫛描斜走文	拓本 断面実測			
	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	櫛描斜走文(横方向)	拓本 断面実測			
	弥生	甕	口縁	—	—	—	ミガキ	櫛描斜走文	拓本 断面実測			
	弥生	甕	頸~胴	—	—	—	ミガキ	胴上部櫛描波状文→胴下部ミガキ	拓本 断面実測			
	弥生	甕	口~胴	—	—	—	ミガキ	櫛描波状文	拓本 断面実測			
	弥生	甕	底	—	—	(2.7)	ミガキ	ミガキ	底縁に彫り波状文 回転実測	NI No.47		
	M1	弥生	鉢	口縁	—	—	(5.6)	ミガキ	ミガキ	破片実測	K-9グ	
		弥生	鉢	底	—	—	(3.2)	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測		
		弥生	深鉢	口縁	(16.6)	—	(6.0)	口縁部ミガキ・赤色塗彩 胴部ミガキ	頸部櫛描横線文 剥離 口縁・胴上部ミガキ・赤色塗彩	拓本 回転実測 穿孔×2	A-9グ	
		弥生	壺	底	—	—	5.2	ハケ目 剥離	ミガキ	完全実測	K-9グ	
		弥生	壺	口~底	24.3	—	9.8	口縁部ミガキ 胴部ハケ目	頸部櫛描波状文→へラ描横線文 口縁・胴・底部ミガキ	完全実測	NI No.41・57・58・76・110・114・126・155・160・165	
		弥生	壺	底	—	—	6.3	ハケ目	ミガキ	完全実測	E-4・K-9グ	
	弥生	弥生	甕	口縁	(22.2)	—	(5.7)	ミガキ	櫛描斜走文→頸部櫛描籬状文(2連止め)	回転実測	E-4・K-9グ	
		弥生	甕	底	—	—	(3.4)	ミガキ	ミガキ	完全実測		
		弥生	台付甕	脚	—	—	6.9	胴部ミガキ 脚部ナデ	脚部櫛描波状文→赤色塗彩	脚底部取り 完全実測	NI No.205	
弥生		壺	口縁	—	—	—	ミガキ・赤色塗彩	櫛描波状文→赤色塗彩	拓本 断面実測	F-9グ		

遺構	番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			成形・調整		備考	出土位置	
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面			
M1	11	弥生	深鉢	頸	—	—	—	縹	縹	断面実測	E-4グ	
	12	弥生	壺	頸	—	—	—	剥離	縹	断面実測		
	13	石器	磨石?		(4.4)	(2.4)	(1.7)		縹	硬砂岩		
	14	石器	磨・敲石		15.3	7.1	7.0		縹	チャート	N1 No.206	
	15	石器	磨・敲石		9.5	5.6	3.5		縹	硬砂岩	F-9グ?	
M3	1	弥生	壺	口縁	—	—	—	剥離	縹	断面実測		
	2	弥生	壺	口縁	—	—	—	縹	縹	断面実測		
	3	弥生	壺	胴	—	—	—	縹	縹	断面実測		
M4	1	弥生	杯	口縁	—	—	(4.2)	縹	縹	断面実測		
	2	弥生	壺	口縁	—	—	—	縹	縹	断面実測		
	3	弥生	壺	胴	—	—	—	縹	縹	断面実測		
M5	1	弥生	蓋	口~底	(20.3)	—	(8.7)	縹	縹	断面実測	D7土坑 No.63	
	2	弥生	蓋	つまみ	—	—	(5.1)	縹	縹	断面実測	No.45	
	3	弥生	蓋	つまみ	—	—	(2.3)	縹	縹	断面実測	No.112	
	4	弥生	鉢	口	(19.2)	—	(9.4)	縹	縹	断面実測	No.116	
	5	弥生	鉢	口	(21.0)	—	(5.3)	縹	縹	断面実測	18グ	
	6	弥生	観	底	—	—	(4.9)	縹	縹	断面実測	No.84	
	7	弥生	鉢	底	—	—	(8.2)	縹	縹	断面実測	No.2	
	8	弥生	鉢	底	—	—	6.5	(2.4)	縹	縹	断面実測	No.13
	9	弥生	杯	底	—	—	(3.8)	(4.7)	縹	縹	断面実測	
	10	弥生	杯	底	—	—	(3.4)	(2.7)	縹	縹	断面実測	15グ
	11	弥生	杯	底	—	—	(4.2)	(2.5)	縹	縹	断面実測	19グ
	12	弥生	杯	底	—	—	4.9	2.0	縹	縹	断面実測	22グ
	13	弥生	杯	底	—	—	(4.2)	(2.5)	縹	縹	断面実測	No.169
	14	弥生	杯	底	—	—	3.7	(1.0)	縹	縹	断面実測	
	15	弥生	杯	底	—	—	(5.6)	(1.3)	縹	縹	断面実測	
	16	弥生	杯	底	—	—	(12.8)	(2.6)	縹	縹	断面実測	16グ
	17	弥生	杯	口	(12.8)	—	(2.6)	—	縹	縹	断面実測	
	18	弥生	深鉢	口~胴	(23.2)	—	(15.3)	—	縹	縹	断面実測	
	19	弥生	深鉢	底	—	—	6.6	(2.8)	縹	縹	断面実測	No.93
	20	弥生	深鉢	底	—	—	(6.0)	(2.3)	縹	縹	断面実測	No.62
	21	弥生	高杯	杯	22.0	—	(16.6)	—	縹	縹	断面実測	No.180
	22	弥生	高杯	杯	(25.4)	—	(4.6)	—	縹	縹	断面実測	No.86
	23	弥生	高杯	杯	(29.2)	—	(4.5)	—	縹	縹	断面実測	15グ
	24	弥生	高杯	杯	(27.6)	—	(4.3)	—	縹	縹	断面実測	21グ
	25	弥生	高杯	杯	(22.4)	—	(2.2)	—	縹	縹	断面実測	20グ
	26	弥生	高杯	杯	16.8	—	(9.6)	—	縹	縹	断面実測	No.44・65
	27	弥生	高杯	胴	—	—	(8.2)	—	縹	縹	断面実測	No.130

遺構	番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			成形・調整		備考	出土位置	
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	重量(g)	内面			外面
M5	28	弥生	高坏	脚	—	(13.0)	(9.4)	—	ハケ目 裾部横ナデ	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	No.5
	29	弥生	高坏	脚	—	(14.4)	(8.2)	—	ハケ目 裾部横ナデ	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	22グ
	30	弥生	高坏	頸	—	—	(5.8)	—	杯部ミガキ・赤色塗彩 脚部ナデ	ミガキ・赤色塗彩	完全実測	15グ
	31	弥生	高坏	脚	—	13.4	(13.3)	—	杯部ミガキ・赤色塗彩 脚部ハケ目 裾部ミガキ	ミガキ・赤色塗彩	完全実測	No.185・177 15・16グ
	32	弥生	高坏	頸	—	—	(10.3)	—	杯部ミガキ・赤色塗彩 脚部ハケ目 ナデ	ミガキ・赤色塗彩	完全実測	No.35
	33	弥生	高坏	頸	—	—	(9.6)	—	杯部ミガキ・赤色塗彩 脚部ハケ目 ナデ	ミガキ・赤色塗彩	完全実測	No.118
	34	弥生	高坏	脚	—	(11.5)	(7.7)	—	杯部ミガキ・赤色塗彩 脚部ハケ目 接合ホノ	ミガキ・赤色塗彩	二次加工で裾部脚部取り 完全実測	No.54 15グ
	35	弥生	台付鉢	頸	—	—	(4.0)	—	杯部ミガキ 脚部ナデ	ミガキ・赤色塗彩	完全実測	No.120
	36	弥生	高坏	頸	—	—	(4.1)	—	杯部ミガキ・赤色塗彩 脚部ナデ	ミガキ・赤色塗彩	裾部に加工し、裾部と脚部が 完全実測	No.53
	37	弥生	高坏	頸	—	—	(4.7)	—	杯部ミガキ・赤色塗彩 脚部ハケ目	ミガキ・赤色塗彩	完全実測	15グ
	38	弥生	高坏	頸	—	—	(4.8)	—	杯部ミガキ・赤色塗彩 脚部ハケ目	ミガキ・赤色塗彩	完全実測	No.152
	39	弥生	高坏	頸	—	—	(4.3)	—	杯部剥離 裾部ナデ	ミガキ・赤色塗彩	完全実測	No.152
40-1		弥生	高坏が器台	杯	(8.8)	—	(1.7)	—	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	No.15
40-2		弥生	高坏が器台	脚	—	(10.5)	—	—	ハケ目→ナデ	ミガキ・赤色塗彩	円形跡がハケ目あり 円形跡の中ハケ目 完全実測	No.15
41	弥生	高坏	脚	—	—	8.9	(6.0)	—	杯部ミガキ・赤色塗彩 脚部内面ナデ	ミガキ・赤色塗彩	三角透かし2ヶ 完全実測	No.153
42	弥生	高坏?	脚	—	—	8.3	(3.7)	—	ナデ→裾部ミガキ	ミガキ・赤色塗彩	脚部が厚い 完全実測	No.110
43	弥生	裝飾高坏	脚	—	—	—	(6.4)	—	ハケ目→接合部ナデ	ミガキ・赤色塗彩	回転・破片実測	No.90
44	弥生	高坏	脚	—	—	(9.1)	(5.1)	—	ハケ目→ナデ	ミガキ	完全実測	No.167 西トレ
45	弥生	深鉢	口~脚・底	—	(16.8)	6.2	(20.0)	—	口縁部ミガキ・赤色塗彩 摩耗 胴	頸部裾部塗彩状文(2連止め)→口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩 口縁部4ヶの突起	口縁部穿孔2ヶが所 回転実測	No.145
46	弥生	深鉢	口~底	—	(17.0)	(7.0)	(20.1)	—	口縁部ミガキ・赤色塗彩 磨耗	赤色塗彩 赤彩は大半磨耗	口縁部構成後穿孔2ヶ 完全実測	No.16
47	弥生	壺	口縁	—	31.8	—	(15.3)	—	胴部ミガキ 白色塗彩	頸部裾部塗彩状文(3連止め) 2段 口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩 底部ミガキ	完全実測	No.127・89
48	弥生	壺	口縁	—	23.3	—	(13.5)	—	頸部剥離 口縁部ミガキ・赤色塗彩	頸部裾部塗彩状文(4連止め) 磨損跡 口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	No.27・31・48
49	弥生	壺	口~胴	—	—	—	(20.8)	—	胴部ハケ目 剥離 口縁部ミガキ・赤色塗彩 下部剥離	頸部裾部塗彩状文(3連止め) 3段→口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	No.126 19・20グ
50	弥生	壺	頸	—	—	—	(20.7)	—	胴部ハケ目 剥離 口縁部ミガキ・赤色塗彩 剥離	頸部裾部塗彩状文→裾部塗彩状文→口縁部ミガキ・赤色塗彩	回転実測	No.171
51	弥生	壺	口~胴	—	(34.0)	—	(27.4)	—	胴部ハケ目 口縁部ミガキ・赤色塗彩	頸部裾部塗彩状文(3連止め)→口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩→頸下部 磨損	回転実測	No.62・168・178 16グ
52	弥生	壺	脚~底	—	—	8.3	(16.4)	—	ハケ目	胴上部ミガキ・赤色塗彩 下部ミガキ 底部磨耗	完全実測	No.61
53	弥生	壺	胴上	—	—	—	(15.7)	—	ハケ目	頸部ハケ目剥離 口縁部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	No.183 16グ
54	弥生	壺	胴下	—	—	8.1	(9.6)	—	ハケ目	頸部ハケ目剥離 口縁部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	16・17グ 排水溝
55	弥生	壺	口縁	—	18.0	—	(9.4)	—	頸部ハケ目→ミガキ 口縁部ミガキ・赤色塗彩	頸部裾部塗彩状文(4~5連止め)→裾部塗彩状文 口縁・胴部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	No.123 17グ
56	弥生	壺	口縁	—	(21.0)	—	(5.6)	—	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩 裾部塗彩状文	回転実測	No.23
57	弥生	高坏	口縁	—	(27.6)	—	(4.5)	—	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	回転実測	No.113
58	弥生	壺	口縁	—	(20.6)	—	(3.2)	—	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩 赤彩磨耗	口縁部剥離 回転実測	No.12・25・126・151
59	弥生	壺	胴下	—	7.4	(9.5)	—	—	胴上部ミガキ・赤色塗彩 胴下・底部ミガキ	胴上部ミガキ・赤色塗彩 赤彩磨耗	頸内にペンガラあり 完全実測	No.161
60	弥生	壺	胴下	—	8.3	(8.0)	—	—	胴下部ミガキ 底部磨耗	胴下部ミガキ 底部磨耗	完全実測	No.141・148
61	弥生	壺	胴下	—	8.0	(9.6)	—	—	剥離	胴下部ミガキ・赤色塗彩 底部磨耗	完全実測	

遺構	番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			成形・調整		備考	出土位置	
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	重量(g)	内面			外面
M5	62	弥生	壺	胴上	—	—	(21.2)	—	ニガキ・赤色塗彩	回転実測	No.173	
	63	弥生	壺	胴下	—	(7.4)	(8.3)	ハケ目 剥離	胴下部ミガキ・赤色塗彩 底・胴下部ミガキ	回転実測	No.88 17グ	
	64	弥生	壺	胴下	—	(10.0)	(6.4)	ハケ目 剥離	ミガキ	回転実測	No.173	
	65	弥生	壺	底	—	15.4	(6.5)	剥離	ミガキ	完全実測	No.70・80	
	66	弥生	壺	底	—	(9.6)	(5.1)	剥離	ミガキ	回転実測	No.28	
	67	弥生	壺	底	—	12.8	(4.1)	ナデ	ミガキ	完全実測	No.38	
	68	弥生	壺	底	—	13.2	(2.9)	ナデ・ハケ目	ミガキ	完全実測	No.15	
	69	弥生	壺	底	—	(10.6)	(3.5)	ナデ・ハケ目	ミガキ	回転実測	No.125	
	70	弥生	壺	底	—	10.4	(2.4)	剥離	ミガキ	完全実測	No.78	
	71	弥生	壺	底	—	10.7	(3.4)	ナデ	ミガキ	完全実測	No.86	
	72	弥生	壺	底	—	12.9	(2.9)	ナデ・ハケ目	ミガキ	完全実測	No.102	
	73	弥生	壺	底	—	7.8	(2.9)	ナデ	ミガキ	完全実測	No.64	
	74	弥生	壺	底	—	9.7	(3.1)	剥離	ミガキ	完全実測	No.181	
	75	弥生	壺	底	—	10.4	(6.6)	ナデ	ミガキ	完全実測	No.39	
	76	弥生	壺	胴下	—	(5.2)	(5.8)	ナデ	ミガキ	回転実測	No.22	
	77	弥生	壺	底	—	(10.4)	(5.1)	剥離	ミガキ	回転実測	No.165 西トレ	
	78	弥生	壺	胴～底	—	5.8	(11.3)	磨耗	ミガキ	完全実測	No.140	
	79	弥生	甕	口～胴	22.3	—	(19.3)	ハケ目→ミガキ	口縁・胴上部縞縞波状文 頸部縞縞波状文 (2連止め) 胴下部ミガキ	完全実測	No.24・27・29・31・37・42・47・51 18グ	
	80	弥生	甕	口～胴	16.7	—	(15.4)	ミガキ	口縁・胴上部縞縞波状文 頸部縞縞波状文 (3連止め)	完全実測	No.37	
	81	弥生	甕	口～底	(17.6)	5.7	22.7	ミガキ	口縁・胴上部縞縞波状文 頸部縞縞波状文 胴下部ミガキ	完全実測	No.66・71・73・88・89・90・114 16グ	
	82	弥生	甕	口～底	(17.0)	(6.4)	(22.5)	ミガキ	口縁・胴上部縞縞波状文 頸部縞縞波状文 胴下部ミガキ	回転実測	No.26・108・154	
	83	弥生	甕	口～胴	14.4	—	(17.6)	ミガキ	口縁・胴上部縞縞波状文 (2連止め)→胴上部縞縞波状文 口縁・胴中部ミガキ	完全実測	No.54・68	
	84	弥生	甕	口～胴	9.2	4.7	12.4	ミガキ	頸部縞縞波状文 (2連止め)→胴上部縞縞波状文	完全実測	No.不明	
	85	弥生	甕	口～胴	(17.6)	—	(10.7)	ミガキ	口縁・胴上部縞縞波状文→頸部縞縞波状文	回転実測	No.162	
	86	弥生	甕	口縁	(21.0)	—	(7.0)	ミガキ	縞縞波状文 (乱れた施文)	回転実測	No.10	
	87	弥生	甕	口縁	(20.6)	—	(7.5)	ミガキ	頸部縞縞波状文・口縁部縞縞波状文	回転実測	No.21	
	88	弥生	甕	口縁	16.8	—	(12.7)	ミガキ	口縁部縞縞波状文・頸部縞縞波状文 胴上部縞縞波状文	完全実測	No.71・80・88 16グ	
	89	弥生	甕	口縁	(21.2)	—	(5.8)	ミガキ	口縁部縞縞波状文 頸部縞縞波状文	口縁上部肥厚 回転実測	No.63と同関係 No.174 15グ	
	90	弥生	甕	口縁	(16.2)	—	(6.4)	ミガキ	口縁部縞縞波状文 頸部縞縞波状文 (2連止め)	回転実測	No.4	
	91	弥生	甕	口～胴	(12.4)	—	(7.8)	ミガキ	頸部縞縞波状文 (2連止め) 口縁・胴上部縞縞波状文	回転実測	No.134	
	92	弥生	甕	口～胴	16.5	—	(13.9)	ミガキ	口縁・胴上部縞縞波状文→頸部縞縞波状文 (3連止め) 胴下部ミガキ	完全実測	No.20	
	93								欠番			
	94	弥生	甕	口～底	27.1	11.8	34.5	ミガキ	口縁・胴上部縞縞波状文→頸部縞縞波状文 (3連止め)	完全実測	No.128 17グ	
	95	弥生	甕	口～胴	(28.4)	—	(25.3)	ミガキ	頸部縞縞波状文→口縁 胴上部縞縞斜走文 (縦羽状)	回転実測	No.173 15グ	
	96	弥生	甕	口～胴	(13.8)	—	(13.9)	ミガキ	頸部縞縞波状文 (2連止め)→口縁・胴上部縞縞波状文 胴下部縞縞	回転実測	西トレンヂ	
	97	弥生	甕	胴下	—	7.8	(13.5)	ミガキ	ハケ目→胴中位縞縞波状文 胴下部ミガキ	完全実測	No.129 19グ	
	98	弥生	甕	胴下	—	(8.0)	(7.4)	ミガキ	ミガキ	回転実測	No.98	
	99	弥生	甕	胴下	—	7.6	(8.0)	ミガキ	ミガキ 炭化物付着	完全実測	No.131・156 17グ	

遺構	番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			成形・調整		備考	出土位置
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	重量(g)	内面		
M5	100	弥生	甕	胴下	—	5.3	(5.5)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.173
	101	弥生	甕	底	—	4.4	(2.3)	三ガキ	三ガキ	完全実測	18グ
	102	弥生	甕	底	—	5.5	(3.4)	三ガキ・黒色塗彩	三ガキ・黒色塗彩	完全実測	No.59
	103	弥生	甕	底	—	5.9	(3.1)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.133
	104	弥生	甕	底	—	6.2	(2.3)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.38
	105	弥生	甕	底	—	6.1	(2.7)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.101
	106	弥生	甕	底	—	6.2	(2.3)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.46
	107	弥生	甕	底	—	6.2	(3.6)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.101
	108	弥生	甕	口~底	9.9	5.1	(12.5)	三ガキ	口~胴上部縞縞波状文 胴下部ミガキ・剥離 底部剥離	完全実測	No.19
	109	弥生	甕	底	—	7.1	(3.2)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.17
	110	弥生	甕	底	—	6.8	(4.2)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.101
	111	弥生	甕	底	—	7.0	(3.1)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.176
	112	弥生	甕	底	—	7.3	(4.3)	三ガキ	三ガキ 赤色顔料付着 炭化物付着	完全実測	No.144
	113	弥生	甕	底	—	7.3	(3.4)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.52
	114	弥生	甕	底	—	(7.2)	(3.3)	三ガキ	三ガキ	回転実測	No.54
	115	弥生	甕	底	—	7.5	(2.9)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.99
	116	弥生	甕	底	—	7.7	(2.3)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.16
	117	弥生	甕	底	—	7.7	(2.6)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.72
118	弥生	甕	底	—	8.4	(2.7)	三ガキ	三ガキ	完全実測	No.95	
119	弥生	台付甕	胴下	—	—	(5.5)	三ガキ	胴上部縞縞斜走文(縞羽状) → 下部ミガキ	完全実測		
120	弥生	台付甕	脚	—	(6.4)	(4.8)	胴部ミガキ 脚部ナデ	三ガキ	回転実測	No.36	
121	弥生	台付甕	脚	—	—	(6.3)	胴部ミガキ 脚部ナデ	三ガキ	完全実測	No.83	
122	弥生	台付甕	頸	—	—	(2.9)	胴部ミガキ 脚部ナデ	ナデ → ミガキ	完全実測		
123	弥生	甕	胴下	—	8.8	(11.6)	三ガキ? 剥離	三ガキ 底部へラ削り → わずかにミガキ	完全実測	No.105	
124	弥生	壺	口縁	—	—	—	三ガキ・赤色塗彩	口唇部縄文 口縁ミガキ 赤色塗彩	拓本 断面実測	15グ	
125	弥生	壺	口縁	—	—	—	三ガキ・赤色塗彩	口唇部縄文 口縁ミガキ 赤色塗彩	拓本 断面実測	No.10	
126	弥生	壺	口縁	—	—	—	三ガキ	口縁上端縞縞波状文 口縁ミガキ	拓本 断面実測	18グ	
127	弥生	壺	胴上	—	—	—	八ケ目	胴上部縞縞波状文 → 胴上部ミガキ	拓本 断面実測	No.166	
128	弥生	壺	口縁	—	—	—	三ガキ	頸部縞縞波状文 → 口縁ミガキ	拓本 断面実測	21グ	
129	弥生	壺	頸	—	—	—	剥離	頸部縞縞工字文 → 口縁ミガキ	拓本 断面実測	No.78	
130	弥生	壺	頸	—	—	—	剥離	頸部へラ縞縞斜走文 へラ縞縞線 胴部ミガキ	拓本 断面実測		
131	弥生	壺	頸	—	—	—	八ケ目	頸部縞縞斜走文 → へラ縞縞線 → 胴上部ミガキ	拓本 断面実測	No.100	
132	弥生	壺	胴上	—	—	—	剥離	頸部縞縞斜走文 → へラ縞縞線 → 胴上部ミガキ	拓本 断面実測		
133	弥生	壺	口縁	—	—	—	三ガキ・赤色塗彩・剥離	頸部縞縞斜走文 → へラ縞縞線 → 口縁 胴上部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	18グ	
134	弥生	壺	頸	—	—	—	八ケ目	へラ縞矢羽根文 → へラ縞縞線 → 胴上部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	20グ	
135	弥生	壺	口縁	—	—	—	三ガキ・赤色塗彩	頸部縞縞斜走文 → 縞縞波状文(2連止め) 口縁ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	No.41	
136	弥生	壺	口縁	—	—	—	三ガキ・赤色塗彩・剥離	頸部縞縞斜走文(2連止め) → 口縁ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	22グ	

遺構	番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			成形・調整		備考	出土位置
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	重量(g)	内面		
M5	137	弥生	壺	頸	—	—	—	頸部櫛描波状文(3連止め・3段) 胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	西トレンチ	
	138	弥生	壺	口縁	—	—	—	頸部櫛描波状文(3連止め) → 口縁ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	No.164	
	139	弥生	壺	頸	—	—	—	櫛描丁字文 胴上部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	16グ	
	140	弥生	壺	頸	—	—	—	櫛描丁字文	拓本 断面実測	No.160	
	141	弥生	壺	頸	—	—	—	頸部櫛描波状文 → 胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	No.91	
	142	弥生	壺	頸	—	—	—	頸部櫛描波状文 → 胴部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	No.37・149	
	143	弥生	甕	口~胴	—	—	—	口縁・胴上部櫛描波状文 → 頸部櫛描波状文(2連止め)	拓本 断面実測	No.79	
	144	弥生	甕	口縁	—	—	—	口縁櫛描波状文 頸部櫛描波状文	拓本 断面実測	西トレンチ	
	145	弥生	甕	口縁	—	—	—	口縁部組文 口縁部櫛描波状文	拓本 断面実測	No.10	
	146	弥生	甕	口縁	—	—	—	口縁櫛描波状文 頸部櫛描波状文(1連止め)	拓本 断面実測	19グ	
	147	弥生	甕	口縁	—	—	—	口縁櫛描波状文 頸部櫛描波状文	拓本 断面実測	17グ	
	148	弥生	甕	口縁	—	—	—	口縁・胴上部櫛描波状文 → 頸部櫛描波状文(2連止め)	拓本 断面実測	No.149	
	149	弥生	甕	口~胴	—	—	—	櫛描波状文	拓本 断面実測 口径部取	東トレンチ	
	150	弥生	甕	口縁	—	—	—	櫛描波状文	拓本 断面実測	15グ	
	151	弥生	甕	口縁	—	—	—	櫛描波状文	拓本 断面実測	21グ	
	152	弥生	甕	口縁	—	—	—	櫛描波状文	拓本 断面実測	No.77	
	153	弥生	甕	口縁	—	—	—	口縁櫛描波状文 → 頸部櫛描波状文	拓本 断面実測	18グ	
	154	弥生	甕	口縁	—	—	—	口縁櫛描斜走文(横羽状) 頸部櫛描波状文	拓本 断面実測	No.103	
	155	弥生	甕	口縁	—	—	—	櫛描斜走文(横羽状)	拓本 断面実測	16グ	
	156	弥生	甕	口縁	—	—	—	櫛描斜走文(横羽状)	拓本 断面実測	西トレンチ	
	157	弥生	甕	口縁	—	—	—	頸部櫛描波状文(1連止め) 口縁・胴部櫛描波状文	拓本 断面実測	No.149	
	158	弥生	甕	口縁	—	—	—	櫛描波状文	拓本 断面実測	西トレンチ	
	159	弥生	甕	口縁	—	—	—	頸部櫛描波状文(2連止め) → 口縁・胴部櫛描波状文	拓本 断面実測	15グ	
	160	弥生	甕	口縁	—	—	—	頸部櫛描波状文(1連止め) → 胴上部櫛描波状文 → 胴下部ミガキ	拓本 断面実測	西トレンチ	
	161	弥生	甕	頸~胴	—	—	—	頸部櫛描波状文(2連止め) → 口縁・胴部櫛描波状文	拓本 断面実測	No.129・132	
	162	弥生	甕	頸~胴	—	—	—	口縁・胴上部櫛描波状文 → 頸部櫛描波状文(3連止め)	拓本 断面実測	No.174	
	163	弥生	甕	胴	—	—	—	頸部櫛描波状文 胴部櫛描波状文	拓本 断面実測	15グ	
	164	弥生	甕	胴	—	—	—	口縁・胴部櫛描波状文 → 頸部櫛描波状文	拓本 断面実測	東トレンチ	
	165	弥生	壺	口縁	(18.0)	(5.6)	(4.3)	ミガキ	回転実測	東トレンチ	
	166	弥生	壺	底	—	4.3	(4.3)	ミガキ	完全実測	東トレンチ	
	167	弥生	高坏	脚	—	(11.6)	(5.3)	坏部ミガキ・赤色塗彩剥離 脚部ナデ(ハケ目)	完全実測	東トレンチ	
	168	弥生	高坏	頸	—	—	(4.3)	坏部ミガキ・赤色塗彩 脚部ナデ	完全実測	No.10	
	169	石器	磨石	磨石	7.7	6.2	3.2	正面に磨り面	硬砂岩	No.6	
	170	石器	磨・敲石	磨・敲石	11.9	10.5	6.1	正面に磨り面 縁辺に敲打痕	安山岩	No.142	
	171	石器	敲石	敲石	10.8	9.5	6.4	正裏と縁辺に敲打痕	安山岩	No.172	
	172	石器	敲石	敲石	10.6	7	3	上下端部~裏面に敲打による剥離	頁岩	No.175	
	173	石器	敲石	敲石	9.7	8.6	3.9	正面と縁辺~裏面に敲打による剥離	安山岩	No.155	
	174	石器	磨・敲石	磨・敲石	(10.8)	(10.4)	(4.4)	上側~右側欠損 正面に磨り面 左側に敲打痕	安山岩	No.103	

遺構	番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整		備考	出土位置
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	重 量 (g)	内 面		
M5	175	石器	磨石製品		8.9	7.3	4.5	85.14	全体に磨り 中央に凹	磨石	No.94
	176								欠番		
	177	石製品	丸玉		1.2	1.3	0.6	0.43	孔徑0.15	磨石	No.33
	178	石器	敲石		7.6	3.5	1.8	74.02	上下端部に敲打痕	硬砂岩	
	179	石器	磨石		(5.6)	(5.2)	(1.4)	(70.09)	上部~左側欠損 正面に磨り面	硬砂岩	
	180	石器	磨石		(7.9)	(6.7)	(4.8)	(300.92)	上部欠損 正面と左側に磨り面 被熱あり?	安山岩	M5東トレ
	181	東海系	S字型	口縁	(15.2)		(4.4)		ナデ→口縁ヨコナデ	回転実測	No.107
M6	1	弥生	壺	口縁					ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	
	2	弥生	壺	頸					頸部描波状文→口縁下部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	
	3	弥生	甕	口縁					頸部描波状文	拓本 断面実測	
	4	弥生	甕	口縁					頸部描波状文	拓本 断面実測	
	5	弥生	甕	頸					頸部斜走文	拓本 断面実測	
	1	弥生	鉢	底		6.2			頸部描波状文 頸部描波状文(2連止め)	拓本 断面実測	
	2	弥生	甕	口~胴	(6.8)				胴部ミガキ・赤色塗彩 底部ミガキ? 磨耗 剥離	完全実測	A-12グ
	3	陶器	壺	胴					口縁部描波状文 頸部描波状文(1連止め) 磨耗	回転実測	A-21グ
	4	弥生	甕	底		(6.0)	(3.3)		鉄釉	回転実測	A・B-6グ
	5	弥生	甕	胴					ミガキ	底部被削穿孔1 回転実測	B-10グ
	6	弥生	甕	底		5.3	(2.3)		鋸歯文 刺突充草→ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	B-14グ
	7	弥生	甕	底		(5.0)	(1.4)		ミガキ	底部被削穿孔1 完全実測	C-20グ
	8	弥生	高坏	杯	(21.8)		(6.2)		ミガキ・赤色塗彩	回転実測	C-9グ
	9	弥生	壺	つまみ		3.9	(4.5)		ハケ目→ミガキ 磨耗	回転実測	C-9グ
	10	弥生	甕	口~胴	(13.2)		(9.0)		ミガキ	中央に頸の破綻 内外にあり 完全実測	C-9グ
	11	弥生	壺	頸					口~胴上部描波状文 胴下部ミガキ	回転実測	C-10・11グ
	12	弥生	蓋	つまみ		(6.6)	(6.4)		ヘラ描格子文上下2帯 中間ミガキ・赤色塗彩帯	拓本 断面実測	C-11グ
	13	弥生	壺	口縁	(22.8)		(6.8)		ハケ目→ミガキ	天井に施成削穿孔1 回転実測	C-13グ
	14	弥生	高坏	口縁	(17.8)		4.2		ミガキ・赤色塗彩	回転実測	C-21グ
	15	弥生	甕	口縁					ミガキ・赤色塗彩	回転実測	C・Dグ
	16	弥生	高坏	脚		14.7	(10.3)		口縁・胴上部描波状文 頸部描波状文(1連止め 等間隔)	拓本 断面実測	C・Dグ
	17	土師	壺	口~胴	(16.4)		(9.1)		ミガキ・赤色塗彩 磨耗	完全実測	E-6グ
	18	土師	壺	口縁	(18.8)		(4.5)		胴部ナデ→縦なミガキ 口縁部ナデ→縦なミガキ 胴部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	E-12・J-11グ
	19	土師	壺	口~胴	(12.0)		(7.4)		ミガキ 赤色塗彩付着	回転実測	E-12グ
	20	弥生	高坏	頸			(5.5)		口縁部ナデ・胴部ナデ?→赤色塗彩(縦い)	回転実測	G-11・12グ
	21	弥生	合付甕	胴					杯部ミガキ・赤色塗彩 胴部ヘラナデ(ホノ縁合)	完全実測	I-7グ
	22	弥生	壺	頸					ミガキ	拓本 断面実測	I-11グ
	23	弥生	甕	底			(2.7)		頸部描波状文→胴上部描波状文 胴下部ミガキ	拓本 断面実測	J-10グ
	24	東海系	甕	胴					頸部描波状文 胴部ミガキ・赤色塗彩	底部に施成削穿孔1 回転実測	J-10グ
	25	弥生	甕	口縁					ミガキ	S字型? 拓本 断面実測	J-12グ
									口縁部描斜走文→頸部描波状文	拓本 断面実測	J-12グ

遺構	番号	種類	器種	部位	法量 (cm)		重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置
					口径(長)	底径(幅)		器高(厚)	内面		
グリット	26	弥生	甕	胴	—	—	—	ミガキ	頸部縞縞状文→胴部縞縞状文→円形貼付文	拓本 断面実測	J-13グ
	27	東海系	甕	胴	—	—	—	磨耗	縞縞状文(2連止め)→口縁部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	J-14グ
	28	弥生	壺	頸	—	—	—	剥離	頸部縞縞状文→上段に縞縞状文(2連止め)→口縁部ミガキ・赤色塗彩	拓本 断面実測	K-9グ
	29	弥生	台付甕	脚	—	(10.6)	(4.5)	ハラナデ	ナデ・ハラナデ 磨耗	回転実測	K-9グ
	30	弥生	台付甕	脚	—	(4.8)	(4.1)	杯部剥離	杯部剥離 脚部ハラナデ	完全実測	K-9グ
	31	弥生	甕	口~胴	(17.4)	—	(11.0)	ミガキ	頸部縞縞状文(3連止め)→口縁・胴部縞縞状文	回転実測	L-9グ
	32	須恵	杯	口	(11.4)	—	(4.6)	横ナデ	横ナデ ロクロナデ	回転実測	M・Nグ
	33	弥生	壺	底	—	15.3	(4.1)	剥離	胴部ミガキ 底部ハラナデ→僅かにミガキ	完全実測	N-16グ
	34	弥生	杯	口~底	(12.6)	3.7	5.8	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩 底部ミガキ・赤色塗彩	完全実測	検出
	35	弥生	高坏	頸	—	—	(3.1)	ミガキ・赤色塗彩	頸部ハケ目→ミガキ・赤色塗彩	回転実測	検出
	36	弥生	壺	頸	—	—	—	胴部ハケ目→口縁部ミガキ	頸部縞縞状文(3連止め×2段) 口縁・胴部ミガキ	拓本 断面実測	検出
	37								欠番		
	38	東海系	S字甕	口	(14.4)	—	(4.4)	頸部縞縞目→ナデ→口縁部ヨコナデ	胴部縞縞目 口縁部横ナデ	回転実測	餅田遺跡Dトレ
	39	弥生	壺	口	(26.2)	—	(8.5)	口縁部ミガキ・赤色塗彩 剥離	口唇部縞縞文 口縁部縞縞文3段 縞縞状付文 刻み目 口縁下部ミガキ	完全実測	57年度分布調査
	40	石器	砥石		(11.4)	(2.5)	(62.37)		右側欠損 正面に条痕	砂岩	A-6~8グ
	41	石器	敲石		9.1	6.5	257.67		正裏・上端部に敲打痕	安山岩	B-13グ
	42	石器	磨石		(9.5)	(2.3)	(38.32)		周囲欠損 正裏とも磨り面あり	粘板岩	B-22グ
	43	石器	磨・敲石		7.7	7.0	329.05		正面に敲打痕 上部に磨り面	花崗岩	C-6・7グ
	44	石器	磨製石鏃		(3.9)	(2.0)	(2.84)	孔径 (0.2cm)	先端・基部欠損	片岩	C-20グ
	45	石器	磨・敲石		(5.1)	(7.3)	(4.5)		下部欠損 上端部に敲き、正面に磨り面	凝灰岩	C-5グ
	46	石器	敲石		9.6	4.6	2.7	162.51	上下端部に敲打痕	硬砂岩	G-8グ
	47	石器	磨石		8.9	5.4	2.3	149.73	正面と右側に磨り石	硬砂岩	G-8グ
	48	石器	軽石製品		6.5	4.1	2.4	23.50	全体に磨り 条痕あり	軽石	I-18グ
	49	石器	敲石		9.0	5.8	4.0	282.88	正裏に敲打痕	安山岩	I-20グ
	50	石器	軽石製品		5.0	4.8	3.6	37.55	全体に磨り 上部剥離 下端部に敲打痕	軽石	Z
	51	石器	軽石製品		4.1	4.0	1.9	17.54	全体に磨り	軽石	Z
	52	石製品	粉挽き臼(上臼)		(26.9)	(13.5)	(9.6)	(3970)	径不明 芯棒孔径(3.0) 供給孔(2.5×2.5)の方形? 周囲欠損(cm)	安山岩	Z
	53	銅製品	古銭		2.3	—	0.1	2.47		寛永通宝	A-1グ
	54	石器	砥石		(5.6)	(3.0)	(2.1)	(52.18)	下部欠損 砥面数4 両側に条痕	流紋岩	E-9グ
	55	石器	編物石		12.0	5.8	3.2	350.41		安山岩	Z
	56	石器	敲石		7.5	6.2	3.5	221.41	正面に敲打痕	安山岩	Z



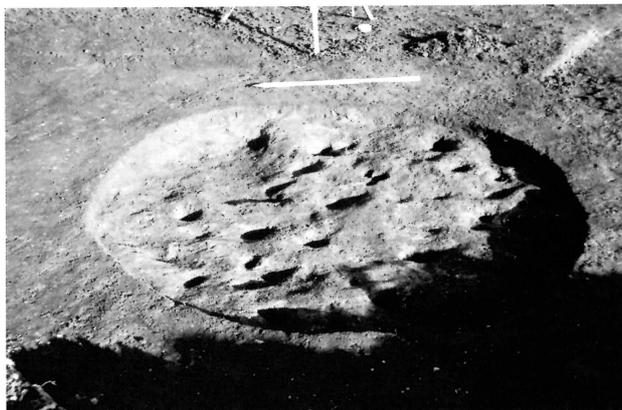
Y 1 付近 (南より)



Y 6 ・ M 1 ・ D 3 ・ D 7 (南より)



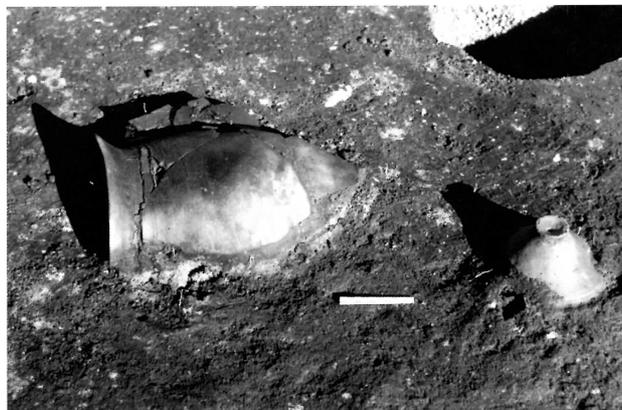
Y 8 ・ Y 11, Y 7 ・ D 2 (東より)



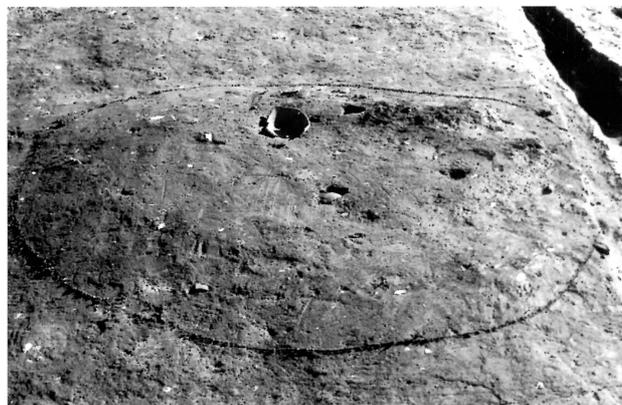
Y 12 完掘 (南より)



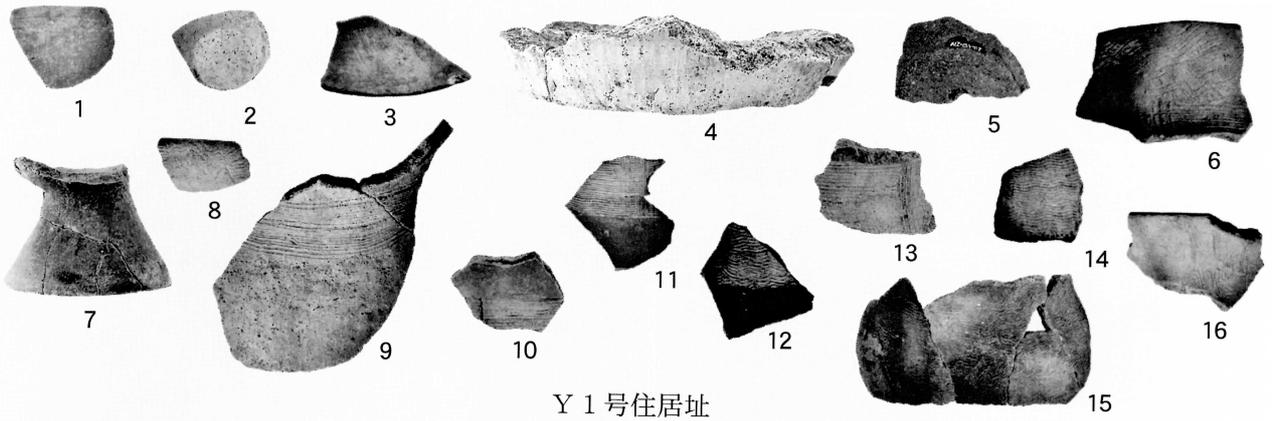
M 1 全景 (南より)



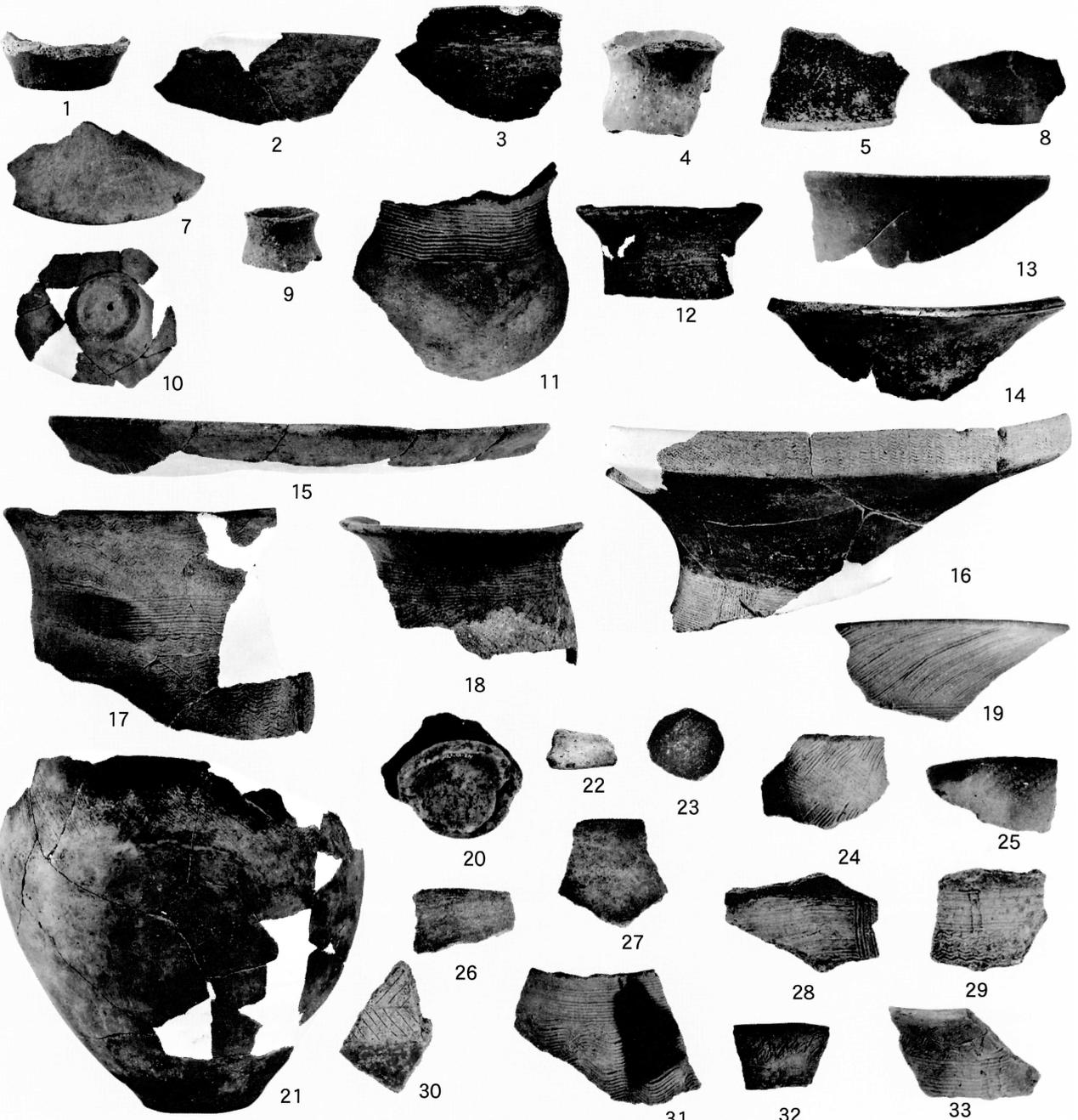
Y 8 - 48 ・ 2 出土状況 (西より)



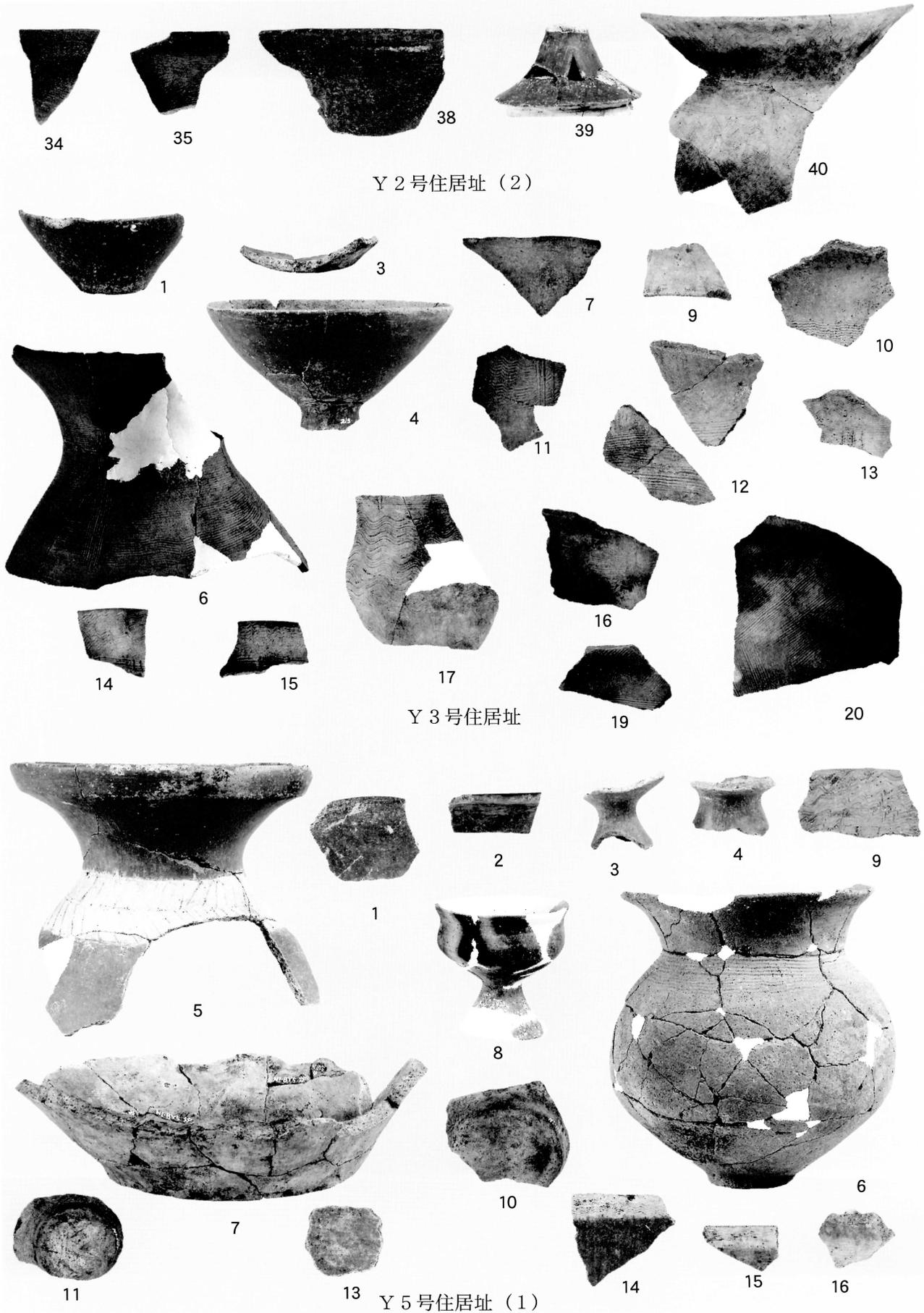
D 1 プラン検出状況 (北より)

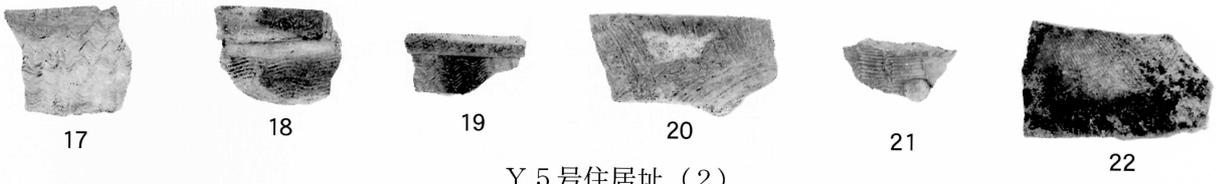


Y 1 号住居址

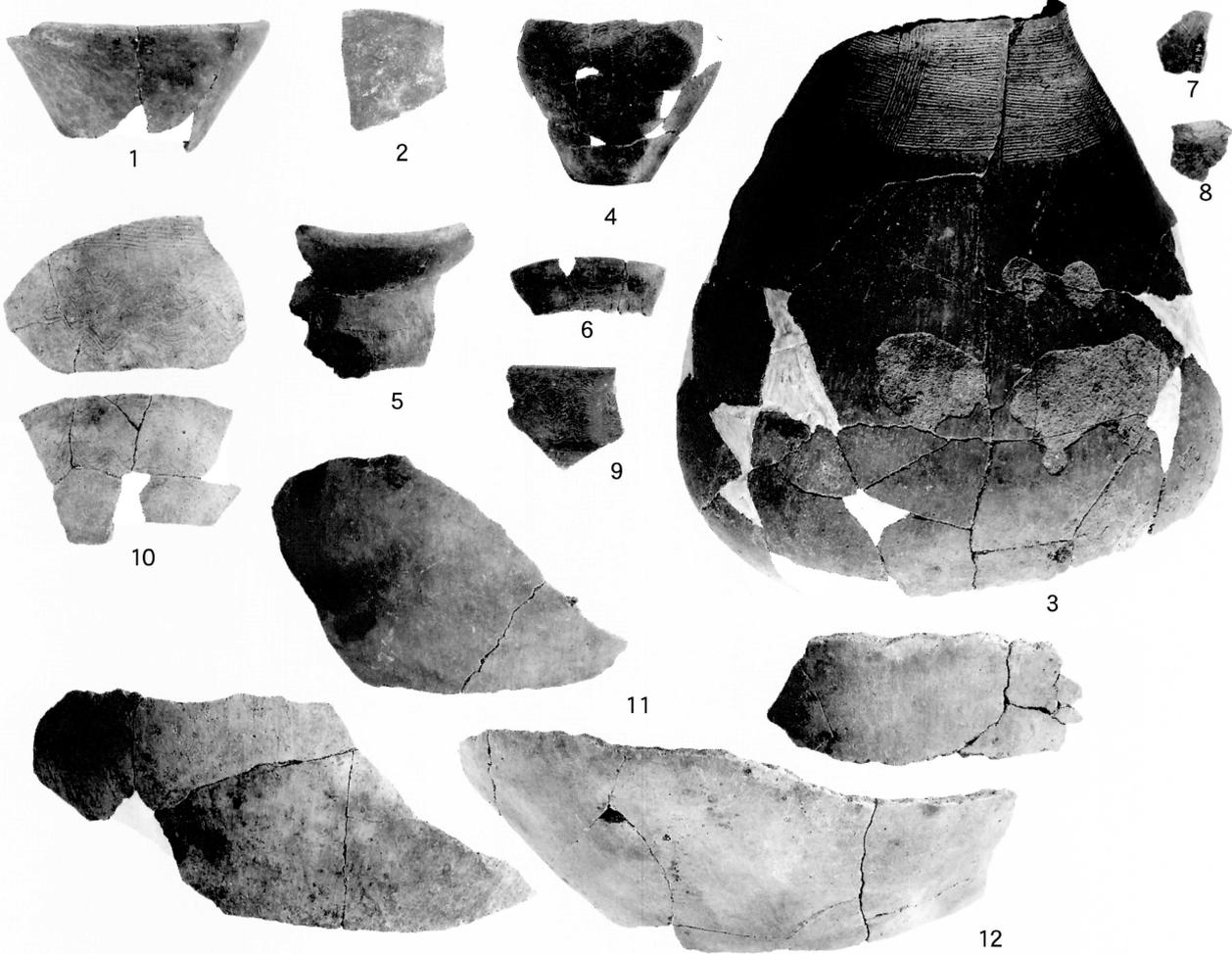


Y 2 号住居址 (1)

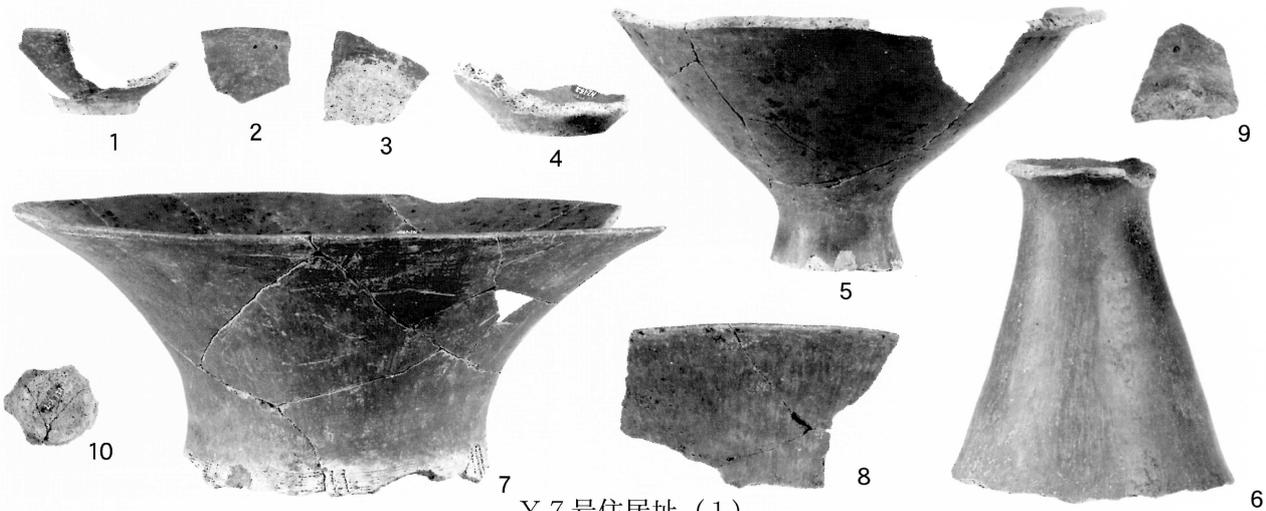




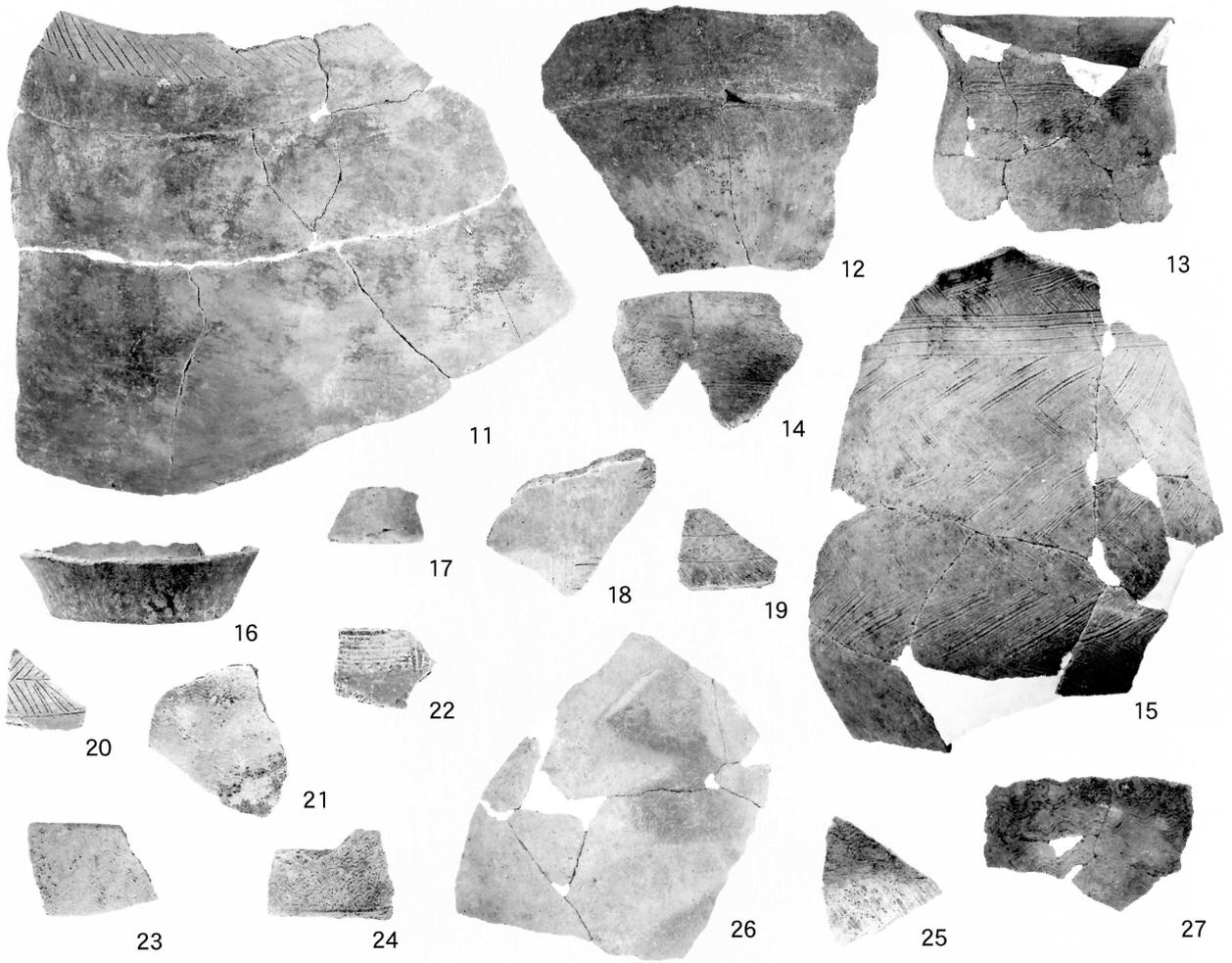
Y 5 号住居址 (2)



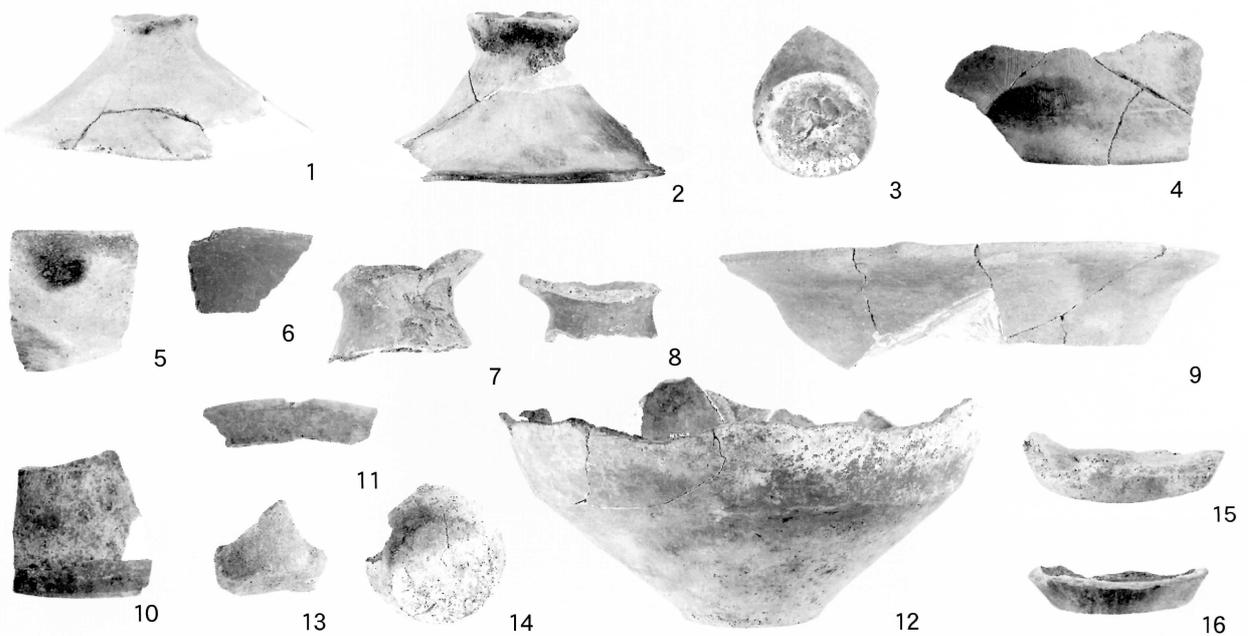
Y 6 号住居址



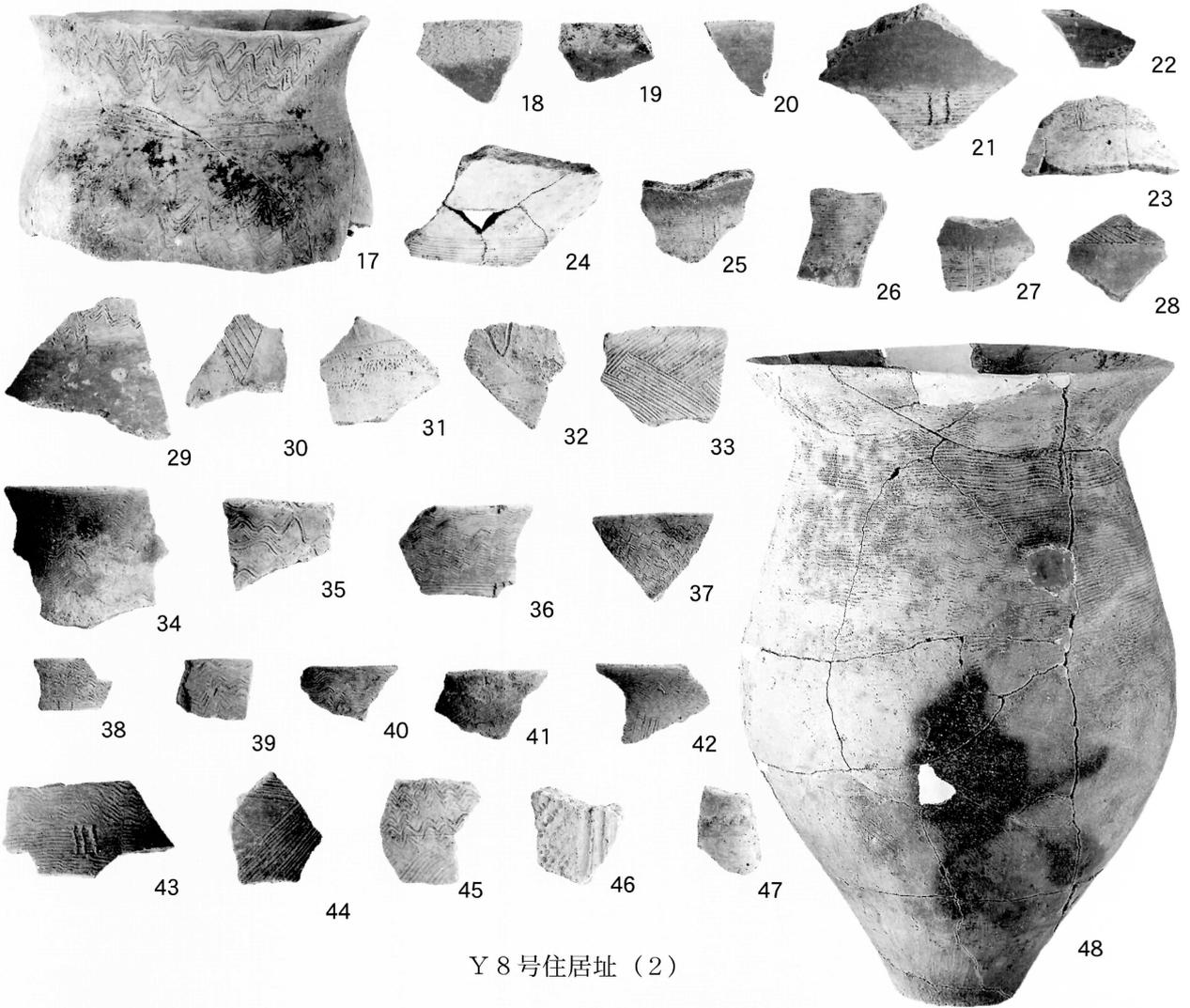
Y 7 号住居址 (1)



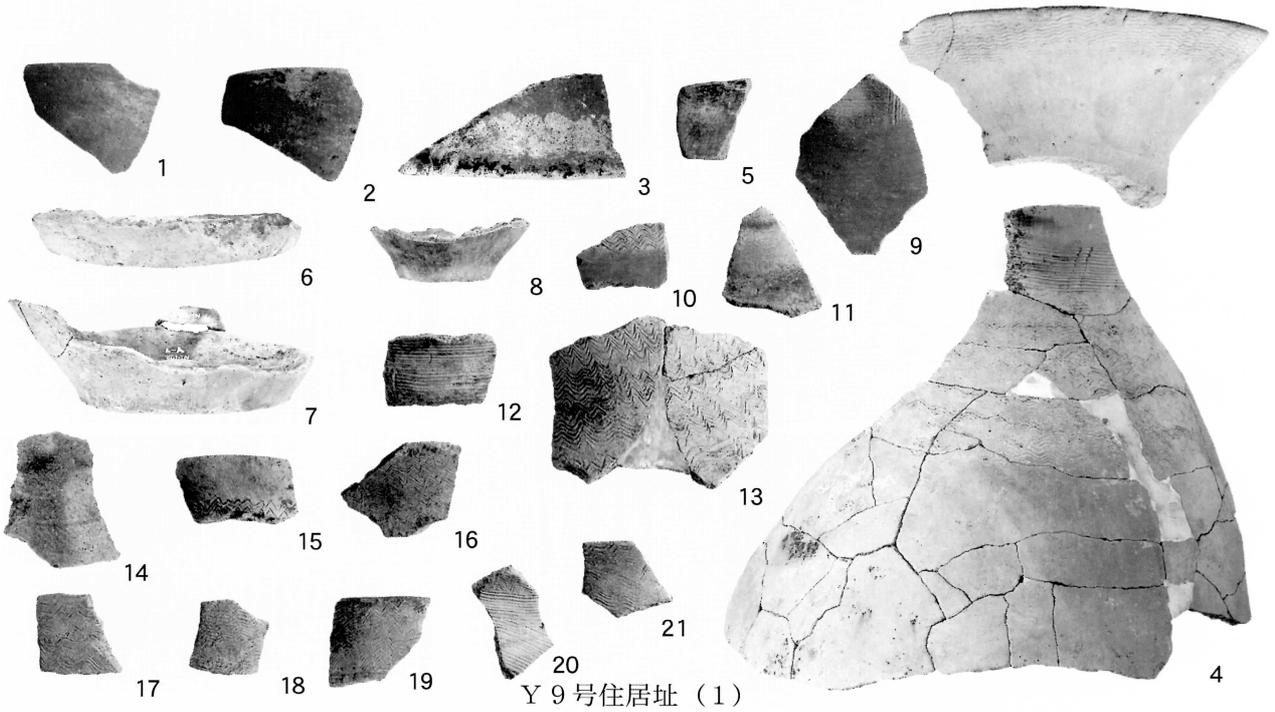
Y 7 号住居址 (2)



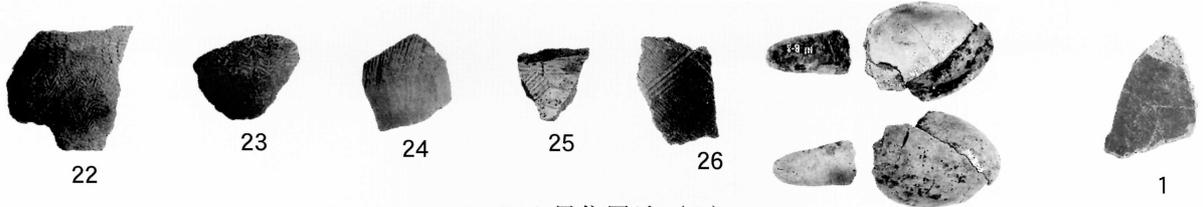
Y 8 号住居址 (1)



Y 8号住居址 (2)



Y 9号住居址 (1)



Y 9 号住居址 (2)

Y 10 号住居址



Y 11 号住居址

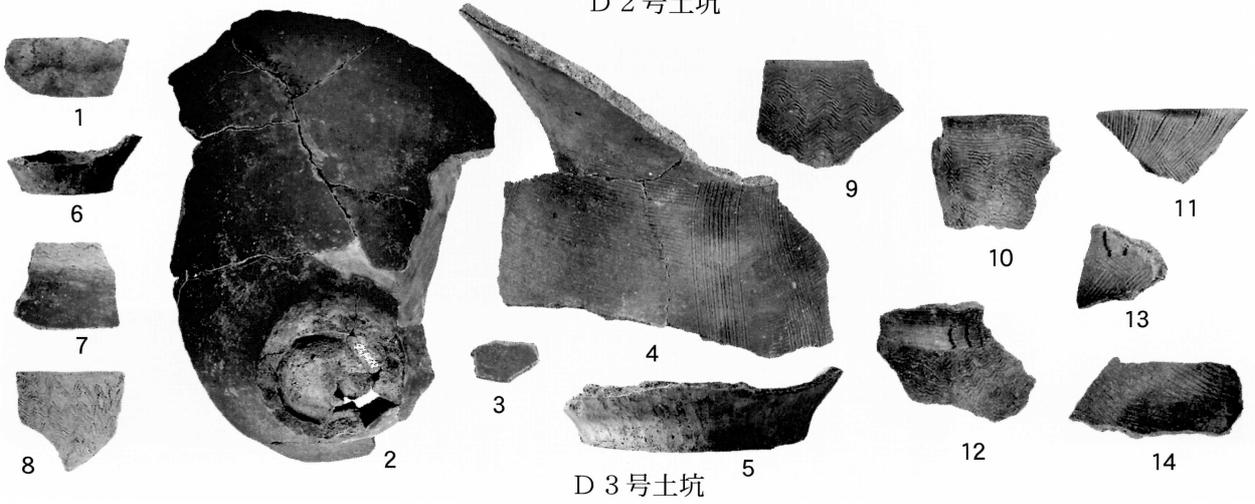


Y 12 号住居址

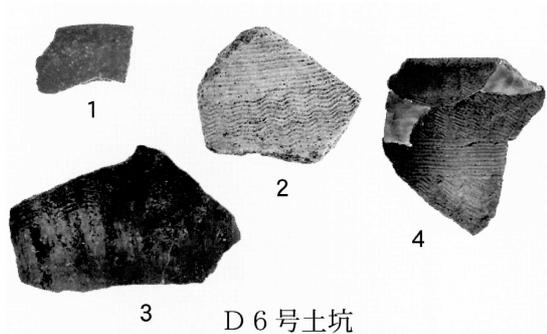
D 1 号土坑



D 2 号土坑



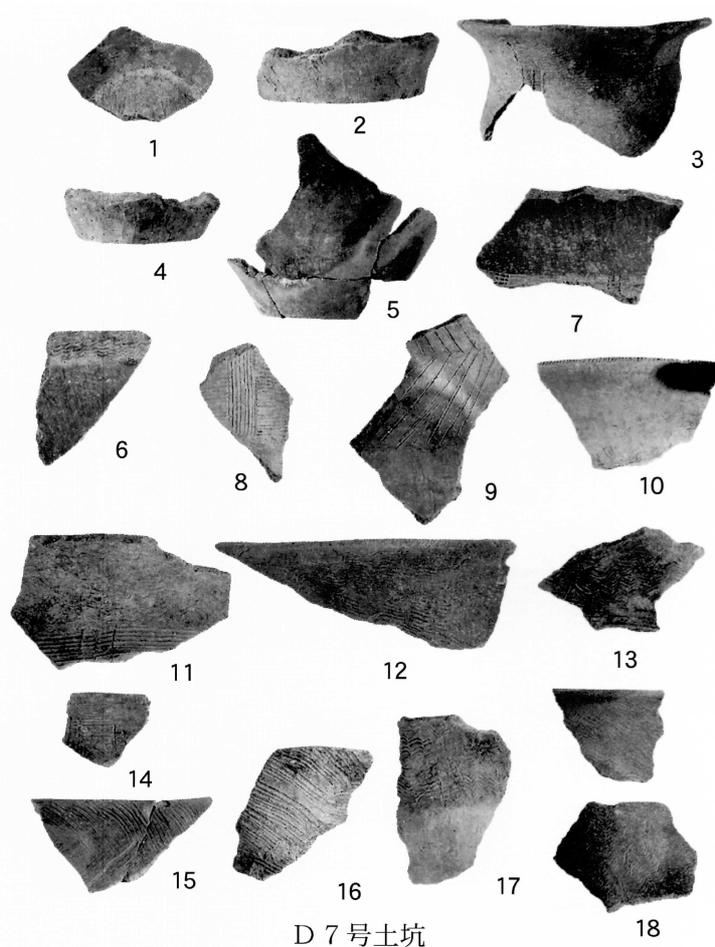
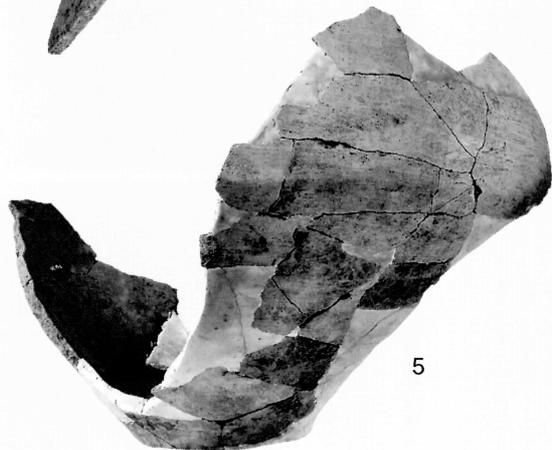
D 3 号土坑



D 6 号土坑



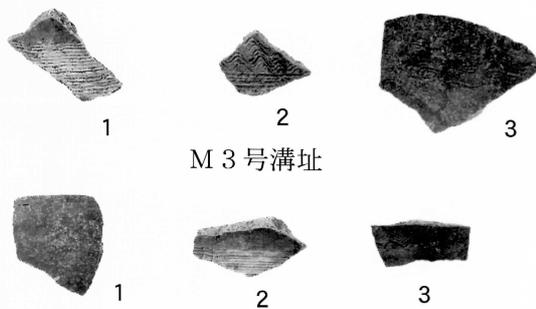
D 8 号土坑



D 7 号土坑



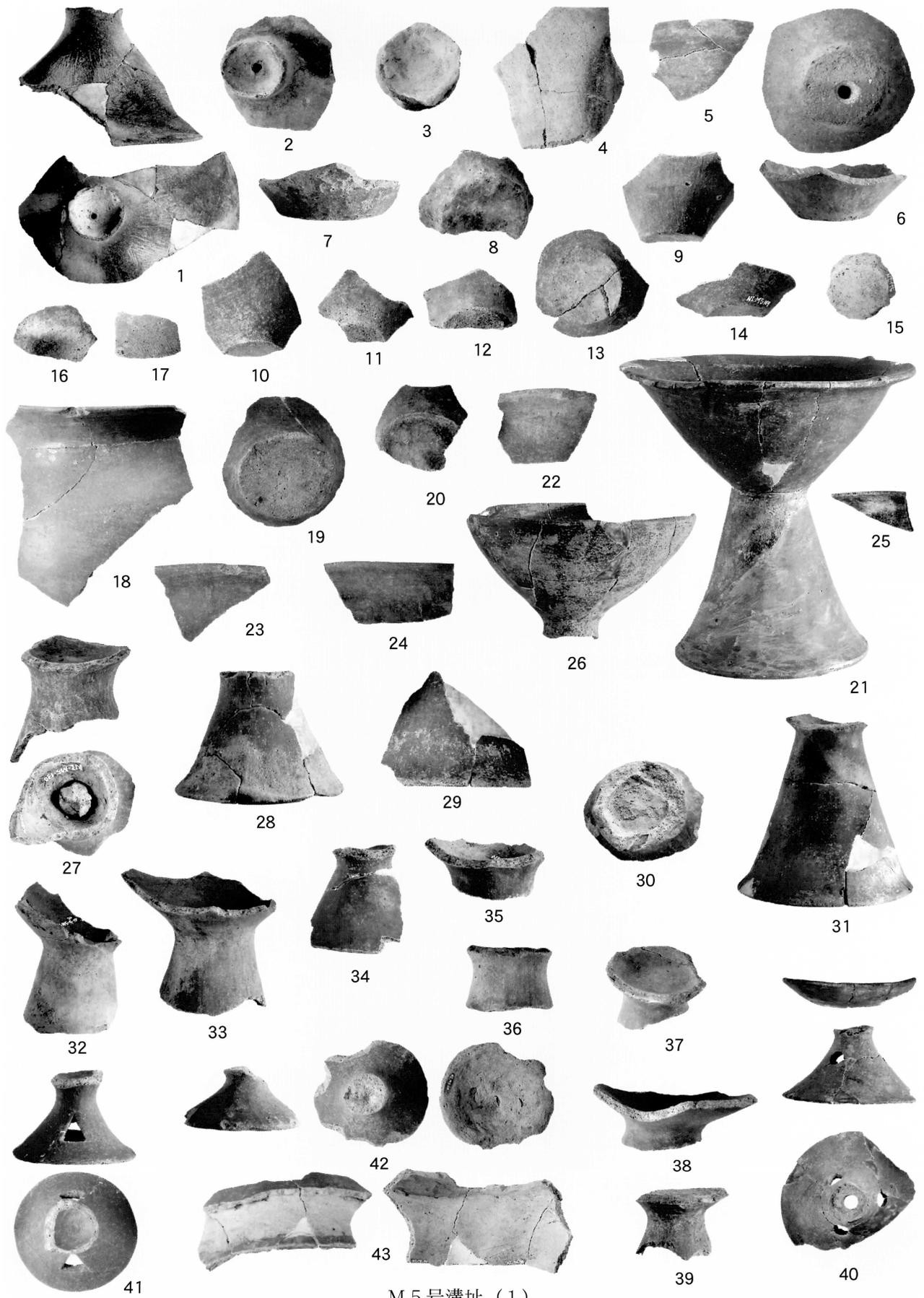
M 1 号沟址



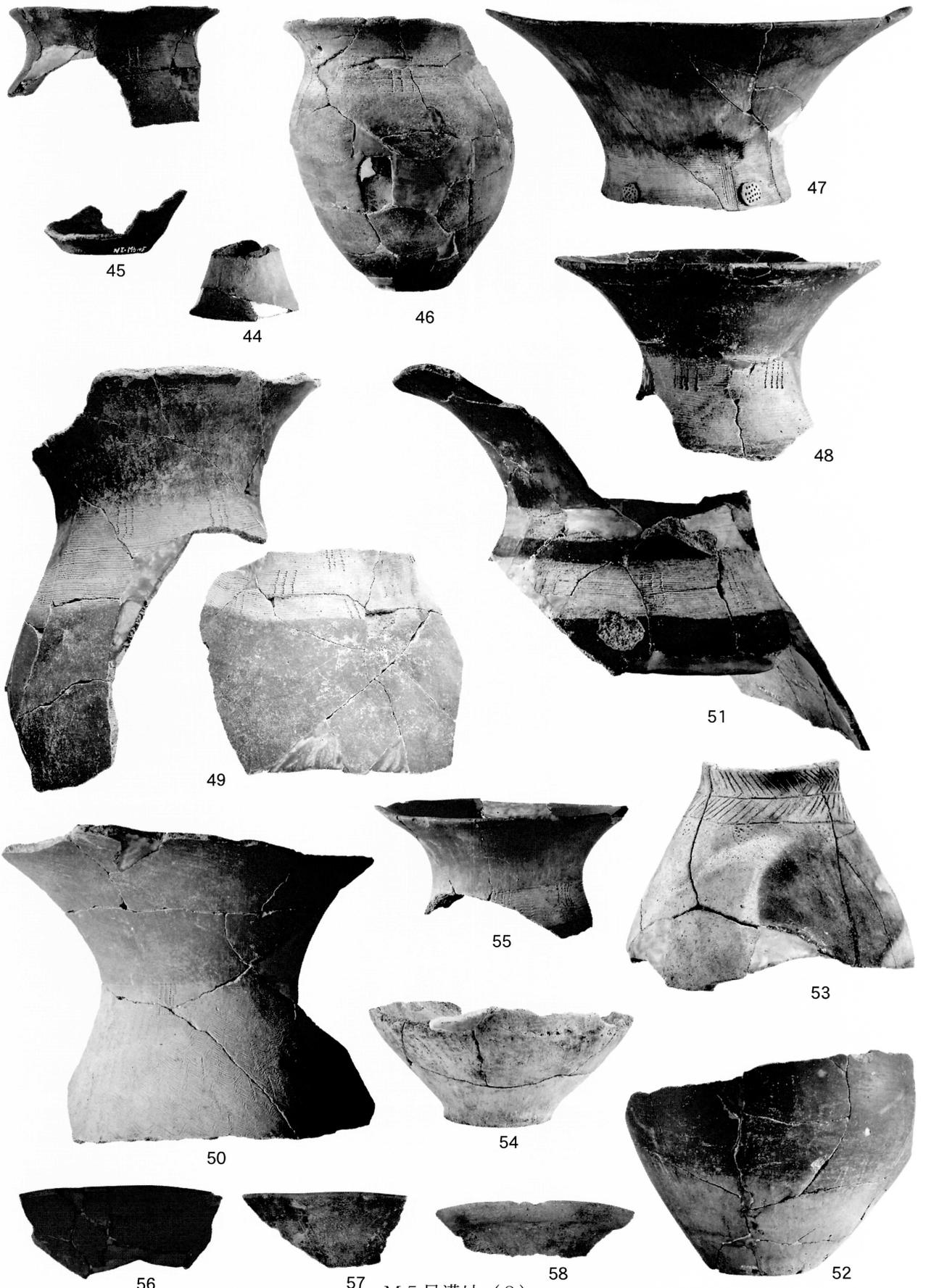
M 3 号沟址



M 4 号沟址

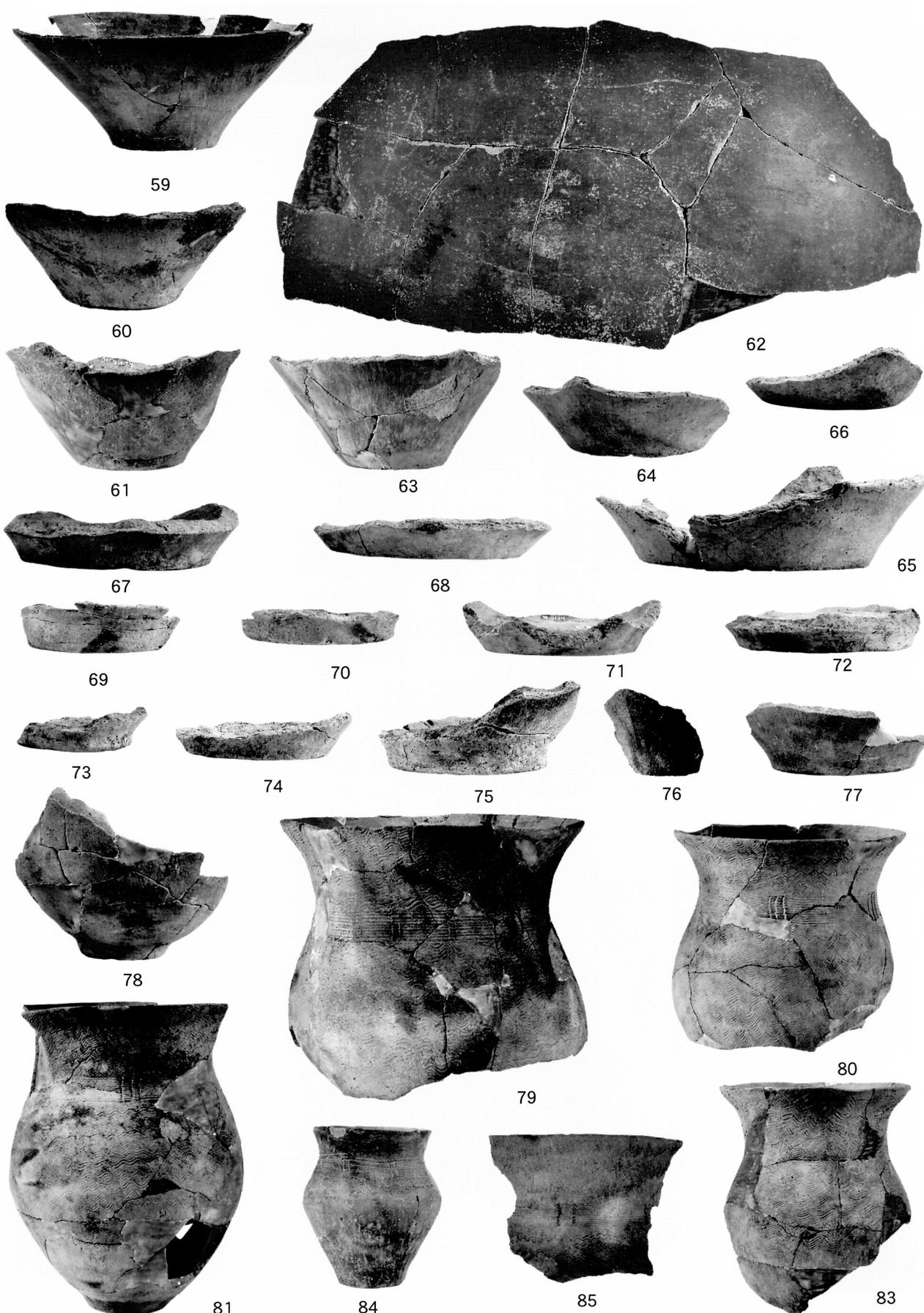


M 5 号沟址 (1)

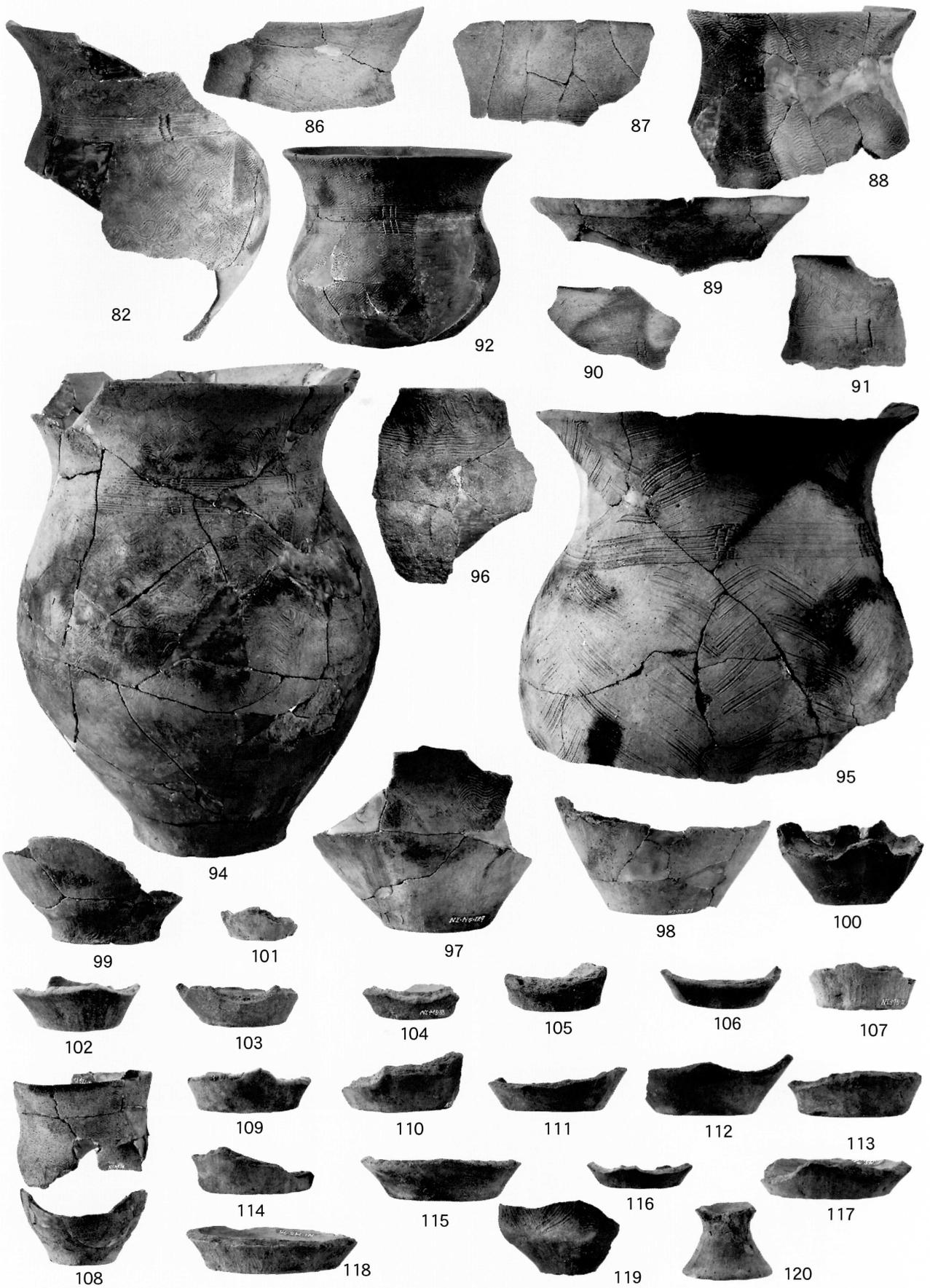


M 5 号沟址 (2)

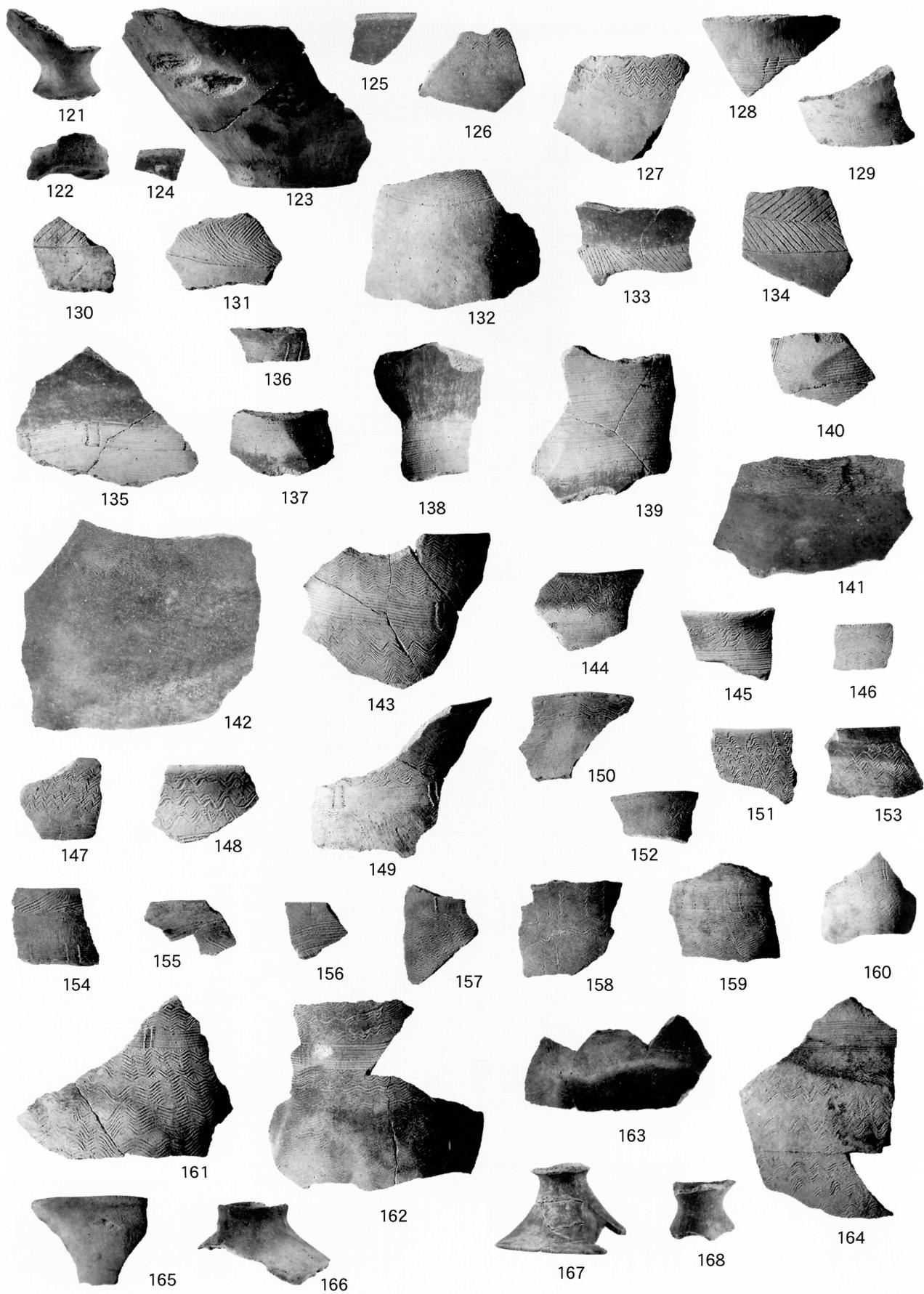
图版
11
M
5
(3)



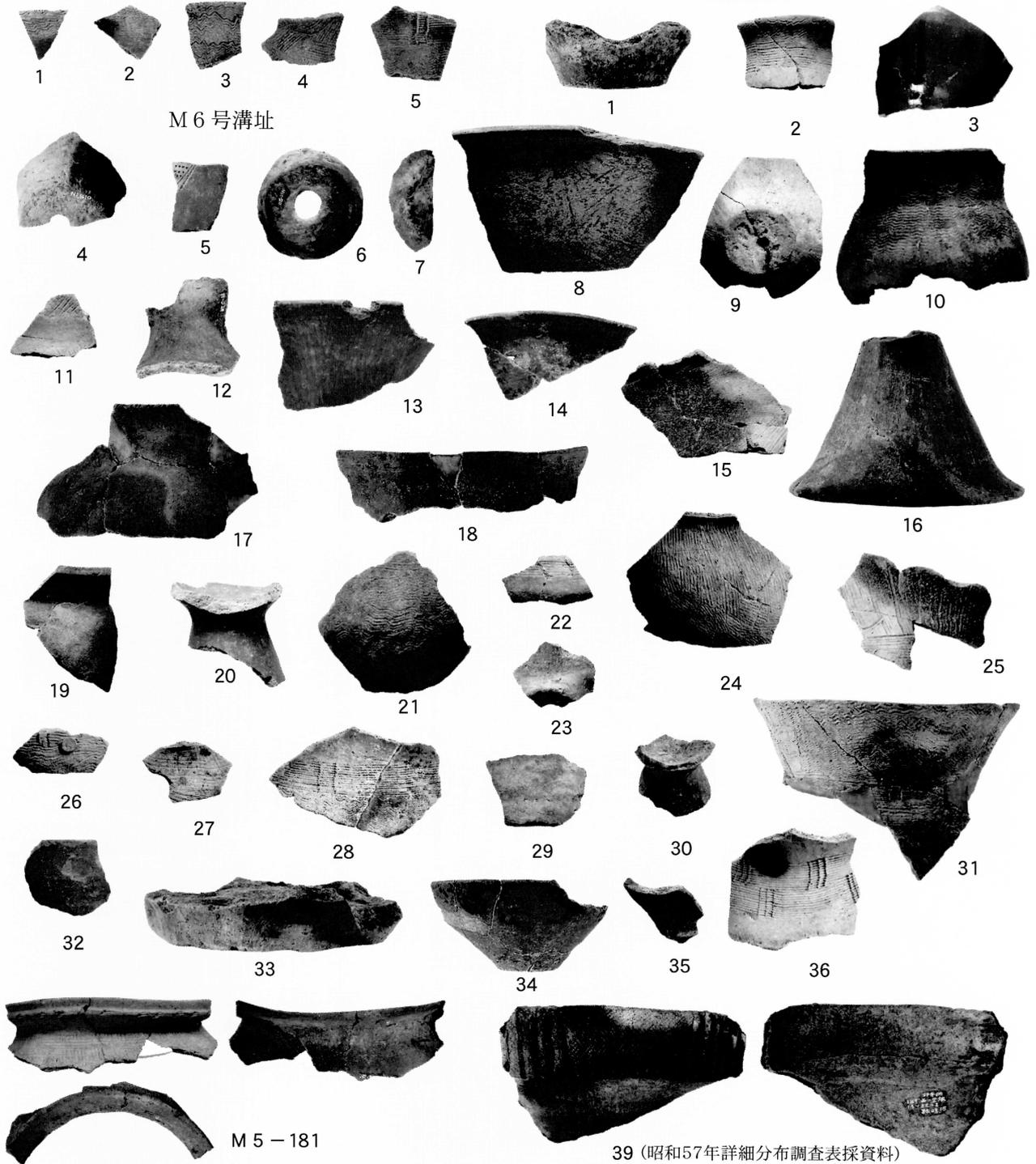
M 5 号沟址 (3)



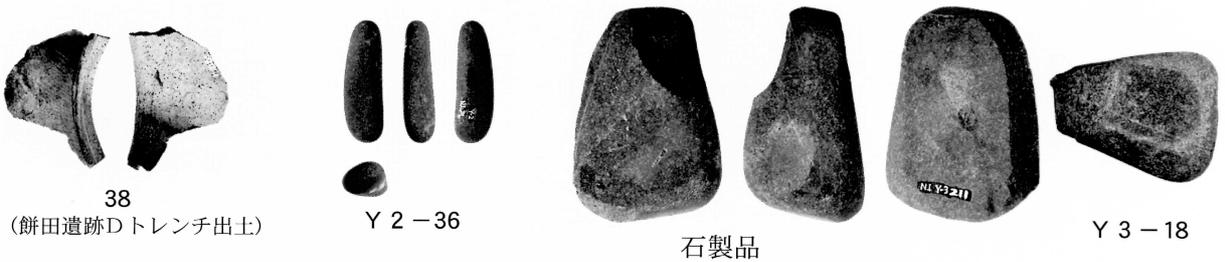
M5号沟址 (4)



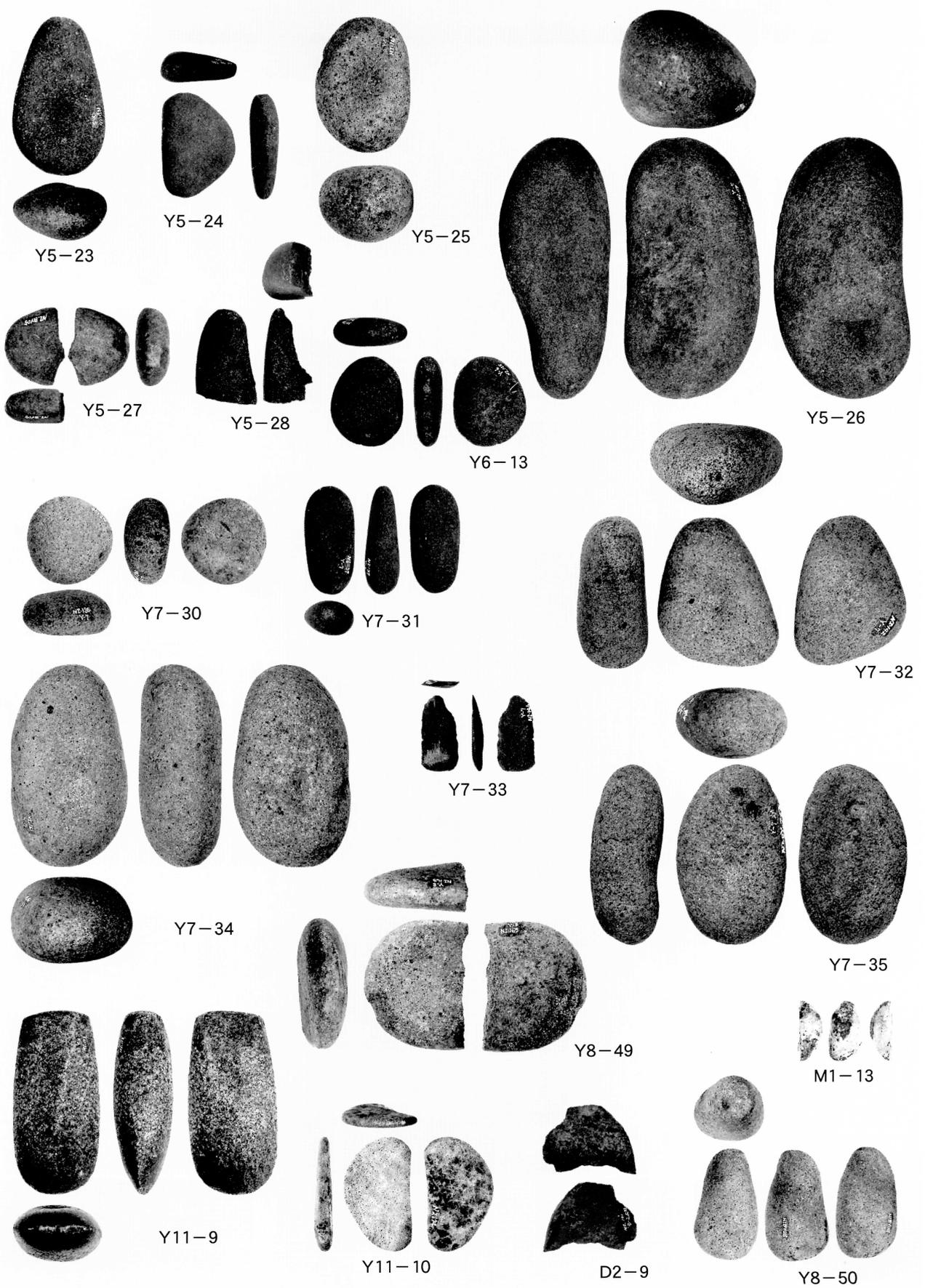
M5号沟址(5)



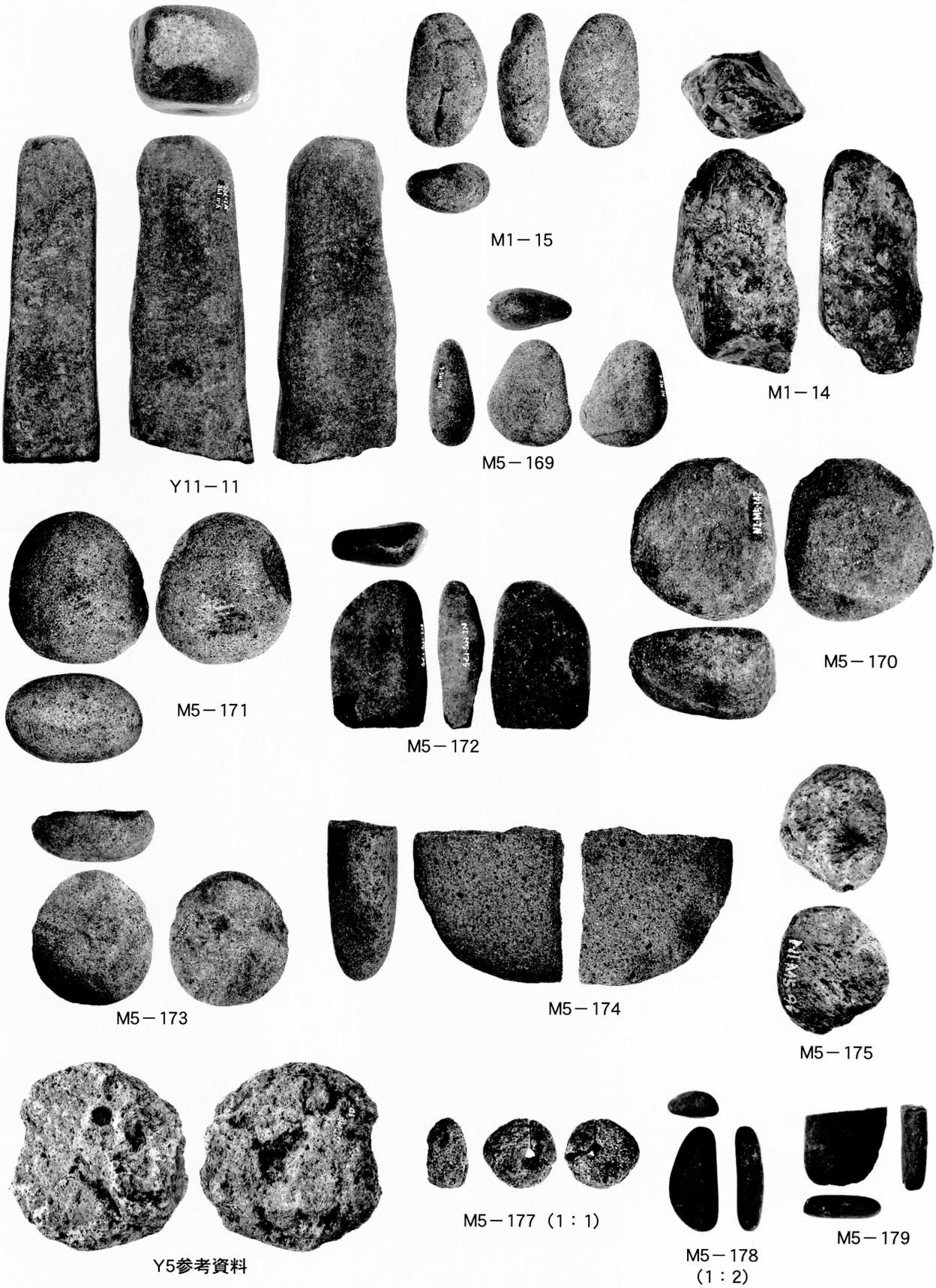
M5-181・グリッド・表採



図版
15
石製品 (2)



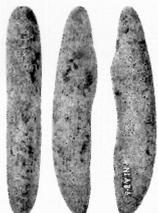
石製品 (2)



石製品 (3)



M5-180



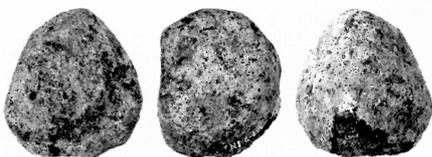
グリッド-40



グリッド-41



グリッド-42



グリッド-43



グリッド-44 (1:1)



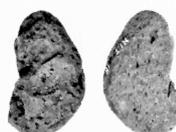
グリッド-45



グリッド-46



グリッド-47



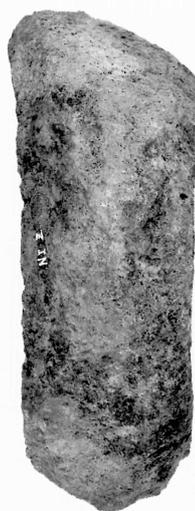
グリッド-48



グリッド-49



グリッド-50



グリッド-52



グリッド-51



グリッド-54



グリッド-56



グリッド-55



Y2-37



グリッド-53

石製品 (4)

古銭 (1:1)

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第225集

西一里塚遺跡 I

2014年9月

編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込3056
社会教育部 文化財課
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953
TEL 0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限公司

報告書抄録

ふりがな	にしいちりづかいせきいち
書名	西一里塚遺跡 I
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書 第225集
編著者名	森泉かよ子
編集機関	佐久市教育委員会
発行年月日	20140930
郵便番号	3850002
住所	長野県佐久市志賀5953
電話番号	0267-68-7321
ふりがな	にしいちりづかいせき
遺跡名	西一里塚遺跡 I
ふりがな	ながのけんさくしいわむらだあざにしいちりづか
遺跡所在地	長野県佐久市岩村田字西一里塚
遺跡番号	佐久市 92
北緯	36° - 16' - 2" (世界測地系)
東経	138° - 27' - 24" (世界測地系)
調査期間	昭和48年10月29日～11月30日
整理期間	昭和49年3月20日～29日・昭和49年4月29～5月6日・平成25・26年度
調査面積	960㎡
調査原因	長野県営佐久市北部地区圃場整備事業及び小規模河川改良事業
種別	集落・環濠
主な時代	弥生時代後期
遺跡の概要	集落－弥生時代後期－竪穴住居址＋土坑＋溝址＋ピット－弥生後期土器＋土製匙＋石製品 環濠－弥生時代後期－溝址＋弥生後期土器＋石製品